

埼玉から未来へ！
サーキュラーエコノミーで育む地域の力

第18回 3R推進全国大会

in
埼玉

埼玉県環境整備センター（寄居町）

開催報告書

- 開催日 令和6年10月24日（木）
- 会場 さいたまま市プラザノース ホール

令和7年2月

第18回3R推進全国大会実行委員会

環境省、環境省関東地方環境事務所、埼玉県、3R・資源循環推進フォーラム

目 次

1. 大会概要	1
2. 式典	
(1) 主催者挨拶 環境大臣政務官 国定勇人氏、埼玉県知事 大野元裕氏、 3 R・資源循環推進フォーラム副会長 崎田裕子氏	4
(2) 来賓挨拶 埼玉県議会副議長 松澤正氏	6
(3) 表彰式 令和6年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰	7
令和6年度3 R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰	8
3. 記念シンポジウム	
「サーキュラーエコノミーによる地域活性化と質の高い暮らしの実現に向けて」 ～目指すべき循環型社会の将来像～	
(1) 基調講演「サーキュラーエコノミーの達成に向けた各主体の役割」	10
3 R・資源循環推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、 慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授 細田衛士氏	
(2) 特別講演「埼玉県が目指すサーキュラーエコノミー」 ～持続的な発展に向けた環境と経済の両立～	19
埼玉県知事 大野元裕氏	
(3) 事例報告「浦和レッズ SDGs サーキュラーエコノミーの取り組み」	25
浦和レッドダイヤモンド株式会社コーポレート本部スタジアム運営担当 早川拓海氏	
(4) パネルディスカッション「地域におけるサーキュラーエコノミーの推進と実践」 ～持続可能な未来への道筋～	29
<コーディネーター> 3 R・資源循環推進フォーラム副会長、ジャーナリスト、環境カウンセラー、 全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会会長 崎田裕子氏	
<パネリスト> 大日本印刷株式会社情報イノベーション事業部環境ビジネス推進部部长 西村知子氏 株式会社木下フレンド代表取締役社長 木下公次氏 株式会社 ECOMMIT 取締役 CSO 坂野晶氏 国立環境研究所資源循環社会システム研究室室長 田崎智宏氏	
(5) 閉会挨拶 3 R・資源循環推進フォーラム副会長 梶原成元氏	47
4. 関連イベント	
(1) イグナイトステージ（参加者交流のための特設ステージ）	48
(2) 3 R推進展示コーナー	48
(3) 施設見学会	50
5. 資料	
(1) 第18回3 R推進全国大会開催案内（参加申込書）	51
(2) 第18回3 R推進全国大会ポスター	52
(3) 参加者用パンフレット	53
(4) 参加者アンケート	54
(5) 報道掲載記事	68

1. 大会概要

- 開催日時 令和6年10月24日(木) 13:00~17:00
- 会場 さいたま市プラザノース ホール(埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852番地1)
- 主催 環境省、環境省関東地方環境事務所、埼玉県、3R・資源循環推進フォーラム

●大会プログラム

(1) 大会式典(13:00~14:00)

- ・主催者挨拶 環境大臣政務官 国定勇人氏
埼玉県知事 大野元裕氏
3R・資源循環推進フォーラム副会長 崎田裕子氏
- ・来賓挨拶 埼玉県議会副議長 松澤正氏
- ・表彰式 循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰
3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

(2) 記念シンポジウム(14:00~17:00)

「サーキュラーエコノミーによる地域活性化と質の高い暮らしの実現に向けて」

～目指すべき循環型社会の将来像～

- ・基調講演
「サーキュラーエコノミーの達成に向けた各主体の役割」
3R・資源循環推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、
慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授 細田衛士氏
- ・特別講演
「埼玉県が目指すサーキュラーエコノミー」～持続的な発展に向けた環境と経済の両立～
埼玉県知事 大野元裕氏
- ・事例報告
「浦和レッズSDGs サークュラーエコノミーへの取組」
浦和レッドダイヤモンド株式会社コーポレート本部スタジアム運営担当 早川拓海氏
- ・パネルディスカッション
「地域におけるサーキュラーエコノミーの推進と実践」～持続可能な未来への道筋～
＜コーディネーター＞
3R・資源循環推進フォーラム副会長、ジャーナリスト、環境カウンセラー、
全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会会長 崎田裕子氏
＜パネリスト＞
大日本印刷株式会社情報イノベーション事業部環境ビジネス推進部部長 西村知子氏
株式会社木下フレンド代表取締役社長 木下公次氏
株式会社E COMMIT取締役CSO 坂野晶氏
国立環境研究所資源循環社会システム研究室室長 田崎智宏氏
- ・閉会挨拶 3R・資源循環推進フォーラム副会長 梶原成元氏

(3) 関連イベント

- ・イグナイトステージ（参加者交流のための特設ステージ） | 10月24日（木）17:15～18:30
場所：さいたま市プラザノース 2階 多目的ルーム
- ・3R推進展示コーナー | 10月24日（木）12:00～18:30
 - ・循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー
場所：さいたま市プラザノース 2階 多目的ルーム
 - ・令和6年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞作品展示コーナー
場所：さいたま市プラザノース ホール前
- ・施設見学会 | 10月25日（金）9:00～12:35
見学先：「彩の国資源循環工場」
Aコース オリックス資源循環株式会社、ツネイシカムテックス株式会社
Bコース 株式会社エコ計画、株式会社ウム・ヴェルト・ジャパン

●大会参加者数

- ・会場参加者 333名
- ・ライブ配信申込者 122名
(アーカイブ閲覧数205回/令和7年1月28日(火)現在)

●会場風景



さいたま市プラザノース



参加者の受付



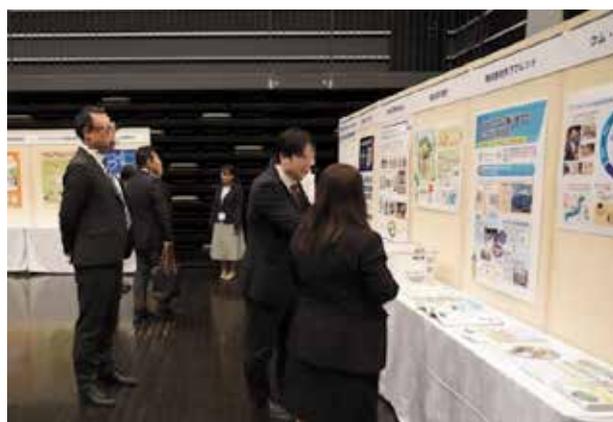
大会式典の様子

記念シンポジウムの様子



イグナイトステージの様子

循環型社会形成に関連する
先進的な取組の展示コーナーの様子



3R促進ポスターコンクール最優秀賞
作品展示コーナーの様子

2. 式典

(1) 主催者挨拶

●国定勇人氏（環境大臣政務官）

皆様こんにちは。只今ご紹介をいただきました環境大臣政務官を仰せつかっております国定と申します。本日は第18回3R推進全国大会に全国各地から大勢の皆様方にご参加をいただき誠にありがとうございます。また、大会開催にあたりご尽力をいただきました埼玉県大野知事をはじめとする埼玉県の皆様方、関係団体の皆様方に対し心より感謝を申し上げます。大会の開催にあたり環境省を代表して一言ご挨拶を申し上げます。



循環型社会の形成に向けて、資源生産性、資源利用率を高める取組を一段と強化するためには、従来の延長線上の取組を強化するのではなく、大量生産・大量消費・大量廃棄型の資源から廃棄物までが一方通行となる線形経済から、資源を効率的・循環的に有効利用する持続可能な循環経済に移行することが不可欠です。循環経済は廃棄物を資源として活用し、天然資源利用を最小化することでカーボンニュートラルや生物多様性の保全にも貢献します。また、これまでコストをかけて処理してきた廃棄物を付加価値の源泉となる資源としてリユース・リサイクルに活用することで、地域経済の活性化や豊かな暮らしの実現、産業競争力の強化や資源制約、経済安全保障への対応にも繋げることができます。

政府としては、今年7月に初めて循環経済に関する閣僚会議を設置し、循環経済への移行を前面に打ち出した第五次循環型社会形成推進基本計画を国家戦略に位置付けるとともに、年末までに具体的な取組を政策パッケージとして取りまとめる決定をしました。今後、関係省庁との連携を強化し、政府をあげて循環経済の推進に取り組んでまいります。

18回目を迎える本大会は、このように循環経済への移行に向けた取組が加速化するなかで、大野知事を筆頭とし、新しい挑戦に取り組まれている埼玉県での開催となっており、埼玉県での様々な新たな取組をきっかけに、国民・事業者・地方公共団体・国などのすべての関係者との連携を深めながら、我が国全体に循環経済への移行に向けた取組を拡大していく絶好の機会であると考えております。本大会の成功を祈念し、私からの挨拶とさせていただきます。

●大野元裕氏（埼玉県知事）

ご紹介いただきました、埼玉県知事の大野元裕でございます。本日は3R推進全国大会 in 埼玉が、国定勇人環境大臣政務官をはじめとする多くの皆様とともに開催されますことを心よりお喜び申し上げますとともに、多くの皆様に全国各地からお集まりいただき、改めて埼玉県へのご来訪を歓迎申し上げます。



さて、持続可能で環境にやさしい日本や地球を未来へとつなげる責任をともに担っていただいている皆様に対して、改めて心から感謝と敬意を表したいと思っております。そしてその一環として、本日表彰を受けられる皆様、おめでとうございます。私ども埼玉県としても、事業者や行政単独では解決できない環境問題を可能な限り多くの方々とともに考えていくこのような大会が有意義に開催できますこと大変嬉しく思っています。今回の大会におきましては、先ほど政務官からお話ございましたとおり、リニアエコノミーからサーキュラーエコノミー、循環経済をいかに作っていくかが大きなテーマになると伺っております。埼玉県としても、これまで循環経済のリーディングモデルに対する補助金の交付や、ワンストップで相談をいただき課題解決や販路拡大に対して適切にお答えをしていく、マッチングを行う、サーキュラーエコノミ

一推進センターを昨年の6月にオープンさせていただき、おかげ様で60件以上のマッチングが成功し、持続的な経済に向けて次のステップへと歩みを進めているところでございます。埼玉県としても、このようにサプライチェーンが多く地域に拡大している今日においては、可能な限り日本全体あるいは世界全体で協力を進める必要があると考えており、ぜひ皆様の引き続きのご尽力とご指導をいただけますようお願いを申し上げます。

結びになりますが、埼玉県は今年の7月3日に発行された新1万円札渋沢栄一翁の出生の地であります。まさにSDGs日本の先駆が渋沢栄一翁であり、この渋沢栄一翁が印刷されました1万円札を存分にお使いになってお帰りいただけるようお願いを申し上げて、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

●崎田裕子氏（3R・資源循環推進フォーラム副会長）

ただいまご紹介いただきました3R・資源循環推進フォーラム副会長を務めさせていただいております崎田と申します。本日は第18回3R推進全国大会の開催にあたり、全国から関係する方々にお集まりいただきありがとうございます。また、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰を受賞の皆様、そして3R促進ポスターコンクールの最優秀賞を受賞の皆様、本日はおめでとうございます。この機会に、ぜひいろいろな方とネットワークを組んで益々3Rの推進を広めていただければありがたいと思っております。



この3R推進全国大会は毎年10月の3R推進月間に開催していますが、今回は埼玉県の皆様から応援をいただき、この地で開催することができました。大野知事をはじめ県の皆様、準備などに奔走していただきまして心から御礼申し上げます。

私ども3R・資源循環推進フォーラムは、これまで3R活動推進フォーラムという名前で活動しておりましたのを、本年4月に移行し新たなスタートを切りました。経緯を少しお話させていただきたいと思っております。

ごみ減量化や3Rの取組の歴史を振り返りますと、経済成長に伴うごみの増大の中で、国民、事業者、行政が一体となって、ごみの減量化、資源化が求められてきました。そのなかで、平成4年に「ごみ減量化推進会議」が設立され、それがフォーラムという形で現在まで継続しております。令和の時代に入り、資源・エネルギーや食糧の需要の増大、プラスチックごみをはじめとする廃棄物の発生量の増加が世界全体の課題となつてまいりました。廃棄物分野の脱炭素化の強化、追加的なプラスチック汚染をゼロにすること等を世界で約束し、取組が今熱心に広まっていると考えております。資源を徹底的に循環利用するためには、3Rにかかる取組に加えて、現在のサーキュラーエコノミー、こういう流れをしっかりと作っていくことが大変重要で、これまで以上にステークホルダーの皆様の情報共有、相互連携が重要になってくると考えています。本年4月、新しく組織の名前を3R・資源循環推進フォーラムに変え、皆様とともに、市民・事業者・行政・研究機関が一体となったプラットフォームとして、新しいサーキュラーエコノミーの時代に対応するような形にしていこう、という強化策ということで歩んでまいりました。

このフォーラムですが、現在、自治体80会員、民間団体66会員、あわせて146団体で構成されています。今日も3R推進展示コーナーで展示を行っていただいております、ありがとうございます。具体的な活動としては、この「3R推進全国大会」の開催、「3R促進ポスターコンクール」、そして民間団体と連携して毎年全国各地で様々な研修会・セミナーなどを開催してきました。このような取組を続けながら、このネットワークをしっかりと続けていきたいと思っております。

先ほど来、国、県からもお話がありましたが、国の「第五次循環型社会形成推進基本計画」がこの8月に閣

議決定されました。そして再資源化事業等高度化法が成立し、今年5月に公布されました。サーキュラーエコノミー、資源循環を達成していく法整備が矢継ぎ早に進んだという状況になっています。このようななかで、3R・資源循環推進フォーラムが的確にこの状況をとらえながら、これまで以上に環境省の皆様、自治体の皆様、民間団体の皆様、様々な関係団体の皆様とともに、循環型社会の形成に向けて活動を広めていきたいと思っております。本日はこれからいろいろ行事が続きます。しっかりと皆様と共有させていただきながら、今日を機会に一步ずつ広めてまいりたいと思っております。今日は皆様お集まりいただきありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

(2) 来賓挨拶

●松澤正氏（埼玉県議会副議長）

ただいまご紹介を賜りました埼玉県議会副議長の松澤正でございます。第18回3R推進全国大会の開催にあたり、県議会を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

まずは開催にご尽力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。本大会が本県で開催されることを大変嬉しく思っております。ご参会の皆様におかれましては、日頃、循環型社会の形成に関し多大なるご尽力を賜り厚く御礼を申し上げます。そしてこの度、表彰の栄に浴される皆様、誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

3R（リデュース・リユース・リサイクル）は、持続可能な社会を目指す上で不可欠な取組です。私たちの暮らしや経済活動が環境に与える負荷を最小限に抑え、次世代に豊かな地球を引き継ぐためには3Rの推進が益々重要になってきています。今日のこの大会は、3Rに関する最新の知見や優れた事例を共有し、全国各地での取組をさらに進化させる重要な機会です。参加者の皆様がここで得られた情報や知識を持ち帰り、それぞれの地域や分野での3R推進に活かしていただけることを期待します。

埼玉県議会といたしましては、これまで自然再生・循環社会対策特別委員会を立ち上げ、循環型社会の形成に向けて活発な審査を行ってまいりました。また、生物多様性の保全、ネイチャーポジティブの観点から、資源の循環利用や製品のライフサイクル全般での環境負荷低減を支援することを求める意見書を提出するなど、国への働きかけも行ってまいりました。引き続き様々な議会活動を通じて、また、関係者の皆様と連携し、持続可能な社会を目指して全力を尽くしてまいります。

結びに本日の3R推進全国大会が、参加者の皆様にとりまして有意義な時間となりますことと、ご参会の皆様のご健勝、ご活躍を祈念しまして私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。



(3) 表彰式

●令和6年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰は、先駆的又は独創的な取組により、循環型社会の形成について顕著な成果を上げている企業、団体又は個人に対して、環境省が毎年表彰しているもので、令和6年度は、企業の部4件、6社が大会で表彰されました。受賞者と功績内容は以下の通りです。

3 R活動優良企業

推薦者	氏名等	功績内容
埼玉県	ウム・ヴェルト株式会社	<p>食品企業の製造工場から廃棄された食品ロスを回収し、提携リサイクル施設で飼料や肥料に加工。平成26年には農業生産法人を設立し、リサイクル肥料を使用した農産物の生産を開始。平成30年には養豚業を開始し、食品残渣を給餌した豚を生産・出荷する等、6次産業＋リサイクルを融合させた「食品リサイクルループ」を実現することで、独自の7次産業化を目指す。</p> <p>また汚れが付着した廃プラスチックのポリ袋も、石炭の代替燃料となる独自の「燃料化リサイクル」を行いCO2の削減に貢献。更に収集運搬においても計量器付き大型車両で高効率なルート回収を行い、燃料使用量と併せてCO2排出量も削減し、脱炭素社会への貢献に向けて取り組んでいる。</p>
福岡県	株式会社新菱	<p>太陽光パネルの大量廃棄時代を見据え、平成22年からNEDO、環境省実証事業で研究開発を行い、独自の熱分解方式と高度選別の組み合わせによる高度リサイクル技術を開発。令和5年にはリサイクルプラントを設置し、事業を開始。アルミ枠、ガラス板、銅線、シリコンセル等を回収し、廃棄物ゼロを実現、ガラスは板ガラス、アルミ、銅、銀等の金属は精錬用原料として用途開発を行い、資源循環に貢献している。また、廃棄パネルのうち使用可能なパネルのリユースへの取組を推進している。</p>
福岡県	株式会社キューヘン	<p>柱上変圧器の修理又は廃棄時に発生する使用済み絶縁油の再生処理技術開発を平成28年から開始し、令和3年には事業化。再度絶縁油として使用するための低負荷・低コストなりサイクルシステムを構築し、福岡県のみならず九州全域から回収している。</p> <p>令和5年度までの実績は約1,500キロリットルとなり、約27,000台の柱上変圧器にリサイクル絶縁油を適用している。</p>

<p>3 R ・ 資源循環 推進 フォー ラム</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州環境プラントサービス株式会社 ・豊田環境サービス株式会社 ・株式会社エコクリエイト大阪 	<p>3社は、平成16年以降、中間貯蔵・環境安全事業株式会社が設置する北九州、豊田、大阪の各PCB処理事業所において、処理施設を運転管理し、高濃度PCB廃棄物の処理を行った。その処理方式は、商用のものとしてはいずれも日本初のものであり、様々な困難があったが、安全な操業と廃棄物の確実な処理を見事に達成した。3社での高濃度PCB廃棄物の処理量は、変圧器で約8千台、コンデンサーで約22万台、安定器等で約1万トンと大量であり、3社の存在なくして処理完了は成しえなかった。</p>
---	---	---



循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰の表彰式

●令和6年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

3R促進ポスターコンクールは、環境省と3R・資源循環推進フォーラムが全国の小学生と中学生を対象に、3Rを促進するための普及・啓発用ポスターを公募し、優秀な作品を選考・表彰することにより、国民一人一人が循環型社会のあり方について考えるきっかけにすることを目的としています。募集は令和6年5月29日～9月11日の期間に行われ、小学生低学年の部523点、同中学年の部1,493点、同高学年の部1,465点、中学生の部1,149点、合計4,630点の応募があり、各部門で、最優秀賞1点、優秀賞3点、佳作10点を選定し、大会で最優秀賞の表彰を行いました。なお、大会会場では最優秀賞受賞作品の展示も行いました。

最優秀賞受賞作品は次ページのとおりです。



◆小学生低学年の部

愛知県大府市立共和西小学校1年 松井 工さん



◆小学生中学年の部

熊本県八代市立太田郷小学校4年 岩本 紘武さん



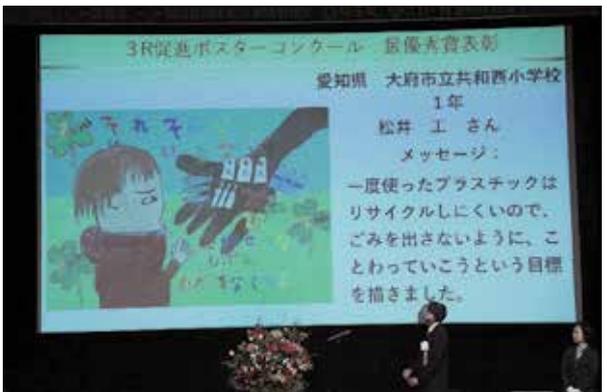
◆小学生高学年の部

愛知県刈谷市立住吉小学校6年 松田 永羽さん



◆中学生の部

愛知県半田市立乙川中学校3年 近藤 杏奈さん



3R促進ポスターコンクール表彰式

3. 記念シンポジウム

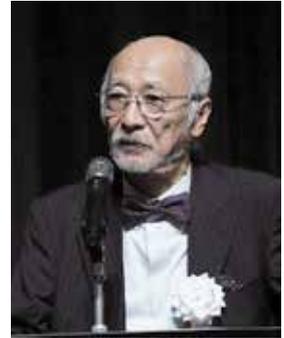
「サーキュラーエコノミーによる地域活性化と質の高い暮らしの実現に向けて」 ～目指すべき循環型社会の将来像～

(1) 基調講演「サーキュラーエコノミーの達成に向けた各主体の役割」

3R・資源循環推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、
慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授 細田衛士氏

(略歴)

1977年慶應義塾大学経済学部を卒業。1994年同学部教授、2021年中部大学副学長、2022年東海大学副学長となり現在に至る。大学で「環境経済論」を教えるかわら、経済産業省産業構造審議会委員などを務めた。廃棄物やリサイクルの問題などを経済学の観点から分析し、循環型社会のあり方を検討している。



●ハードローとソフトロー

皆さん、こんにちは。本日は、この3R推進全国大会を埼玉県で開催させていただきました。埼玉県の皆さま、大野知事、また国からは国定環境大臣政務官においでいただき、本当にありがとうございます。私たちは元々「3R活動推進フォーラム」という名前でしたが、「3R・資源循環推進フォーラム」に名前が変わりました。そこで装いを新たにして、これまでの知見、経験を生かしながら、さらに一步踏み出そうということです。特に今回は、その意味でタイムリーです。先週、日本経済新聞に大々的に埼玉県がサーキュラーエコノミーに向けて大きな一步を踏み出したという記事が掲載されました。私は新聞のスクラップをPDFにしている学生に見せるつもりですが、こういう地域の積み重ねがいろいろな所にあって、私たちは新しい経済社会、サーキュラーエコノミーを作れると思っています。今回、この埼玉県で行われるこの3R推進全国大会が、その輝くべき新しい一步となると私は確信しています。ぜひ皆さんの御協力をよろしくお願いします。

それでは私の講演を始めます。タイトルは「サーキュラーエコノミーの達成に向けた各主体の役割」ですが、話をまとめて言えば、新しいこのサーキュラーエコノミーという経済社会をつくるには、各層の連携協力ができないということです。これまで私たちは、経済の生業として競争経済で競争することによって新しい商品を生み出してきました。このプロジェクターもそうですし、最近リモートでも会議ができませんが、競争経済だけではサーキュラーエコノミーはできない。各層の連携協力、そして私がかれからいう新しい共創、共に創る共創が重要になります。初めに結論を言ってしまうと、そういうことです。

その思いを込めて、今のことを簡単に図柄にするとこう(図1)になります。ハードロー、ソフトローという少し難しい言葉ですが、ハードローというのは普通の法律です。国が作る、例えば循環型社会形成推進基本法とか廃棄物処理法とか、あるいは最近のプラスチック資源循環促進法とか、国の法律や自治体の条例など、縛りのある、書かれた法律がハードローです。それに対してソフトローというのは、社会の慣行とか法律にはなっていないが心の中で取り決めていること、電車の前では列を作るとか、ごみ出す時には各地域に従って分別排出をしないと、これは別に法律に書かれていませんが、私たちにはそれを守る規範があるわけです。この全体をソフトローと言います。

この二つが実は重要になります。競争市場経済は大事です。競争経済では私益を生みます。会社の利潤とか私たちがもらう給料とかそれです。ですが、競争経済だけでは駄目で、共に創り上げるコ・クリエイティブ・ソシオエコノミー、共に創り上げる社会、それが公益を生み出すのです。きれいな街並み、きれいに分別されたごみ出しは市場経済ではできません。私が英国に留学してから40年来付き合っているイギリス人

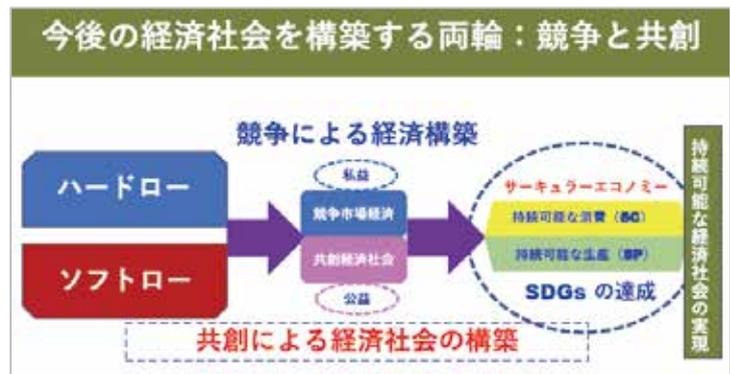


図1

の友人が1年前に来て、一様に日本の街並みはきれいと言います。ごみが落ちてない。それはなぜかという、もちろんごみは捨ててはいけないと廃棄物処理法に書いてあるが、そうではなくて私たちが規範を持っているからです。これがとても大事です。日本人の共有感、私たちは忘れがちだが、それを道徳といった言葉で言ってもいいのですが、規範、私はそれをソフトローと言います。これが私益プラス公益を生み出す大きな役割になります。それを担保する、そのもとで実現するのがサーキュラーエコノミーです。

そして重要なのは、持続可能な消費と持続可能な生産がSDGsを達成し、サーキュラーエコノミーを作り上げることです。ということは、国が作る法律も重要だが、私たちの社会規範あるいは業界団体の規範が、それにも増して重要になるということです。

ここにいらっしゃる皆さんは多分、平均年齢が私よりずっと若いと思います。私は1953年、昭和28年生まれますが、高度経済成長の直前に生まれました。高度経済成長は1954年の秋口から16・7年続きますが、その時は物的豊かさ、経済発展・成長、大量生産・大量消費・大量廃棄、資源のワンウェイ利用の時代です(図2)。某大手スーパーの有名なカリスマ経営者が自慢げに「ワンウェイ容器を始めたのは私です。消費者の利便性を高めるでしょう」と言いました。今だと「えっ」と思いますが、時代が時代で当然です。ちょうど私の両親の世代は、とにかく戦争に負けて、豊かになりたい、子供たちにたくさん食べさせたい、いい住環境を備えたいという社会でした。それにはたくさん作ってたくさん消費することが前提になるので、競争重視、競争経済、私益重視そして分断型経済社会、つまり自己利益を求めてみんなが競争する社会でした。

それは決して良い事ばかりではないのです。それでは達成できないことがある。それが地球温暖化の防止であり、生物多様性の保全あるいはネイチャーポジティブであり、サーキュラーエコノミー、資源の高度な循環利用を達成する経済社会です。その新しい社会では、モノばかり作って生産して捨てる社会を脱却して、心の豊かさを求め、経済社会が円熟してきます。もう皆さんのご家庭にはほとんどの耐久消費財が行き渡っている。これは内閣府の調査でも明らかですが、エアコンあたりが普及浸透の最後になります。スマホはもちろんもっと最近ですが、ほとんどの家庭がそういう耐久消費財を持っています。私の子供の頃は、高度経済成長時代はもちろん、エアコンなんかありません。テレビがようやく出てきて、何にかじりついてたかという力道山の空手チョップです。街頭テレビがあって、これでテレビが普及していく。みんなモノが欲しかったわけです。私の大学生時代はオーディオです。アンプ、チューナーなどみんな欲しかった。

だけど、今モノは要らないですよ。ゼミで学生に最近欲しいものは何かと聞いてみると、首をひねるわけです。「自動車は？」と聞くと「要らない」と言う。では何が欲しいかという「靴かな」といった程度です。つまり、何が欲しいのかと言うと、「いいね」が欲しいと言う。もうモノではなく、みんなが共有できて「いいね」をくれればいい。つまり、欲しいものがモノからコトへ変わっている。もう捨てるものも少なくなってきた、資源は循環利用していいじゃないですか。使い古しだって有名人が着たヴィンテージ物にお金払うとか、日本の着物を少しカットしてコートにすると外国人に喜ばれたりする。それは、コンペティションの競争とともにコ・クリエーションの共創、そして私益だけ

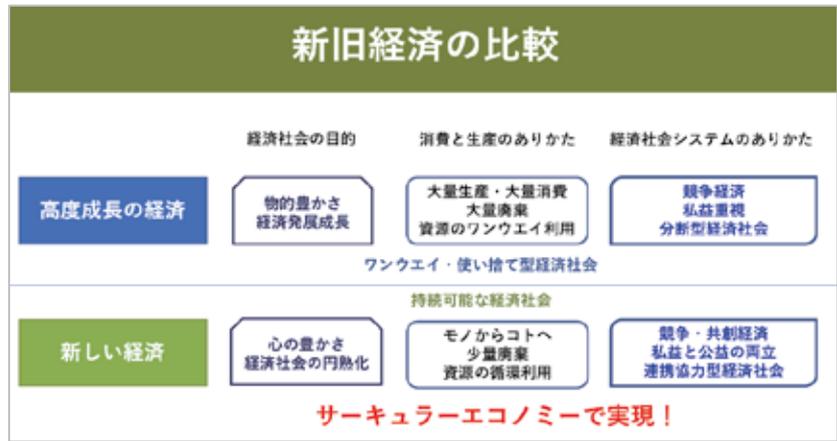


図2

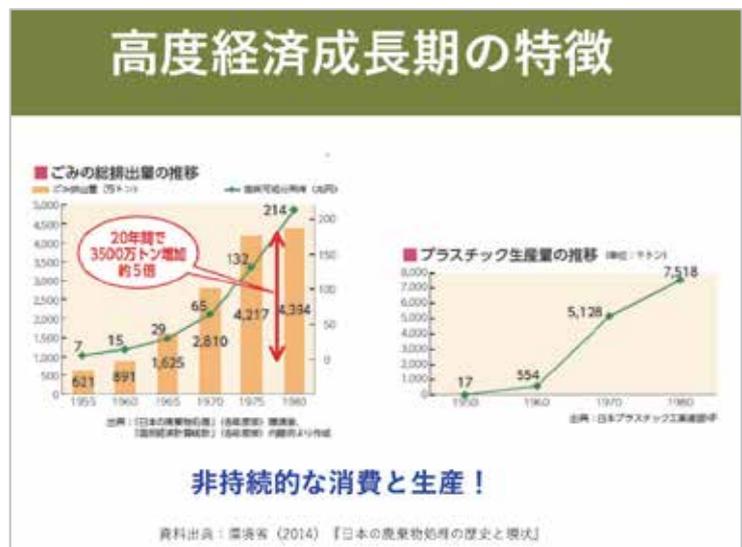


図3

じゃなくて公益を両立させる連携協力型経済社会、単にもう競争するだけの分断型社会ではないということです。

高度経済成長期の特徴です(図3)。このごみの排出量を見てください。ちょうど私はこの直前に生まれたわけですが、高度成長期では新幹線が走り、第1回目の東京オリンピックがあり、だんだんごみが増えて20年間で3,500万トン、約5倍に増加した。さらに、1950年にほとんど生産していなかったプラスチックが1980年レベルで751万8,000トンです。今どれぐらいかという、1,000万トンぐらい。今少し減っていますが、膨大なプラスチックを作ってそれを捨てているわけです。これはもうサスティナブルではない。ただ、プラスチックは全部やめようかという、そういう問題でもありません。食品の保存にはプラスチックが必要です。それから今、プラスチック容器を止めようというので紙に移り、実は油汚れの対策とか浸透しない対策というところで紙に多層コーティングしたものが出回っています。そうすると、今度は古紙のリサイクルができなくなってしまう。だから、古紙の問題、廃プラスチックの問題、全部つながっています。OECDのレポートにあるのですが、プラスチック容器包装類を全部他の素材にしたら、CO₂は増えてしまう。紙は重いので輸送コストとか輸送のCO₂エミッションが増える。だから全体を見て、サーキュラーエコノミーを作っていかなければいけない。埼玉県のような取組は非常にうれしい。県がオリジナリティを持って地域でやっていく。それと、国の政策が同期する。今度、国によって太陽光パネルのリサイクルの法律が作られますが、それと各都道府県、市町村が連携することによって、日本の得意技の団体戦でサーキュラーエコノミーができていくと思います。

●モノの豊かさから心の豊かさへ

それで、今私たちはモノの豊かさよりも心の豊かさを求めています(図4)。6割ぐらいの人が、モノばかりの社会よりもモノからいかにハピネス、幸せを取り出すかに関心を持っています。今サブスクがずいぶんはやっています。もう車なんかも要らない、レンタル、リースでいいという人もいます。レンタサイクルも盛んです。モノではなくて、モノからいかに私たちが便益を取り出すかという方向に変わって、「もうゆったり過ごしましょう」、「そんな残業、残業また残業でそんなお金稼いだってどうなのでしょう」というわけです。霞が関の方はそういうことをやっておられるかもしれませんが、やはり心が豊かでないといけません。さはさりながら、モノは必要です。その時に重要なのは、持続可能な消費と持続可能な生産をどう同期させるか、うまくシンクロさせるかということです(図5)。

これまでは競争経済、コンペティションで物事がうまく進み、経済が繁栄していいではないか、生産や消費が持続可能かどうかは関係ないと思いきや、今はそうではなくなってきたわけです。プラスチックをこのまま使い続けると、海ごみが増えてマイクロプラスチックが増えてしまう。だからプラスチック新法、資源循環促進法をうまく利用しなければいけない。そのためには、作る側と消費する側がうまくコラボしなくてはならない。これも共創、コ・クリエーションです。各主体がばらばらに行動するのではなくて、サーキュラーエコノミー構築に向けて共創的、つまりこれはコンペティションではなくて、コ・クリエティブに行動する。いい言葉ですね。コ・クリエ

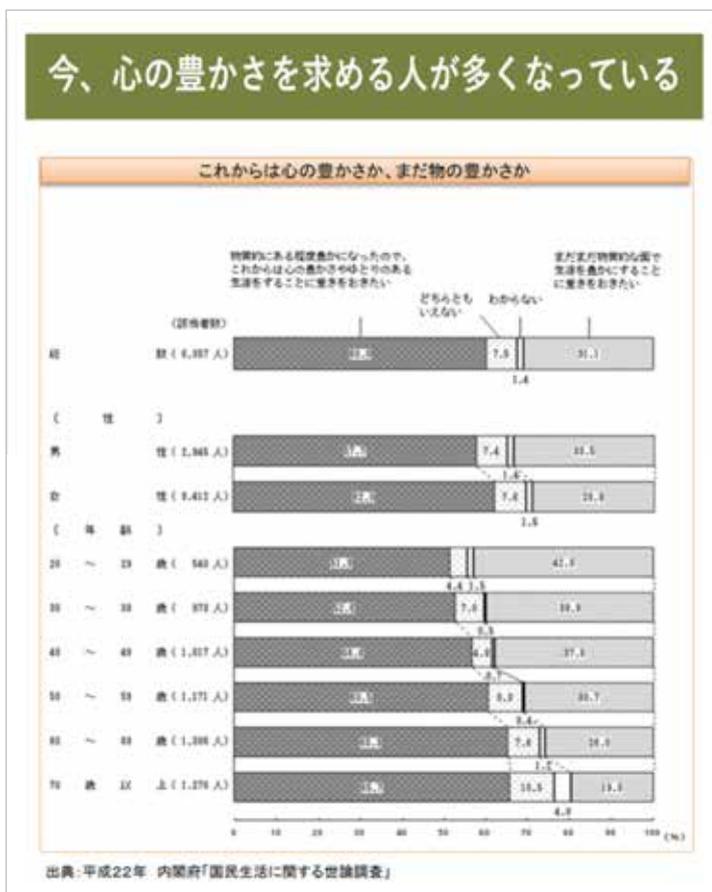


図4

SCとSPを同期させるサーキュラーエコノミー

- SCとSPをうまく調和させるのがサーキュラーエコノミー。
- SCとSPがつながってこそ資源の高度な循環利用が低む。
- また資源の高度な循環利用が進めば、SCとSPにならざるを得ない。
- すなわち、サーキュラーエコノミーの実現が経済社会の持続可能性の実現のカギとなる。
- そのためには主体間の連携協力が不可欠。

図5

イティブというのは一緒に新しいものを作り上げよう、ばらばらに自分勝手の利益ではなくて、みんなの利益を考えて新しいものを作り上げようということです。サーキュラーエコノミーというのは持続可能な消費、サステナブルコンサンプションと持続可能な生産、サステナブルプロダクションがうまくつながって、資源の高度利用がつながるといわけです。もちろん資源の高度な循環利用が進んでいる社会というのは、サステナブルコンサンプションとサステナブルプロダクションがつながっていることにほかならないわけです。でも当然、サーキュラーエコノミー実現は経済社会の持続可能性の必要条件です。それには主体間の連携協力が必要です。

それで、これまで私たちはすでに3R、リデュース・リユース・リサイクルをやってきました。これは重要だと思っています。とっても分かりやすい。これは元々アメリカで1970年代に出てきた言葉で、今でも子供の教育に使われていますが、残念ながら大人には浸透していません。日本ではこれがどんどん浸透して市民やNGOの行動にもつながっている(図6)。低環境負荷消費、分別排出、排出者責任を全うして、持続可能な消費をする。一方で、資源の高度な循環利用に向けての経済社会を改革するには市民の力だけでは弱いから、政府・自治体が法律をつくらたりガイドしたりしてくれる。埼玉県が今般「サーキュラーエコノミーに向けていくぞ」と言ったら、企業がどんどん手を挙げてくれる。まさにそういうコーディネーターとしての自治体の役割が大きいわけです。

さらに、国の作った法律の中には拡大生産者責任という政策概念があります。生産者が廃棄物になった後まで一定の責任を取るといことです。これはもう当たり前のことになってきました。この責任概念が導入された当初は生産者が嫌がったのですが、もう今は嫌がりません。当然のこととしています。拡大生産者責任が持続可能な生産を可能にし、その実現のためには企業と事業者の役割が必要になってくる。これと市民、NGOの役割が接続し、さらに静脈では収集運搬や処理事業者の役割がカップリングされて、サーキュラーエコノミーができるというわけです。

そのためにはどういう連携協力が必要なのでしょう(図7)。当然、企業の拡大生産者責任は重要です。環境に優しいモノづくり、ごみになりにくいモノづくりは絶対に必要です。プラスチックは必要だけど、本当に必要なところだけに使う。レジ袋は有料化されて8割方

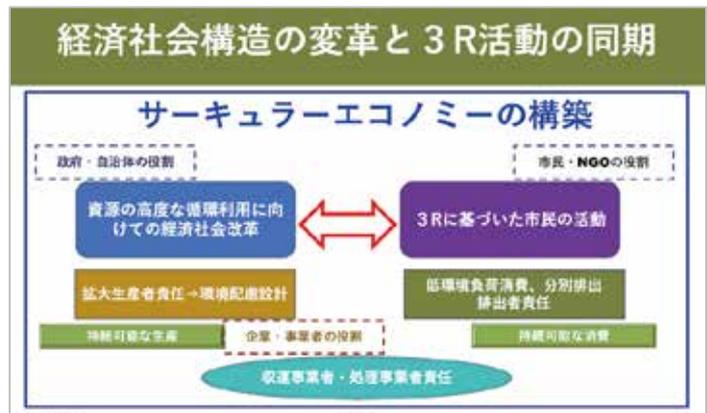


図6

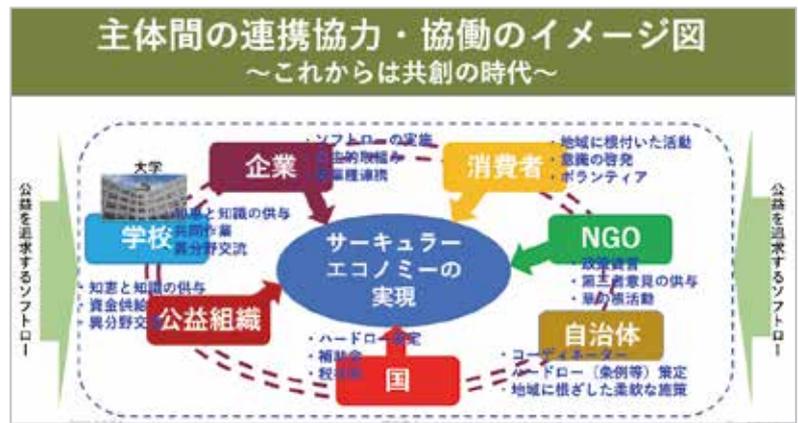


図7

一般廃棄物（ごみ）排出量推移



図8

減ったわけです。レジ袋禁止はラジカルだと思ったが、そういう手もあるのかなとも思います。

それから消費者も当然地域に根付いた活動、意識の啓発、ボランティア活動などを実践し、NGO は市民活動をつなぎ合わせて政策提言をし、草の根活動を続けていく。自治体はコーディネーター役、条例を作る、地域に根ざした柔軟な政策、国はもちろんハードローを作る、補助金、それから税控除、いいものには税を控除する。公益組織は財団もそうですが、我が3R・資源循環推進フォーラムも持続可能な社会作りのために貢献する。資金供給とか異分野交流をやっている。私たちの学校、大学は、知恵と知識の共与、共同作業、異分野交流などを進めている。こういうものがコラボして、サーキュラーエコノミーができる。実はこれ、EUはものすごく偉そうなこと言っているができていません。これは日本の方が絶対うまくできると思っています。

そこで少しデータ的に説明したいのですが、これ(図8)は一般廃棄物、私たちのごみです。家庭系のごみと事業系のごみが入っていますが、2000年がピークで5,200万トンぐらい出しているのですが、2022年にはもう4,000万トンを切っています。つまり2割減っています。ごみの削減はやればできます。まだこの傾向は続くと思われれます。モノからコトへの商品に移っていくからです。それから生産者もなるべくごみに出さないようなモノづくりを始めています。それがもっともっと同期する、つながると、この動きは加速されます。この動きはもっともっと私たちの力で強めていかなければなりません。

これ(図9)はすごく面白い図です。これ横軸は実質GDPです。縦軸は一般廃棄物、ごみの排出量です。1980年頃から大体2000年頃にかけて、GDPが伸びるとごみは増えている。つまり豊かになるとみんないっぱい消費してごみを捨てる。それが2000年を境に構造が変化して、豊かになってGDPが増えてもごみは減るようになっていきます。

そして2008年がエポックです。2008年に何があったか。リーマン・ショックです。ガクンと経済構造が変わって、産廃もそうですが、2009年に減って、またそこからGDPは増えていくのですが、ごみも減っている。さらにコロナショックでごみも減っている。2020年からはGDPが増えてももうごみは増えない。これをデカップリングと言います。これは国、地方公共団体、自治体、そして企業、市民の絶大なる協力、すばらしい協力があって、初めて可能になるということです。皆さんの取組が必要な理由はここにあるわけです。しかし、安心してはいけません。

これ(図10)、縦の棒グラフは一般廃棄物の最終処分場の残余容量です。これは長期的にはずっと減っています。1億m³ぐらいに減ってきました。内陸の市町村、多分、埼玉県の各市もずいぶん苦労されているのではないかと思います。私の大学の近くにある秦野市もずいぶん苦労しています。折れ線グラフは最終処分場の残余年数で、あと何年使えるかという数字ですが、残余容量が減っているのに残余年数が増えているのはなぜかという、これはキャパシテ

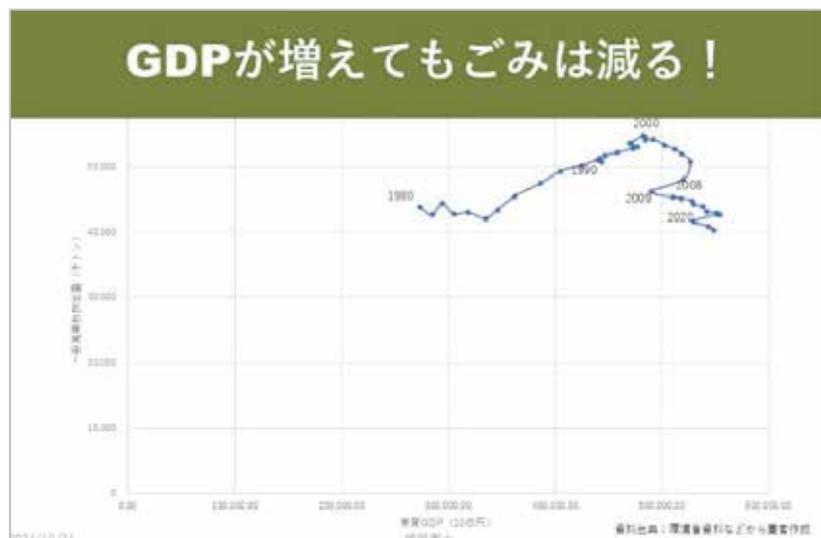


図9



図10

イが減るよりももっと処分量を減らしているからです。この努力が実って残余年数は増えていますが、やや頭打ちの感が出てきた。産廃はその傾向がはっきりしています。だから我々は、この3Rの力、資源循環の力を弱めてはいけない、もっとも強くしなくてはならないということです。

難しいように見えますが、やりようによってうまくそれができます。これ(図11)は食品ロスです。かつて640万トンぐらいあった食品ロスが、2022年にはなんと500万トンを切って472万トンになっている。これは市民を初め、市町村、自治体、都道府県の努力の賜です。そして、市民の皆さん、それからNGOの皆さんが、会食があったら、初めの30分はまずしゃべらないで食べましょうという努力をされている。そういう皆さんの

努力が食ロスを減らしてきたわけです。だけど皆さん、今、国連食糧計画が1年間で、途上国に寄付をしている食品の量が400万トン程度です。つまり私たちはまだ国連食糧計画が寄付をしているよりもはるかに多い量の食べられる食品を捨てているのです。これはいけないのではないのでしょうか。私たちが豊かになったのはよいけれど、食べられるものを捨てているというのは許されることではなく、このような生活スタイルは変えていかなければいけない。

だけど、悲観してばかりもしてられません。私たちがこれほど減らしてきたという実績があります。この知恵と経験を共有しながら、ぜひここにいる皆さんの力で食ロスを減らしていきたいと思っています。

●成長神話からの脱却

そして、重要なのは、成長神話から脱却すること(図12)です。経済学者なので経済成長、発展がいけないとは言いませんが、それが全てではない、と言いたいのです。先ほど話したように、耐久消費財が人々に行き渡って、実は人々の消費スタイルに変化が現れています。モノからコトへ、モノも循環利用するようになり、お下がりだって若い人は平気で着ています。アップサイクルで古いものに付加価値をつけて使い回す、ストーリー消費、つまりその商品にどのようなストーリーがあるかですが、古着でもそこに有名人のストーリーがあるとか昔の人のストーリーがあれば、それを買っていくという社会が変わっています。従来型の競争経済では、それには対応できない。

アップサイクルというのは(図13)、従来なら廃棄処分されるものを新たな付加価値をつけて売り出すことです。今までは劣化が当然だったので、古いものは捨てていました。だけどそうではなくて、モノの

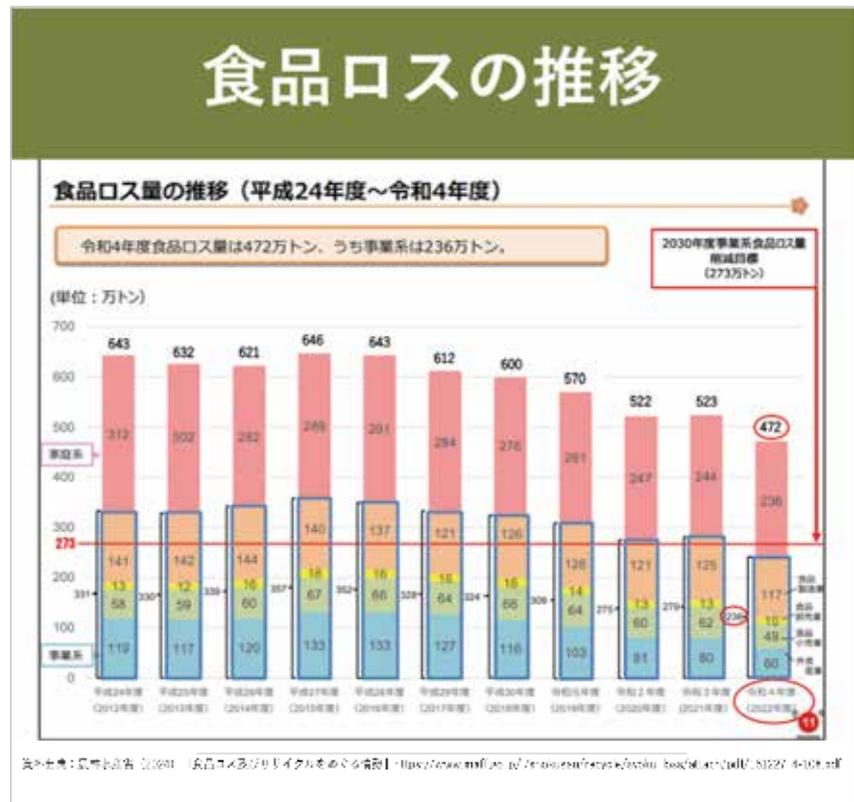


図11

経済成長神話からの脱却

- もちろん、経済が発展成長することは望ましい。
- しかしそれがすべてではない。
- 通常の消費財や耐久消費財(つまりモノ)が多くのお家庭に行き渡るようになった今、人々の消費スタイルに変化が見られる。
- モノからコトへ、モノも循環利用の時代に入った。
- たとえば、アップサイクルやストーリー消費がその典型例。
- しかし、従来型の競争市場経済ではこのような動きに対応できない。

図12

トピック：アップサイクル

- アップサイクルとは、従来なら廃棄処分されてしまうようなものを再生させ、新たな付加価値を創出する行為。
- 劣化が当然の物理の世界ならあり得ないことだが、経済の世界ではモノの上にかに付加価値を乗せるのが問題になるから、大いに可能である。
- ただそのためには人々の支払意思を実現するために、新たな知恵と知識が必要になる。

図13

上にいかに付加価値を乗せるかが重要で、古いものでも付加価値を乗せることができるわけです。そのときにはちょっと知恵を絞らなければならない。人々にこれはいい物ですよとってお金を払ってもらうためには知恵と知識が必要になります。モノはなるべく使い回して、その上に人々がこれはいい、ハピネスが得られると思ったらお金を払うのがアップサイクルです。

ストーリー消費（図14）は、単なるモノの機能だけではなく、モノの背後にある物語やそれに関わった人物、背景などに価値を見出し、自分独自の価値観で購入する、というタイプの消費です。池辰彦さんの言葉ですが、「物語があればごみも宝となる」。私たちが肝に銘じておきたい言葉だと思います。

モノや資源を循環利用すると経済はしぼんでしまうと心配する人がいます。従来型の経済を前提にすればそうですが、新しい経済、サーキュラーエコノミーを前提にすると実はそうではありません（図15）。ポイントは何かというと、経済で重要なのはモノではなくて、付加価値をいかに作るかで、だから知恵と知識が重要です。モノや資源を節約しつつ、いかに大きな付加価値を作り出すか。知恵と知識そしてコラボレーションがこれからの経済のポイントになっていきます。

少し例をとってみます。事例1（図16）は、世田谷区の不要品持ち込みスポット OPEN は、環境NPOのジモティーと世田谷区が協力し合って、使えるものは捨てる前にまず持ち込み、その場で引取っています。持ち込まれた不要品はジモティーを通じて希望者に譲られます。これが自治体とNGOによる共創的な取組です。

事例2（図17）の神戸市のプラスチックネクストは、プラスチックごみをいかに減らしてリサイクルをしていくかで、花王とかライオンも神戸市、そして地元の自治体に協力しています。ここが面白いのはリサイクルのポイントが一つの市民のコミュニティ、集いの場所になっていて、市民交流の場所とサーキュラーエコノミーが自動的に重なっているということです。これも知恵ですね。連携協力が進んでいます。

そこで重要なのは市民

トピック：ストーリー消費

- ストーリー消費とは、単なるモノの機能に価値を見出すのではなく、モノの背後にある物語やそれに関わった人物や背景などに価値を見出し、自分独自の価値観にしたがって購入する消費のことをさす。
- 「物語があればごみも宝となる」（池辰彦氏の言葉*）

図14

モノや資源を循環利用しても経済は大丈夫

- モノや資源を循環利用すると経済はしぼんでしまうように思うかもしれない。
- 従来型の経済を前提にすればそうだが、サーキュラーエコノミーではそうではない。
- なぜなら、本来経済で重要なのはモノではなく付加価値の創出だから。
- 問題は、モノや資源を節約しつつ如何に大きな付加価値を創り出すかということ。
- ここで知恵と知識そして共創がものを言う。

図15

事例1：世田谷区とジモティーの連携協力

世田谷区 × ジモティー

**世田谷区不要品持ち込み
スポットOPEN**
powered by ジモティー

**使えるモノは捨てる前に
まず持ち込んでください**
その場で引取いたします

持ち込まれた不要品はジモティーを通じて希望者に譲られる。→自治体とNGOによる共創的取組み！

資料出典：https://jimo.jp/about/seitagyaku_spot/entry?id=846d0d65-f10c726a-772d-4080-a13a-0a0104a80336ef7a33

図16

事例2：神戸プラスチックネクスト

KOBE PLASTIC NEXT



様々な主体（市民、自治体、企業、NGOなどの連携協力＝共創力がなければこのような取組みはできない！



HOME PROBLEM NEXT CONTACT



2024.03
初めて学んで「家庭しよび」プラスチックリサイクル。神戸プラスチックネクストに協力中！



2023.12
「六甲アイランドパロワンフェスティバル2023」に、高かんバックリサイクルプロジェクトが参加しました！



資料出典：https://kobeplastnext.jp/next/

図17

の役割が極めて大きいことです(図18)。リユース・リデュース・リサイクルも市民の力です。食品ロスもそうです。企業への提言、企業との連携協力をするのも、例えばスーパーでの買い物で容器包装を減らす取組はごみじゃぱんというNPOが行っています。自治体との連携協力、コ・クリエーションが進み、モノからコトへの消費スタイルの変更がある、大切なものはモノそのものではなくモノから得られるハピネスです。エイジング、古くたっている。私は革ジャンが好きです。革ジャンは古くなると格好よくなります。ちょっと擦れてくるのが格好いい。だから、中古品は実は格好いい。そういう世界、エイジングや先ほどのアップサイクルです。人間も年取ってすてきになりたいのですが、なかなか難しい。

先ほど話したごみじゃぱんが提唱する減装(へらそう)ショッピング(図19)は、神戸市、企業、市民が協力して容器包装を減らすという取組で、これは大成功です。こういうことが連携協力によるコ・クリエーションによって可能になってきます。

もちろん、事業者の役割も大きい(図20)。資源の循環利用・節約利用、環境配慮設計、それから業界単位のソフトローでサーキュラーエコノミーを実現する、異業種の連携協力、自治体や市民との連携協力、私益だけを求めるのではなくて公益と両立させていく、動静脈一体型の経済をつくる、これは事業者の役割がとても大きいわけです。

そして、地域循環を推進するコーディネーターの自治体の役割はとても大きい(図21)。地域住民のニーズの特性を熟知しているのは自治体です。食品ロスの削減も自治体の役割が大きい。3Rを一層促進し、プラスチック資源の循環利用も自治体の役割が欠かせません。住民や地元企業、事業者を巻き込み、地域資源循環のシステムを構築します。埼玉県が今やろうとしている、あるいは、他の自治体でも多分やろうとしていると思います。それが非常にコーディネーターとして大きな役割を果たしています。

国は、もちろん重要です。サーキュラーエコノミーに向けて、旗振り役をする(図22)。行き先が見えなければ、企業はサーキュラーエコノミーに乗っていきません。サーキュラーエコノミー実現に向けて貢献する市民、企業、

市民の役割は大きい！

- ・リデュース・リユース・リサイクルは基本中の基本。
- ・食品ロスの削減も。
- ・企業への提言、企業との連携協力：たとえば、スーパーでの買い物で容器包装類を減らす取組み。⇒Eg. ごみじゃぱん！
- ・自治体(都道府県市町村)との連携協力、共創。
- ・モノからコトへの消費スタイルの変更⇒大切なものはモノそのものではなくモノから得られる満足度・幸福度。
- ・エイジングやアップサイクルの魅力を見直す！

図18

事例3：ごみじゃぱん

減装ショッピングとは・・・



減装ショッピングとは、ごみじゃぱんが提唱する、普段の買い物で無理なくごみを減らす運動名称です。

ごみの問題を「捨てる」時ではなく「買う」時から考えていただく意識改革で、中身が同じなら、包装ごみを減らした商品の価値をご理解いただき購入する買い物基準です。

同じカテゴリの商品に比べ容器包装の重量が約半分(48%、推奨カテゴリにおける平均値)の商品を「減装(へらそう)商品」として推奨。

生活者が推奨カテゴリ全体で「減装商品」を購入すると、重量で家庭ごみの約20%、体積で約60%を占める容器包装ごみが半分となり、重量12~13%、体積30%を減らせることが推計できます。

資料出典： <https://gomi.jp/img/free.com/%E3%81%94%E3%81%8F%E3%81%86%E3%82%A3%E3%81%85%E3%82%91%E3%81%8E%E3%81%AF/>

図19

事業者(企業)の役割も大きい！

- ・資源の循環利用・節約利用は当然のこと。
- ・環境配慮設計の推進。
- ・ソフトローによる業界単位などでのサーキュラーエコノミー構築。
- ・異業種連携協力、自治体や市民との連携協力。
- ・私益と公益を両立させる事業活動。
- ・動脈静脈一体的な経済活動の推進。

図20

コーディネーター役としての自治体

- ・地域循環を推進するコーディネーター役としての自治体の役割は大きい。⇒地域住民のニーズや特性を熟知しているのは自治体。
- ・食品ロスの削減も自治体の役割によるところが大きい。
- ・3Rを一層促進し、プラスチック資源の循環利用を確実なものとするのも自治体の使命。
- ・住民や地元企業・事業者を巻き込み、地域資源循環のシステムを構築する！

図21

自治体に経済的、政策的な支援を行うのは国の役割です。また、従来型の廃棄物政策に柔軟性を持たせ、サーキュラーエコノミーに合致した資源循環政策をするのも国の役割です。

サーキュラーエコノミーの実現には全ての自治体の連携・協力、そしてコ・クリエーション、共創による新しい付加価値の創出が不可欠です（図 23）。先ほどの世田谷区の例や神戸プラスチックネクストの例もそうです。そのような経済においてこそ持続可能な消費と持続可能な生産がつながる、ハーモナイズします。新しい経済社会は、競争とコ・クリエーションの共創の双方が重要です。そして私益の追求と公益の追求が両立する経済社会、それが来たるべき経済社会なのです。今日のこの集いが、この動きの大きな一歩となることを期待しております。

どうも御清聴ありがとうございました。

国はサーキュラーエコノミーの旗振り役

- 国は、**新しい経済システムの像**を示し、**サーキュラーエコノミー構築に向けて旗振り役**を果たす。
- **行き先が見えなければ企業はサーキュラーエコノミーに向けての投資もできない。**
- サルキュラーエコノミー実現に向けて貢献する市民、企業、自治体に**経済的・政策的支援**を。
- また従来型の**廃棄物政策に柔軟性**を持たせ、サーキュラーエコノミーに合致した**資源循環政策を推進**することが必要。

図 22

おわりに

- **サーキュラーエコノミーの実現にはすべての主体の連携協力、そして共創による新しい付加価値の創出が不可欠。**
- そのような経済社会においてこそ、**持続可能な消費（SC）と持続可能な生産（SP）が同期**する。
- 新たな経済社会は**競争力と共創力**の双方に支えられる。
- そして**私益の追求と公益（社会益）の追求が両立**する経済社会。
- **今日のこの集いはそうした動きへの大きな一歩となる！**

図 23



(2) 特別講演「埼玉県が目指すサーキュラーエコノミー」～持続的な発展に向けた環境と経済の両立～
埼玉県知事 大野元裕氏

(略歴)

1987年慶應義塾大学法学部を卒業。1989年国際大学国際関係学修士課程を修了。外交官としてヨルダンおよびシリアで勤務後、2010年参議院議員に初当選。2012年防衛大臣政務官兼内閣府大臣政務官、2019年8月第61代埼玉県知事に就任し、現在2期目。「日本一暮らしやすい埼玉」の実現に向け、サーキュラーエコノミーの推進をはじめ、さまざまな取組を進めている。



●SDGsに先駆した渋沢栄一翁

少し埼玉県の取組を御説明させていただきます。埼玉県は今サーキュラーエコノミーを目指しているところですが、これまでも私たちなりの何年にもわたる試行錯誤がありました。まず埼玉県が今どのような状況にあるか、これをまず共有したいと思っています。私は実はずっと言い続けているのですが、埼玉県は今二つの歴史的な課題に直面していると考えています(図2)。一つ目は、人口減少、超少子高齢化の社会です。まさにそういった中では、持続的な発展が必要になってくる。これが一つです。そしてもう一つは、激甚化、頻発化する災害、あるいはパンデミックのような危機管理。今年だけでも1月1日に能登で地震がありました。実は埼玉県は1人当たりの自然災害の金額が一番少ない県なのに、それでも毎年のように何かある。自然と共生する持続可能な社会を作っていかなければ、安心安全な社会が成り立たないと考えています。

先ほど細田先生から、将来的な資源不足、あるいはカーボンニュートラルの実現などに対応するために、循環と経済の両立、競争から共創へという話がありました。あるいは、その前の政務官のお話では、リニアエコノミーからサーキュラーエコノミーというお話がありましたが、まさに私益と公益、競争と共創、これを両立させる社会というものが重要だということで、国も第五次循環型社会形成推進基本計画においてサーキュラーエコノミーの位置づけを行いました(図3)。

こういった中で、埼玉県は中長期的で持続的な経済社会を作らなければいけないということで、2023年から本格的に取り組んでおり、実は私が言い出しっぺで相当周りも迷惑したはずですが、先ほどお話を伺っていてすごく思ったのは、埼玉県は渋沢栄一翁の出身の地です。渋沢栄一翁は何を行ったかという、500の会社や600のいわゆる社会奉仕団体を作ったのですが、私は一番大きいのは、みんなの頭の中、社会システムを変えたことだと思っています。というのは、渋沢栄一翁が生まれて生きていた江戸時代末期、お侍さんの時代です。お侍さんは商売や経済なんかするものではないというのが、実は日本の当時の常識でした。ところが、要するに侍は幕府のトップの官僚ですから、その人たちが経済はしない方がいいという世界ではもはやない。そこで彼が持ってきたのは、孔子の教えである忠恕の精神、真心と思いやり、この経済と道徳を両立させることによって、経済を進めるということを倫理感に変えていった。要するに経済はやるべきだということに頭の中をころっ

自己紹介 第61代埼玉県知事 大野 元裕 (1959 - 2024)	座右の銘 「立国は公にあらず私あり」
生年月日 昭和38年11月12日 (60歳)	性格 フランクだが、聖物にみられがち
出身地 川口市	趣味 音楽、活字、読書、映画鑑賞
家族構成 妻、1男2女	学生時代に打込んだこと アメフト、水泳、柔道、音楽バンド
主な経歴 外交官、中東調査会研究員、 参議院議員、内閣府大臣政務官、 防衛大臣政務官など	小学生時代の将来の夢 「世界の人のためになる仕事をして、みんなにお返ししたい」
	尊敬する人物 元川口市長の祖父(大野元英)

図1

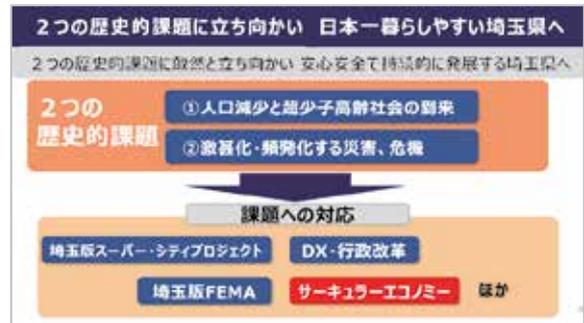


図2

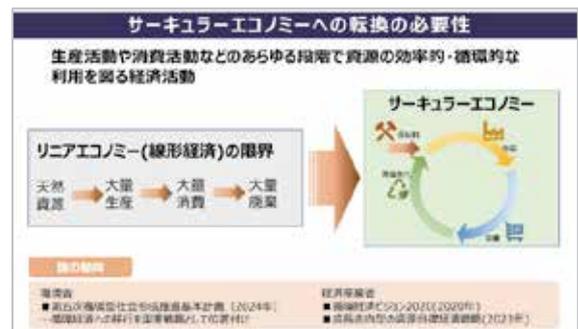


図3

と変えた。これが、渋沢栄一さんが私たち後世の人間にもたらししてくれた大きな転換ではないかと思っています。つまり、社会や考え方が変わった。先ほど細田先生から、2000年ぐらいからずいぶん変わっている、GDP イコールごみの排出ではない、というお話がありました。私たちは競う方の競争から共に創る方の共創という新しい社会に入っている。しかも渋沢栄一翁がすごいのは、今でいう SDGs を先駆で行っている。埼玉県にそれだけの事をした人たちがいて、私たちが今の社会で、新しい共に創る、私益と公益を両立する、そんな社会を一生懸命目指すということは、私たちはもう少しやるべきことがあるのかもしれないと考えているところなんです。

そんな中で私たちが埼玉県の姿として描いているもの、それは私たち埼玉県には今 734 万人の県民がいて、日本の 15 人に 1 人は埼玉県民であって、県内企業も集まっている。そして比較的若い。そういった恵まれた環境にあることは事実です。ただ、その中でこの恵まれた環境を私たちは今まで作って、使って、捨てるときには、もしかすると捨てるのはずっと遠隔地、使うのは東京、作るのは埼玉、それで儲かる、こういう構造を追い求めていたのかもしれない。でも、私たち埼玉県は関東のど真ん中です。この首都圏、関東圏で使う、そして捨てるのではなく、再びこれをサーキュレーション、循環社会の中に盛り込んでいく。この全部がもしかすると埼玉県には包摂できる可能性があるのかもしれないと私たちは思っているし、そう信じて動かさなければならぬと考えています (図4)。

サーキュラーエコノミーの実現に向けて私たちは非常に良い所にいます。交通の便では、埼玉県は関東圏のど真ん中であって、全部平野です。これだけの交通の便が良い所はないです。それが証拠に、東京発の新幹線、東海道線以外は全部埼玉を通過しています。そういった意味では、私たちはここで作って使って循環社会を作り上げる、そして海以外は全てある日本の縮図みたいな所ですから、これは将来に向けてさまざまな形で仕事ができる環境にあると思っています。

そんな中で埼玉県のサーキュラーエコノミーの支援では (図5)、さまざまなことをしてきました。例えば、先ほど補助金は国の役割とありましたが、埼玉県も実はリーディングモデル構築に向けた補助金を出しています。リーディングモデルの構築展開です。あるいは企業間のマッチングの支援、さらには県民や県内企業に対する普及啓発などを行い、例えば、規格外野菜を付加価値が高いパウダーに生まれ変わらせる取組であったり、これまで焼却されていた食品工場の排水に含まれる油を取り出してバイオ燃料として活用したり、さらには県民向けには、国内最大級の集客力を誇るサッカーチーム浦和レッズがあるので、この浦和レッドダイヤモンズと連携をして来場者に啓発をするなど、あの手この手で支援しています。具体的には後ほどお話しますが、その前に県庁としてどう取り組むかという仕組みを説明します。

埼玉県ではさまざまなことをやっていますが、問題はこの持続的な社会を構築するた



図4



図5

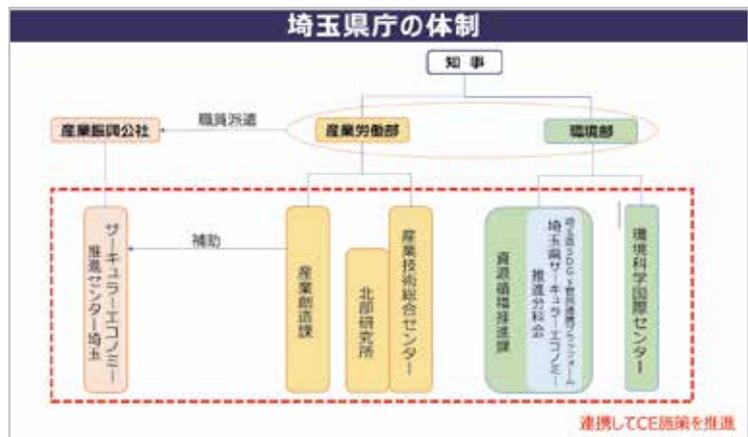


図6

めに働かなければいけない県庁の頭がものすごく古かったという現実でした。県庁の体制（図6）は、環境部と経済を担う産業労働部がバラバラの縦割り行政で、よくあるパターンです。そして、20年前にやっていることは今もやるという役所の典型的な姿でした。そこで何を行ったかという、サーキュラーエコノミーを行うために、サーキュラーエコノミー推進センター埼玉を去年の6月に作りしました。このサーキュラーエコノミー推進センターは、私の聞いている限りでは他に2カ所あるそうですが、埼玉県の特徴は環境部の下にないことです。産業労働部の下にあります。つまり、環境は総論賛成です。誰に聞いても、きちんとやった方がいい。でも各論反対で、100万円かかるので勘弁してくださいというのが環境の難しさです。従って経済として成立するものであれば、持続的な環境を作ることに必ず寄与する、だからこそ経済ファーストです。ただし、縦割りなので、経済をやっている産業労働部の人は環境に興味ありません。環境部の人は経済に興味ありません。そこで、3年かかりましたが、産業労働部の副部長を次の年に環境部の部長にして、1年部長やらせて産業労働部の部長に戻しました。そして今日来ていますが、今の環境部の部長は前任で教育をやらせています。つまり環境の専門家ではなくて、こういったミックスをすることによって、初めて先ほど細田先生が言われた共に創る共創、当時はそんな共創ということは出てきませんでしたが、今思い返すとそれが実は最初からありました。

●サーキュラーエコノミー推進センター埼玉を開設

3年かけて頭作りをして、サーキュラーエコノミー推進センター埼玉（図7）をつくったのですが、人事を県知事がこれだけ無理に動かすと、みんな「うん」と言わざるを得ないので、そういった意味では、彼らも一生懸命頑張ってくれたと思っています。そして、昨年6月にサーキュラーエコノミー推進センター埼玉をオープンしました。このセンターは特徴として、一つはさいたま市中央区にあります。要するにさいたま市のど真ん中にあります。埼玉県でも一番交通の便利が良い所に置いて、いろんな人に来てもらうことにしました。それから今、5名のコーディネーターの方々が、企業の相談に応じるなど、マッチングを行っています。ここでは、ワンストップで相談ができます。産業労働部ですから、企業の皆さんの販路拡大などの御相談をそこで受け付けます。環境がもちろん大切ですが、企業ですから、まずこうやったら販路拡大できますというお話をした上でマッチングをするという工夫をさせていただくと同時に、企業向けのセミナーであったり、事業化に向けた研究会であったり、あるいはピッチ、課題を提供して、それに対して答えを頂くといったことを行っています。

サーキュラーエコノミー推進センター埼玉

開設
令和5年6月に埼玉県産業振興公社に開設
場所：さいたま市中央区（大宮駅前）
窓口：月～金曜日 9時～17時

機能

普及啓発・情報発信	相談対応・マッチング支援	リーディングモデルの構築
普及啓発セミナー	コーディネーターによる相談対応	事業化に向けた研究会の開催
彩の国ビジネスアワードにおける関連製品・技術の展示紹介	事業者連携のためのマッチング支援	SAITEC北部研究所と連携した食品残さを活用した製品化支援
エコプロ、CE EXPO出展支援	販路拡大に向けた支援	研究会への試作品開発補助

図7

サーキュラーエコノミー推進センター埼玉 実績

相談対応・マッチング 専門知識を有するコーディネーターが対応
相談対応 **515**件
マッチング **56**件

研究会 3つのテーマで、事業者が連携し事業化を目指す研究会を設置
① 食のサーキュラーエコノミー 24者
② 未利用資源の有効活用 31者
③ サーキュラーデザイン 27者

大規模展示商談会への出展支援

食のサーキュラーエコノミー
エコプロ2023
サーキュラー・イノベーションEXPO

図8

このサーキュラーエコノミー推進センター埼玉の実績（図8）を御紹介しますと、昨年6月から今年9月まで1年3カ月の間にコーディネーターによる相談対応件数は515件、そのうちマッチング56件です。製品化に至った事例としては、幾つもあるのですが、今年2月に販売されたのが「川越紅赤芋みつ」です。埼玉県は芋で有名ですが、川越の芋の規格外のものが有ります。これと米麴で作ったみつですが、廃棄物から作ったなどとは全然思えない上品で甘すぎず、とてもいい具合に出来上がっています。

また事業化に向けた検討を行う研究会を、この三つのテーマで設置したところ、もしかすると廃棄物処理業者とかのイメージが湧くかもしれませんが、実は製造業あるいは卸売業など全く違う畑の方々から多く参加されました。また、これらのサーキュラーエコノミーに資するために、これらの商品やアイデアについては、彩の国ビジネスアリーナといった埼玉県で最大の見本市に出していただくとか、あるいは今年度から全国規模のエコプロだとかサーキュラーエコノミーEXPOにも我々が支援をしていただいています。

そして、サーキュラーエコノミー推進プラットフォームですが（図9）、バリューチェーンの各段階において、私たちはパートナーシップを構築する必要があります。一つ作れば終わりではなくて、つまり令和3年には例えばプラスチックの利用促進のプラットフォームを設置しましたが、今度は企業からプラスチック分野以外でもパートナーシップやりたいというお声を頂きましたので、今年度は分野を限らない、新しいプラットフォームに拡大しました。会員数ですが、ここに加盟している方々は、今年の9月現在で製造業、小売業、廃棄物処理業者、あるいは市町村なども含めて282者で、ある意味本当に多様な方々がここで一つの目的に向かって働いています。そして、今日も実はお越しの方々、実は表彰を受けた方々もおられますが、この分科会におられた方々が実はたくさん参加されています。

その事例ですが（図10）、例えば、スマートフォンあるいは電子タバコなどの身近な家電には充電式の電池が内蔵されており、このような小型家電は年々増加しています。家庭で不要になった充電式電池が燃えるごみなどと一緒に出排をされて市町村のごみ処理施設などで発火するといった事例が相次いでいます。一方で、充電式の電池にはレアメタルも含まれているために、これを効率的に回収できればとてもいいはずですが、そこで、そのためのスキームの構築に向けて、昨年度から検討を行っています。昨年度は狭山市や上尾市などの協力を得て、県内に企業拠点を持つ二つの企業と連携して実証実験を行ったところ、一定の分別を行うことによってレアメタルが含まれるブラックマスという物質に資源化をすることができました。また、国の充電式電池の処理に関する公募型の実証事業については、これまでも市町村単位で小規模な事業が対象でしたが、このたび新たに都道府県を対象とする、こういった事業を対象とすることができました。県としては、このような国の動きを大歓迎したいと思います。というのは、やはりサーキュラーエコノミーについては、サプライチェーンを考えると、県一つでも小

サーキュラーエコノミー推進プラットフォーム

概要	<ul style="list-style-type: none"> ● サークュラーエコノミーの推進に取り組み企業、市町村等で構成するプラットフォーム ● 埼玉県SDGs官民連携プラットフォームの構成組織として、サーキュラーエコノミー推進分科会として令和6年6月に設置 ● 令和3年6月に設立した「埼玉県プラスチック資源の持続可能な利用促進プラットフォーム」を発展的に拡大し、対象分野をプラスチックから全分野に変更して活動
支援内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 講演会、セミナー等の開催 ● 会員の交流の機会の提供や事業連携支援 ● 先進事例、国の最新動向・法規制等の情報共有 ● 県内のサーキュラーエコノミーの推進のために必要な事業の実施（実証実験等）
会員数	<ul style="list-style-type: none"> ● 282者（企業197者、団体17者、教育機関1者、市町村等67者） <small>令和6年9月現在</small>



図9

サーキュラーエコノミー推進分科会 取組事例

概要	県内5市（さいたま市、所沢市、狭山市、上尾市、越谷市）の協力を得て、家庭から出る使用済み充電式電池や充電式電池内蔵製品からレアメタルを資源回収できるかどうか検証
実施体制	<ul style="list-style-type: none"> ・埼玉県（全体のコーディネート、協力市との調整等） ・太平洋セメント株式会社【熱処理（レアメタル等の回収の前処理）*1】 ・松田産業株式会社【運搬・保管、レアメタル等の回収】 <small>*1 教育セメント株式会社（太平洋セメントグループ企業）で実施</small>
実施期間	令和5年 9月～
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・市が回収した充電式電池や充電式電池内蔵製品を種類に応じて仕分け作業を実施 ・仕分けされた電池や内蔵製品を太平洋セメントと松田産業で処理し、ブラックマス*2として資源回収 ・環境省とも連携して推進 <small>*2 リチウムイオン電池等を熱処理した後に得られる粉体、コバルト、ニッケル、リチウムなどのレアメタルを含む。ブラックマスを精錬することで、レアメタルを回収することが可能</small>



図10

リーディングモデルの構築

リーディングモデルの構築に向けた4種類の補助金による支援

R5	サーキュラーエコノミー型ビジネス創出支援補助金	<small>令和6年度採択件数</small> 9件 <small>※令和5年度 7件</small>
➤ 県内中小企業等が連携して新規に取り組む先進的なCE型ビジネスの創出支援		
R6	再資源化技術高度化支援補助金	5件
➤ 廃棄物の処理を行う事業者の再資源化技術の高度化に向けた設備導入支援		
R6	サーキュラーデザイン リーディングモデル構築支援補助金	3件
➤ 資源循環に配慮した設計の考え方に基づく製品等の試作開発やビジネスモデルの構築等への支援		
R6	食のサーキュラーエコノミー技術導入支援補助金	3件
➤ 製造工程で生じる食品廃棄物等を活用し、新製品・素材の開発やアップリサイクル、バイオマス発電などを行うための設備やシステム等の導入支援		

図11

さいぐらいです。当然、市一つでは完結しません。そして多くの方々に参加いただくことによって規模のロジックも出てきて、経済性も出てくるといったことで、私たちはパートナーシップを拡大していきたいと考えています。

●リーディングモデルの構築へ補助金

そして次（図 11）に、リーディングモデルの構築になりますが、企業への補助金も出しています。例えば、令和 5 年には県内の中小企業などが連携したビジネスモデルに対して補助制度を創設しました。今年度には、産業廃棄物処理業者の再資源化技術の高度化や資源循環に配慮した設計の考え方に基づく製品の試作開発、つまり製品を設計する段階から、サーキュラーエコノミーというものを意識して循環できる製品にしてもらう支援メニューも用意したところ、今年度では全体で 20 件のモデル事業が採択をされ動いています。

例えば（図 12）、左側は捨てられてしまう規格外の野菜などを独自の技術を用いて、付加価値が高い食品パウダーに加工する事業です。この食品パウダーを使ったメニューあるいは商品を大学などと連携して開発し、地域の飲食店やこのメーカーが存在する市の学校給食でこれを使ったものを出してもらっています。右側は焼却施設でリチウムイオン電池を処理し、その燃え殻からレアメタルを含むブラックマスを回収するという事業です。資源が乏しく鉱物資源の多くをほぼ輸入する我が国にとっては極めて重要な事業と考えています。

次（図 13）の左側は、自動車の運転席の前に配置されているインストルメントパネルを設計段階から見直しリサイクルしやすい複合素材の単一素材化や、リサイクルされた素材を今度は活用してもら



図 12

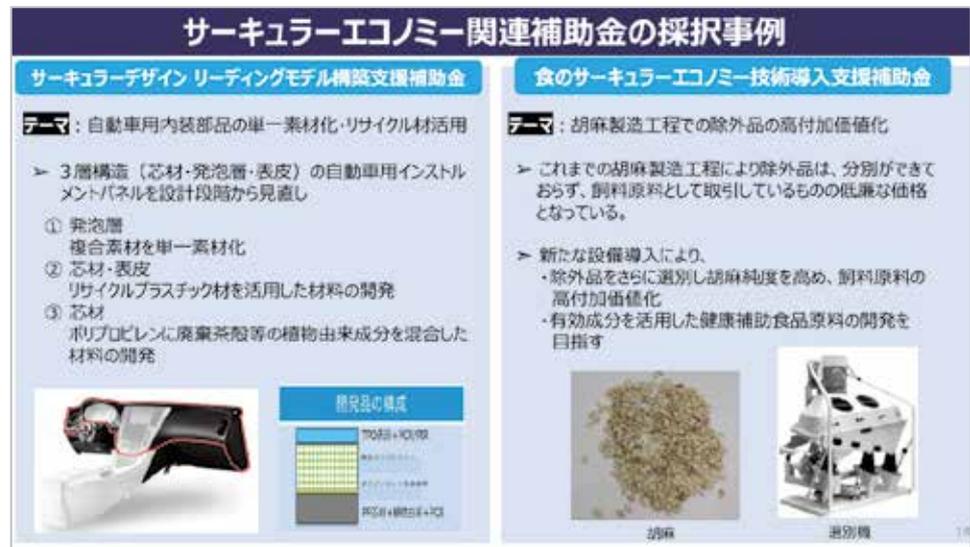


図 13

最後に

埼玉県が抱える「**歴史的課題**」に
敢然と立ち向かい、
未来志向の施策を展開し、
埼玉県の**持続的な発展**を確かなものと
してまいります。



埼玉県知事 大野元裕

図 14

うことを自動車メーカーさんをお願いしています。また右側はごまの製造工程で発生する除外品について新たな設備投資によって健康補助食品の開発などを指すというもので、ごまの本体だけではなくその残りから作るものであり、この食のサーキュラーエコノミーについては、本業である食品製造でのコスト削減や、あるいは新しい収益源をメーカーにもたらすという意味では非常に重要と考えています。

さて、私たち埼玉県は、歴史的課題に敢然と立ち向かう二つの歴史的課題があると言いました(図14)。これに対してさまざまなアプローチはありますが、そのうちの非常に重要なアプローチの一つが、サーキュラーエコノミーです。そしてサーキュラーエコノミーは単に技術的に製品を作るときに回すだけではなくて、先ほど細田先生が話されたとおり、循環経済をつくるためには、社会から変える、経済から変える、こういったものが大いに必要であればこそ、現代の渋沢栄一翁ではありませんが、大きな転換が求められます。そして残念ながら、私も含めて埼玉県庁の人間は、渋沢栄一には追いつきません。そこで皆さんとともに作り、そして皆さんとともに栄えていく共創、共栄の社会が必要とされているということを最後に私からも申し上げて、これすみません、半分ぐらい細田先生のパクリですが、持続的発展につなげていきたいと思っています。御清聴ありがとうございました。



(3) 事例報告「浦和レッズ SDGs サークュラーエコノミーの取り組み」

浦和レッドダイヤモンド株式会社 コーポレート本部スタジアム運営担当 早川拓海氏

(略歴)

2014年に浦和レッズが運営するスポーツランド「レッズランド」に入社し、イベント企画などを担当。2018年浦和レッドダイヤモンド株式会社に転籍。2020年からは現在の埼玉スタジアム2002の指定管理業務を担当。Jリーグなどの大規模試合の運営やサーキュラーエコノミー、SDGsも含めたさまざまなイベントの企画運営などを行っている。



●社会課題の解決へ向けて

皆さんこんにちは。このたびは3R推進全国大会での講演の機会をいただきまして誠にありがとうございます。こちらの会場には、今まで浦和レッズの活動に多大なる御協力をいただいた企業さんもおられると聞いております。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。先ほど細田先生のすばらしい話と大野知事のすてきなアドリブ力でもう僕の講演はいいのではないかと思いますのですが、皆さま我々の説明を聞きに残ってくださるということなので、私から御説明をさせていただきます。

さて、本日は「浦和レッズ SDGs サークュラーエコノミーへの取組」という題目でお話をさせていただきます。こちらにお集まりの皆さまは、浦和レッズがなぜサーキュラーエコノミーの取組かと思われている方もおられるかと思います。浦和レッズ自体を御存じない方もおられるかと思しますので、まずは簡単に浦和レッズというクラブを御紹介させていただきたいと思います。その前に浦和レッズというサッカークラブを御存じの方はどれくらいいますか。良かった。ありがとうございます。自信を持って進めさせていただきます。

浦和レッズ(図1)ですが、この会場もありますプラザノースが位置している埼玉県さいたま市をホームタウンとしたサッカークラブです。Jリーグクラブですが、現在JリーグというプロサッカーリーグにはカテゴリーでいうとJ1からJ3、地域でいえば北海道から沖縄まで、現在60クラブが存在しています。その全てのクラブがJリーグの理念に基づいて、ホームタウン制度を導入して、我々浦和レッズはさいたま市をホームタウンとしています。

さいたま市は2001年に旧大宮市、旧浦和市、旧与野市が合併して誕生していて、こちらの会場のプラザノースは旧大宮市に当たりますが、我々は旧浦和市を拠点としています。ちなみにもう一度質問ですが、旧大宮市にもサッカークラブがあるのを御存じの方はおられますか。同じくらいですね。ありがとうございます。大宮アルディージャさんが旧大宮市を拠点に活動していますが、我々2クラブはともに手を取り合いながら埼玉県を盛り上げていくという使命を持っております。大宮アルディージャさんのクラブの説明は私からはできないので割愛させていただきますが、サッカークラブということでサッカーの興行が本業ですが、Jリーグのクラブは地域の公共財として表現されるように、サッカーだけではなく、さまざまな活動を行っています。(左下の写真は)女子のプロサッカーリーグであるWEリーグに所属するレッズレディースがWEリーグ優勝したときの写真です。こちら(右上の写真)は元日本代表でもある落合弘さんですが、サッカーを教えるだけではなく心の豊かさを育むハートフルクラブという活動もしています。あとは埼玉県さいたま市の桜区に位置するレッズランドという総合型スポーツクラブの運営をしています。我々浦和レッズは、青少年の健全な発育への寄与、健全なレクリエーションの場の提供、埼玉と世界をつなげるということを根本的な方針として活動を行っています。

続いて、浦和レッズ SDGs(図2)ですが、浦和レッズはサッカークラブとしてどのように地域に存在意義



図1

を見出していかを考えて、SDGs 以前の MDGs、ミレニアム開発目標より試合運営やホームタウン活動、ハートフルクラブやレッズランドの運営を通して社会課題の解決に向けてさまざまな活動に取り組んできました。サッカーという素晴らしいスポーツと深く関わっている Jリーグのクラブとして、我々が果たすべき役割をさらに強力に推進していくべく、クラブ内において SDGs 社内推進プロジェクトチームを立ち上げて、浦和レッズ



図2

SDGsにおける優先課題を掲げ、2023年4月に対外的に発表しました。後ほど後述させていただきますが、取組の一例としては、埼玉スタジアム飲食売店におけるリユースカップの販売や、埼玉スタジアム売店でのビニール袋、カトラリー類、食器包材等の環境配慮型素材への順次切り替え、子ども食堂との連携事業等を行ってまいりました。

次のスライド(図3)からサーキュラーエコノミーの話になりますが、浦和レッズSDGsを掲げる前に、サッカークラブとしてできる活動は果たして何かというところで、各所と相談調整をさせていただきました。そのときに埼玉県環境部資源循環推進課さまと出会い、サーキュラーエコノミーという活動を教えていただきました。Jリーグクラブのどこにでも言えることかと思いますが、こうした行政との取組施策については、なかなかタイムリーに情報をキャッチできていないという実情があります。環境に対して、社会に対して、



図3

何か良い取組をしたいという思いはありますが、何をすればいいのかが分からないという悩みを持っているクラブは数多く存在しているはずです。皆さまの都道府県、市町村にJリーグクラブがありましたら、ぜひ手を取り合って活動をしていただきたく思っています。

●サーキュラーエコノミーの取組

では、令和5年度からのサーキュラーエコノミーを御紹介します。我々は打ち合わせを重ねる中で埼玉県と浦和レッズの考えが合致しましたというところで、令和5年度より、埼玉県環境部資源循環推進課、そして埼玉スタジアム2002公園管理事務所、浦和レッズのパートナー企業でもある株式会社エコ計画、コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社と連携し、埼玉スタジアム2002で行われる浦和レッズのホームゲーム全ての試合で実証実験を開始しています。実証実験では、PETボトルの3分別、ボトル、キャップ、ラベルの回収の啓発のため、毎試合で啓発ブースを設置しました。また選手を起用した動画を大型映像装置で放映をして来場者に啓発を図っています。また、先ほどアップサイクルというお話もあったかと思いますが、こちらは埼玉スタジアムで回収したペットボトルを使ってマグカップを製作し、埼玉スタジアム内の飲食売店の中で販売をするという取組をしています。こちらが鈴木彩艶選手、こちらが伊藤敦樹選手の2選手です。この2人は両方とも埼玉県出身の選手で埼玉県と行っている施策のため、こうした選手を起用しています。

令和6年度から新たな取組(図4)として、埼玉スタジアム2002で行われた浦和レッズのホームゲームにて排出された食品残渣を回収、堆肥化してその肥料を使って野菜を育てる「埼玉スタジアムフードサイクルプロジェクト」に取り組んでいます。埼玉スタジアムで行われた2試合で排出された食料廃棄物約20kgを肥料

として野菜を生育し、約 200kg 収穫しました。その野菜は、ほうれん草、チンゲンサイ、小松菜、ラディッシュ等です。この野菜を使用したスタジアムグルメを 8 月 7 日に開催した明治安田生命 J1 リーグ第 25 節柏レイソル戦で中華丼として販売しました。残念ながらこの 8 月 7 日のサステナブル DAY 柏レイソル戦は荒天により中止になってしまいましたが、この活動を我々のクラブのオフィシャルサイト等で取り上げたところ、非常に多くの反響をいただいて、今第 2 弾の制作に移っています。そ

ちらを日本テレビ系 ZIP! の「旅するエプロン」という企画に取り上げられて、企画内では栽培している野菜を使用したスタジアムグルメを考案しています。こちらが ZIP! に取り上げられたときの映像になります。御紹介が遅れましたが、こちらの選手が三菱重工浦和レッズレディースという我々が持つ女子チームで活躍している塩越柚歩選手です。この選手は今、日本代表にも招集されており、非常に活躍目覚ましい選手でエコ計画さんのアンバサダーも務めていて、この企画には非常にぴったりな選出となっています。

余談になりますが、先ほど紹介した鈴木彩艶選手や伊藤敦樹選手は、今クラブを離れて海外で活躍していて、両選手とも日本代表に選ばれています。塩越選手も埼玉県出身で、この企画に活用したところ、日本代表に選ばれたので、多分この企画自体が埼玉と世界をつなげているのかなとも思っています。

続いて令和 6 年度の施策（図 5）を引き続きお話ししますが、令和 5 年度から取り組んでいる PET ボトルの 3 分別回収については、令和 6 年度も継続して実施しています。スタジアム内での分別率は約 70% まで向上していて、2024 シーズン終了までには約 80% まで引き上げるべく、ブース出展やアップサイクルの商品、選手を起用したプロモーションなどさまざまな活動を行っているところです。御存じないかもしれませんが、原口元気選手は、うちのジュニアユースからユースを卒業して浦和レッズに加入、その後海外や日本代表で活躍して今年の夏に戻ってきました。この選手を使ったプロモーションはこのサーキュラーエコノミーのものが初めてということで、非常に浦和レッズとしてもこのサーキュラーエコノミーという施策には力を入れています。

昨年、サーキュラーエコノミーブースを毎試合出展しましたが、今年については多くの観客が見込める試合への出展を埼玉県と調整をさせていただき、こちらの資料に記載している 5 試合に出展することになりました。元々浦和レッズのクラブ内であるとか、来場されるファンサポーターの皆さまは、サーキュラーエコノミーという言葉を知らなかった方が多かったのですが、こうした活動を通してアンケートも調査しました結果、サーキュラーエコノミーという言葉を知るようになった方が多く、浦和レッズというクラブを通してサーキュラーエコノミーの訴求ができていると感じています。

また、先ほど御紹介しましたアップサイクルマグカップだけではなく、こちらのアップサイクルカトラリーはペットボトルの回収箱で回収したキャップから製作したスプーンやフォークです。こちらは今シーズン 3,000 本製作を予定していて、この後のホームゲームで、残りわずかですが、販売される予定です。また、場内に設置しています PET ボトル 3 分別回収箱については、全てに浦和レッズの選手のサインが書いてあるので、来場されるファンサポーターの皆さまで興味がないという方でも浦和レッズの選手のサインを見たさ



図 4



図 5

にこの3分別回収箱に目を触れて、そこから自宅に帰って、そういえば浦和レッズはこんなことをやっていたなと思い起こしてくれればという思いを込めています。

最後に浦和レッズSDGs優先重要課題(図6)を改めて御紹介したいと思います。浦和レッズは「こころとからだの豊かさをすべての人に」「サステナブルなスタジアムとまち」「レッズファミリーとの共感共創協働」ということを掲げていて、SDGsの目標をひも付けて対外的に発信しています。浦和レッズをはじめとして、Jリーグクラブについては、決して自らの力のみでは存在していくことはできないと考えています。それは選手、監督、クラブスタッフがいてと



図6

いうことではなくて、ホームタウンの方々をはじめ、協力企業やクラブを支えてくれている方々の応援や協力があって成り立っているものです。その方々全ての人たちに必要とされる存在でなければいけないと私は思っています。その点、幸いにも、この埼玉県さいたま市で活動させていただいている我々浦和レッズは、とても幸運なクラブと感じています。埼玉県の協力がなければ我々はこうした活動もできていませんし、もっと言うと、存在すらできていないのではないかと感じています。

今後についても、サーキュラーエコノミーの推進はもちろんですが、社会、地域に必要とされる存在になるべく、さまざまな活動を行ってまいりますので、ぜひ皆さまのお力添えをいただければと思っています。埼玉県以外の企業の方々に関しても、地元のJリーグクラブやスポーツクラブに協力できる部分が幾つかあると思いますので、少しでも御協力いただければと思っています。以上で私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。



(4) パネルディスカッション

「地域におけるサーキュラーエコノミーの推進と実践」～持続可能な未来への道筋～

【コーディネーター】

- ・ 3R・資源循環推進フォーラム副会長、ジャーナリスト、環境カウンセラー、
全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会会長 崎田裕子氏

【パネリスト】

- ・ 大日本印刷株式会社情報イノベーション事業部環境ビジネス推進部部長 西村知子氏
- ・ 株式会社木下フレンド代表取締役社長 木下公次氏
- ・ 株式会社 ECOMMIT 取締役 CSO 坂野晶氏
- ・ 国立環境研究所資源循環社会システム研究室室長 田崎智宏氏

○崎田 会場の皆さま、基調講演に始まってすばらしいお話がずっと続いたのですが、それを受けて、私たち自身がどのように今活動しているのか、そしてこれからどのように活動したらいいのか、そんなことを一緒に考えていく時間になりたいと思っています。壇上には、すでにいろいろと取り組まれている方々にお出でいただいておりますが、その中で悩みもあれば大変な状況もあると思います。ぜひ、しっかりと夢を、目指す所を語っていただきながら、今どういう課題に立ち向かっているのかも意見交換させていただければと思っています。皆さん、どうぞよろしくお願いたします。



実は、基調講演の細田会長のお話の中にキーワードがたくさん出てきました。例えば、モノからコトへという心の豊かさを求める時代になった、新しいストーリーをみんなで書く、そのときには共創、みんなで戦うという競争ではなくて、共に創っていく、社会をみんなで変えていくというキーワードが出てきました。そして埼玉県の大野知事からは、そういうことを見据えてコーディネーターとしての自治体の役割を実現させようということ、サーキュラーエコノミー推進センター埼玉を作られたというお話も伺いました。さまざまな動きが一步ずつ進んでいるということを受け止めながら、次の一步をどう進めるか、そんな話し合いができればうれしいと思っています。

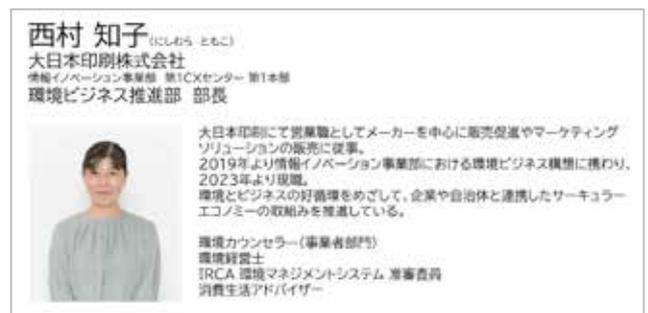


まず、皆さんがどういう取組をしておられるか、基本的なところを、自己紹介と皆さんのご活動の紹介ということでお話いただければと思います。

最初は、先ほどのサーキュラーエコノミー推進センターのネットワークのところで御参加いただいている大日本印刷株式会社情報イノベーション事業部環境ビジネス推進部部長の西村知子様にお話しいただきます。なお、ここからは皆さまさん付けでお話をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。西村さん、よろしくお願いたします。

○西村 ただいま御紹介にあずかりました大日本印刷 (DNP) 西村と申します。本日はどうぞよろしくお願

いたします。初めに自己紹介をさせていただきます (図1)。私は現在、DNPの事業部門情報イノベーション事業部に所属してまして、顧客企業の皆さまの環境・サステナビリティ経営を支援するサービスを開発推進しています。元々は営業職だったの



ですが、4～5年ほど前から環境のテーマに取り組

図1

んでいます。それでは、当社当事業部門で推進している取組について簡単に御紹介します。まず DNP 大日本印刷の企業理念（図2）は、「人と社会をつなぎ、新しい価値を提供する」、ブランドステートメントは「未来のあたりまえをつくる。」となっています。印刷という名前が社名についてはいますが、非常に幅広い事業を展開しています。こちら（図3）にあるように、エレクトロニクス部門、ライフ&ヘルスケア部門、そして私が所属する情報イノベーション事業部があるスマートコミュニケーション部門、大きくはこの三つの事業分野で構成されています。

なぜ DNP が環境に取り組んでいるのか（図4）ということもよくお問い合わせいただくのですが、印刷会社というのは街の中に工場がある業態で、今から50年ほど前の1972年に社内に専門の部署を設置しています。このときは公害問題などで工場から出る廃棄物が非常に問題になっていた時期でしたので、廃棄物管理の観点で部署を作ったのですが、そこから約50年以上そういった取組を続けてきていて、最近では第三者、外部からの御評価もいただけるような状況となっています。

そして、先ほど幅広い事業部門と申し上げたのですが、その中で紙だけではなく、プラスチックを使ったモノづくり（図5）を行っておりまして、世界トップシェアの製品サービスや国内トップシェアの製品サービス、全てプラスチックを使った製品となっています。私たちとしては、プラスチック資源循環を自分事として捉えて解決に少しでも貢献していきたいということで活動しています。

さまざまな事業部門があると申し上げましたが、私たちが所属している情報イノベーション事業部では主にマーケティング事業、ビジネスプロセスアウトソーシング事業、情報セキュリティ事業を推進しています。例えば、分かりやすいアウトプットで言うと、企業の皆さまのセールスプロモーションに使うようなカタログやチラシや、また店舗の什器などを幅広く作っています。このような事業内容からこういった環境ビジネス、環境課題解決を推進していくような取組



図2



図3

図4

図5

ができるかということで、三つの御提供できる機能(図6)を整理しています。一つ目が「環境に配慮したモノづくり」、そして二つ目が「環境に配慮したアクション浸透・コミュニケーション」、そして三つ目が「資源循環スキーム構築・運用」となります。このような形(図7)で顧客企業の皆さまを御支援しています。そして各事業部門で環境に取り組んでいるメンバーがいるので、DNP GREEN PARTNER(図8)というチームも組織して、お客さまに伴走するメンバーとして社内でもネットワークしながら進めているところです。

図6



図7

図8

取組の一つの事例として、これは(図9)埼玉県での実証実験になりますが、リサイクル工程のトレーサビリティを確保して、その取組がどのようなものだったかという見える化を実施しました。先ほどコミュニケーションを作っていくのが得意と申し上げたのですが、環境では見える化が非常に大事になってくると思ってしまして、これはトレーサビリティのデータは左側の下にあるような帯状のデータであるところ、それを読み解いて生活者の方に伝えるとしたらこんな伝え方がいいのではないかということを試したものになります。

図9

もう一つは、脱炭素(図10)が企業・事業者の皆さまの重要な事項になっています。スコープ3のカテゴリーの中には廃棄物を減らし資源循環を進めることで良化すると思われるものもあるので、こうしたところも企業の皆さまにお話をしながら、資源循環を進める活動を行っています。

図10

資源循環ではこういった形(図11)で、一貫してお手伝いを行っています。そしてデザインも非常に重要になってきます。再生材を使っていくためにはデザインの力をもっと使っていききたいということで、こちら(図12)は、展示ルームでも御紹介していますが、木粉や紙粉とプラスチックを混ぜて、3Dプリンターで出力をしたものです。実物はかなり大きくて、ベンチのようなものです。紙もリサイクルの優等生とされています

が、ロングライフで愛着を持って使っていただく用途があることで、資源循環も進むと思っています。このようなアウトプットも当社としては一生懸命考えています。



図 11



図 12

埼玉県との取組ですが、「埼玉県プラスチック資源の持続可能な利用促進プラットフォーム」(図 13)は 2021 年に組織され、私たちも参画をしていました。こちらは今年の 6 月から対象分野をプラスチックから全分野に拡大して、先ほど大野知事からもお話がありましたように、今はさまざまな分野のサーキュラーエコノミーを進めるプラットフォームとなっていて、当社もこちらで活動しています。



図 13

2021 年に参画した後、多くの取組を埼玉県とご一緒致しました (図 14)。私たちの会社でお客さま向けに行う環境セミナーなどで資源循環推進課の課長に御講演いただいたり、また私たちも実証実験に参画したり、また去年の県民の日にはサーキュラーファッションショーのお手伝いをさせていただくなど、ここまでいろいろなことにお取り組みさせていただいて本当にありがたく思っています。



図 14

これらを通じて感じるのは、資源循環を進めるためには、回収の仕掛け作りが大事ということです (図 15)。入口でしっかりと集めることで、後ろのリサイクルが質の高いものになると感じています。そして取組全体の認識も非常に大事で、どんなものになるのか、また何からできているのか、こういったことをしっかり生活者の方に伝えることで、取組の意義がより増し、参加意欲も増すと考えています。そしてその成果の可視化、成果の発信がとても大切です。



図 15

地域循環共生圏 (図 16) も資源循環と非常に近い考え方だと思っていて、私たちとしてもこの推進に貢献できたらと考えています。

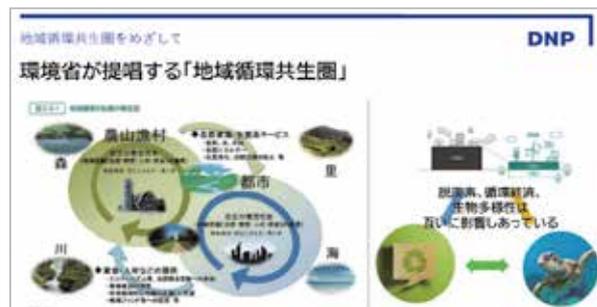


図 16

非常に駆け足でしたが、私たちは、モノづくりを通じて、動脈と静脈をつないで、官と民をつないで、新たなコミュニケーションを創出したいと考えています (図 17) ので、どうぞよろしくお願ひいたします。

簡単ではございますが、以上で発表を終了いたします。

○崎田 西村さん、ありがとうございます。私たちから見ると、大日本印刷は印刷業界の非常に大きな会社という印象ですが、西村さんの環境ビジネス推進部はその中でもいろいろな企業とともに、環境ビジネスをいかに推進していくかという伴走型の部門で、行政とし

てつなぐ埼玉県同様、企業としてつなぎ手に、というお気持ちで取り組む部署ということで、後ほど少し細かい事例などをお話いただければ大変ありがたいと思います。

それでは、次にこちらの地域の企業の代表格ということで、株式会社木下フレンド代表取締役社長の木下公次さんにお話を伺います。よろしくお願いします。



○木下 こんにちは。株式会社木下フレンドの代表の木下でございます。代表に就任して13年で、こちら(図1)にいろいろと肩書が書いてありますが、釣りとキャンプをこよなく愛するものでございます。本日は、皆さま、よろしくお願いいたします。

御覧いただいているのは

(図2)、私どもの工場です。関越自動車道所沢インターチェンジのすぐ脇にあるので、会場の皆さまで御存じの方もおられると思いますが、ごみ収集車を中心に200台強のトラックを有していて、埼玉県の西部地区、それから東京都23区、多摩地域を中心に営業をしています。1972年の会社設立で今年52年になります。廃棄されたプラスチック類を中心にグループ会社と連携してさまざまなリサイクルに取り組んでいます(図3)が、例えば、食品リサイクル事業や、それに伴う養豚場の運営、プラスチック類の売買など専門性を持たせて行っています。現在サーキュラーエコノミーの推進企業として鋭意取り組んでいるところです。

近年の取組ですが、2022年8月にキリンビバレッジ株式会社、東武鉄道株式会社とPETボトルの水平リサイクル、ボトルtoボトルの実証実験に取り組みました(図4)。鉄道の各駅に設置されていた廃棄物の容器をリサイクルボックスに置き換えて、これを一括収集して当社工場で分別して減容した後、ボトルtoボトルの橋渡しを行うという事業です。それから今年、2024年5月の再資源化事業等高度化法の公布に伴い、私どもの工場ライン、選別ラインを高度化、リニューアルする準備を始めているところです。

今年10月からは環境省の先進的モデル形成支援事業をスタートしました(図5)。内容は、埼玉県の三



図17

代表者プロフィール

1991年_2013年
(株)ジェイ・アール・エス代表取締役

2012年 (株)木下フレンド代表取締役社長就任

【業界団体の主な役職】
一般社団法人埼玉県環境産業振興協会 副会長
一般社団法人東京クリーンリサイクル協会 理事
所沢一般廃棄物処理事業協同組合 副理事長

株式会社 木下フレンド
代表取締役社長
木下 公次

図1

木下フレンド 会社概要

社名 株式会社 木下フレンド
代表 代表取締役社長 木下公次
設立 1972年4月28日
事業内容 廃棄物収集運搬および中間処理等
年間3万1千トンの取扱い高
約5000事業所と契約し、車両台数約200台で東京都23区、多摩地域、埼玉県西部を中心に回収しています。
活動拠点:本社(所沢)、東京支店(池袋)
板橋営業所、葛飾営業所、大田営業所

図2

木下フレンド 会社概要

1960年 木下兄弟 株式会社設立
1972年 株式会社木下フレンド設立
1977年 廃棄物処理法施行
1995年 自動車廃リサイクル法施行
1996年 ペットボトル 資源化事業を開始
2001年 食品リサイクル法施行
2005年 ペットボトル グループ会社にて 食品リサイクル工場完成
2019年 CO2排出抑制計画事業にて 水式3段階導入
2022年 プラスチック新法施行

国の方針に従い、事業計画を決定 社会に必要とされる企業へ
2022年からサーキュラーエコノミー推進の取り組みを加速

図3



図4

サーキュラーエコノミー ~ キャップリサイクル ~

埼玉県三郷市:「環境省先進的モデル形成支援事業」採択

名称 ペットボトルキャップの拠点分別回収・リサイクル・再商品化の先進モデル事業
期間 2024年10月~12月
内容 ペットボトルキャップ専用の回収ボックスを市内の公共施設等に設置し分別回収を行い、組成分析調査や効果検証等を通じて、ペットボトルキャップの分別回収に最適なリサイクルビジネスモデルを検討する。合わせて、効果的な回収方法の検討を行う
場所 市役所 学校 図書館 体育館 スーパー 商業施設

脱炭素、資源循環を支援「燃やす」から「リサイクル」へ、ペットボトルキャップの処理の仕方を転換
地方自治体へ広げる全国標準モデルを

図5

郷市で PET ボトルキャップの拠点別回収・リサイクル・再商品化の先進モデル事業に取り組んでいるところです。PET ボトルはすでに皆さん御存じのとおり、非常に高いリサイクル率を誇っており、90%ぐらいと言われていますが、ボトルキャップは実際どうなっているのかがよく分かっておらず、10%以下という話もある状況です。そこで、ボトルキャップの定量的なデータの収集、状況把握などを考慮しスタートしています(図6)。三郷市の小学校、中学校、それから公共施設など65 拠点にキャップの専用ボックスを設置して、異物混入や、どのぐらいの量が集まるかといった多岐にわたる事項を把握、定量化しながら、今後、リサイクル率等も含めてどう目標にすればよいのかなど最適なリサイクルモデルを構築する考えです(図7)。

昨年、2023 年4月に、リサイクルボックスなどのデザイン、設計を手がける企業、それから資源循環を推進している企業をメンバーに、「あすの資源を考えるコンソーシアム」を発足して、5月にビッグサイトで行われた NEW 環境展にも出展しました。コンソーシアムについては、この会場のパネルブースにてリーフレット等を配布していますので、ぜひそちらの方にもお立ち寄りいただければと思います。それから、前後してすみませんが、2022 年9月、サーキュラーエコノミーのパートナー企業である首都圏環境美化センター社と日経 SDGs フォーラムにて「中間処理が担うプラスチック資源循環」というテーマで講演も行いました。以上です。

○**崎田** 木下さん、ありがとうございます。ボトル to ボトルと PET ボトルのキャップリサイクル、この辺を集中的にやろうとされているというお話を頂きました。後でもう少しこの事業などを御説明いただければありがたいと思います。今 PET ボトルのキャップリサイクルのお話がありましたが、少し前にみんなでキャップを集めて外国にワクチンを送ろうという福祉活動を応援するようなプロジェクトもありましたが、次の段階でいかにこれを効率よく集めていくかというまた新しい視点でのお話でした。

それでは、次に株式会社 ECOMMIT 取締役 CSO 坂野晶さんにお越しいただいているのですが、私はゼロ・ウェイストで頑張っておられ、徳島県上勝町で活躍された坂野さんという印象が強いので、その辺の昔のことから今につながるお話もしていただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

○**坂野** ありがとうございます。皆さま、改めまして、こんにちは。崎田さんに早速御紹介いただきましたが、私個人は元々日本初のゼロ・ウェイスト宣言を行って有名な徳島県上勝町、最近のごみの分別は43種類らしいのですが、その上勝町でゼロ・ウェイスト政策を推進するという、行政に伴走する NPO にいたというのがバックグラウンドです。その文脈でいろいろな自治体や地域と今もこのゼロ・ウェイストの取組、まさに資源循環をどう進めるかというところに取り組んでいます。今日は別の看板で参りましたので、ECOMMIT という会社を御紹介させていただきます。

我々はまさに資源循環のインフラを作っていくと考えています(図2)。左側に丸い図がありますが、一直線一方通行の経済から循環させていくためには、誰かがしっかりと使い終わったも



図6



図7





株式会社 ECOMMIT 取締役 CSO (Chief Sustainability Officer) ・ ESG推進室長 坂野 晶

日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を行った徳島県上勝町の廃棄物政策を担うNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー元・理事長。地域の発展と持続可能な社会と国内外におけるゼロ・ウェイスト普及に貢献。2019年世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議) 共同議長。2020年より一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパンにて環境型社会のモデル形成に取り組む。2021年、脱炭素に向けた社会企業を起す人材育成プログラム Green Innovator Academy を共同設立。2023年より株式会社 ECOMMIT 取締役 Chief Sustainability Officer に就任。日経 WOMEN OF THE YEAR 2022 受賞。

World Economic Forum Future Council on Japan (2020)、World Economic Forum Global Shapers Community Foundations Board (2020-2021)、慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員 (2023-3)、人間環境学部長 (2023-3)、NHK 放送文化審議会委員 (2023-3)、Innovation for Cool Earth Forum Steering Committee (2024-1)、経済産業省サーキュラーエコノミーに関する産官学のパートナーシップ 地域循環モデルワーキンググループ委員 (2024-3)ほか

図1

のを回収して選別をして、また次に使えるように再流通させていくということが非常に重要です。ここを担いましょうと。さらに右側にトレーサビリティと書いてありますが、こうした回収から再流通までの過程をなるべく可視化していこうということで、まだまだ完璧ではありませんが、結構古くから自社で頑張っている会社です。どこからどんなものが集められたのか、いつそれが集まってきたのか、それが選別されてどこに行ったのか、データで追いかけることにチャレンジしています。

会社（図3）は本社が鹿児島県の薩摩川内市にあり、創業17年になります。元々社長が創業した頃は中古の農業機械の輸出をしていましたが、そこからさまざまなものを扱うようになって今に至っています。先ほど申し上げたトレーサビリティも、実は昔は中国に中古の家電製品を輸出していたことに端を発するのです。現地を見に行くと、例えば環境被害とか、それに携わる皆さんの健康に影響を及ぼすような実態があった。そんなことはやりたくないということで、当時儲かっていたのですが、その事

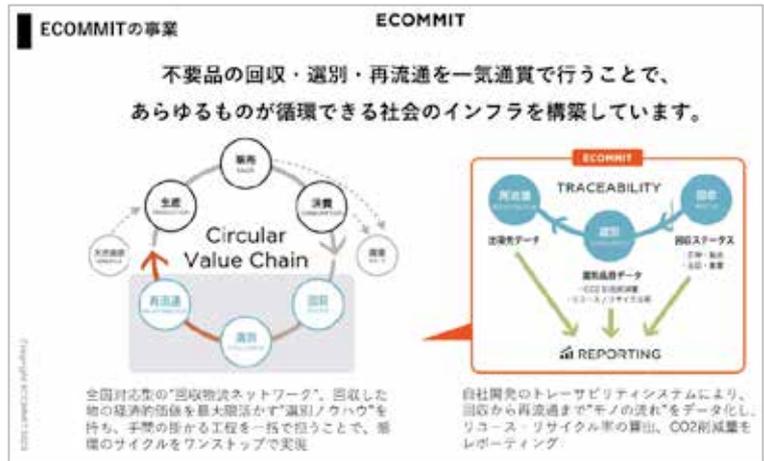


図2

会社概要

ECOMMIT
地球にコミットする循環商社

会社名: 株式会社 ECOMMIT (有限会社)
 設立年月日: 2007年8月17日 (法人登記日)
 従業員数: 135名 (2023年9月末時点)
 本社所在地: 鹿児島県薩摩川内市
 資本金: 5億7,401万円 (資本金増額中)
 年間取扱品数: 12,000t (出荷約5,000t) (2023年度実績)
 事業内容: 商業型社会向けインフラ・システム開発及びリソース・リサイクル有償

主要株主: FSC, JAS, 日本環境センター, Kipri, 株式会社 環境未来, 株式会社 環境未来, 株式会社 環境未来

すべての必要と
すべての不要をつなげる。
捨てない社会をかなえる。

図3



図4

業を止めるという判断をして、そこからこのトレーサビリティも自社で頑張ろうと取り組んでいます。

何をしているか、今日は行政向けの取組（図4）をまずは御紹介をします。さまざまな自治体と連携をさせていただいて、皆さんがごみとして廃棄物処理施設に持ち込んだもののうち、まだまだ使えるものを現場で選別してレスキューしようと、クリーンセンターなど廃棄物処理施設から買い取りをしています。同時に、どれだけちゃんとリユースできたのかをレポートングをして、皆さまに知っていただくというのが一つ目です。このように（図5）現場で実際に作業員の皆さんと基準を擦り合



図5



図6

わせながら、ピックアップしたり、保管していただいで回収しています。

さらに、今の事業は皆さんがごみとして出したものを何とかレスキューしようという話ですが、それでは皆さんの意識としては1回捨ててしまったものがどうなったかを考える機会がない。これは意識の問題だと思しますので、そもそもまだ使えるものはまだ使えるものとして集めようということで、こちらも自治体の皆さんと「リユース品回収の日」を作って、その日は市民の方にまだ使えるものという前提で持ってきていただいています(図6)。埼玉県ではさいたま市や入間市などの自治体と一緒に開催しています。皆さんに持ち込んでいただいで、その日どんなものがどれだけ集まり、それが何%リユースされたということ、例えばウェブサイトでも公開していただいています。

これ(図7)は兵庫県の西宮市ですが、写真の左下に写っているのが市長で、市長にも持ち込んでいただいています。こちら(図8)は鹿児島県の事例ですが、車で持ち込みできるような場



図7



図8



図9



図10

所で開催すると、結構皆さん片付けついでに家具など大きなものまで持って来られます。あるいは食器などご自宅で眠っているものもたくさんあると思いますが、そういったものを出していただいで、しっかりと我々が次につなげていくことをやらせていただいています。

さらに、もう少し市民の皆さんの生活動線上で循環させるという行動を身近にしていきたいということで、昨年から始めた取組が PASSTO というサービスブランド(図9、図10)です。“Pass to” という次につなげるという英語を



図11

縮めて「PASSTO (パスト)」という名称にしています。例えばこの青いボックスを商業施設や郵便局、オフィスビル、マンションの共用部、あるいは公共施設などに置いていただいて、リユース品回収の日だけだと、年数回程度になりますが、日々の生活動線で通勤途中とか買い物に行くついでに出せるようにしています。こちらも同じように定期的に我々が回収して、それがどうなったということを置いている拠点ごとにレポートニングできるように取り組んでいます。これに関連して回収の効率化を図るための実証事業を今年度埼玉県サーキュラーエコノミーのビジネスモデル事業に採択いただいて頑張っています。PASSTOの導入も自治体の皆さんと一緒にこういったボックスの設置場所を市民の生活動線、目線を考えて検討して、自治体としても広報していただくという取組をしています。

今映っているのは(図11)愛知県の蒲郡市さんですが、このように多層的に取り組んでいます。皆さんに身近に触れていただけるようなボックスがあり、イベントとして大型のものを持ち持ち込めたり、リユース品として出していただいたり、さらに水際で回収するというを組み合わせながら、なるべく捨てるものを減らしていきたいと取り組んでいます。現状、自治体パートナーは、全国40を超える自治体と連携して取組を進めています(図12)。同時に企業が窓口になって啓発も兼ねながら御一緒するような取組も増えてきています。

さらにこちら(図13)はぜひQRを読み込んで御覧いただきたいのですが、そうやって生活動線上の回収ボックスを利用いただいている皆さんにどんな意識変化があったかについてサーベイを取らせていただいています。皆さんが何かしらに貢献したいと思っておられて身近に取り組みやすい回収ボックスに入れるという傾向がある。商業施設からすると買い物ついでに持ってきてもらうという認識だと思いますが、逆に回収ボックスに物を入れてきて持ってきて、ついでに買い物もしていくという動機もあったりするので、意外と店にとってもいいことです。そんなことがわかってきました。いろんな連携の形が進んでいくと考えています。早足でしたが、ここまで御紹介とさせていただきます。ありがとうございます。

○**崎田** ありがとうございます。最後の数字で、衣類回収ボックスを環境に貢献できることを理由に利用した方が61%というのはうれしいですね。多くの人の気持ちがこうやって育っていつているというのは、勇気が出ました。また後で、いろいろ伺えればと思います。

次は、国立研究開発法人国立環境研究所の資源循環領域資源循環社会システム研究室の室長で資源循環の専門家として取り組んでおられる田崎さんです。まずは今どのようなことをされているかというところから伺って、その後はじっくりと地域のサーキュラーエコノミーの話を中心に御発言いただけるとうれしいと思います。よろしく願いいたします。



○**田崎** 私は国の研究所の研究員でもあるので、国レベルの話、それから国際レベルの話をしたいと思っています。この分野でも四半世紀研究をしてきましたが、こちら

(図1)に赤字で書いてありますようにサーキュラーエコノミー、サステナビリティというところで、指標、EPR、デポジット制度、ライフスタイルといったところでの研究をしてきました。今日は、その中でも指標

について、最近の私の取組を御紹介して、国際的な動向を踏まえて埼玉でどうしていくのかというところにつなげていきたいと思っています。



図12



図13

自己紹介:田崎智宏 博士(学術)

国立環境研究所で24年間、学術的に研究(資源循環社会システム研究室 室長)

- ・リサイクル等のサーキュラーエコノミーの分野(物質フロー、指標、EPR、デポジット制度など)
- ・大きな視点でのサステナビリティの分野(持続可能なライフスタイル、SDGs、統合アプローチ)

専門:システム分析と 政策科学
 審議会等:中央環境審議会委員(家電リサイクル、廃掃法)
 循環基本計画の指標や各種リサイクル、2Rの検討会委員
 環境省SDGs関連の委員 など

業績:85+の原著論文、34の書籍、375+の口頭発表、9のデータベースを公表

プロフィールのページへ

図1

こちら（図2）が国際的な指標開発の動向、左側が EU や OECD などの国際機関が作っている指標です。それから、右側がエレン・マッカーサー財団、それから WBCSD というところの、基本的には企業の指標になっています。こういったものがどんどん出てくる中、真ん中に書いてある ISO でも今年5月に規格ができています。基本的にはサーキュラーエコノミーに向けた取組のパフォーマンスを図るという指標になっています。この後お話しするものとも類似するところがありますが、この図で見ていただきたいのは、左下の四つのカラーです。青の対策、緑の物質循環の状態というところ以外にも、環境影響をしっかりと見ようという赤の部分、それから社会経済への機会、チャンスをしっかり図ろうという黄色の部分が表示されています。

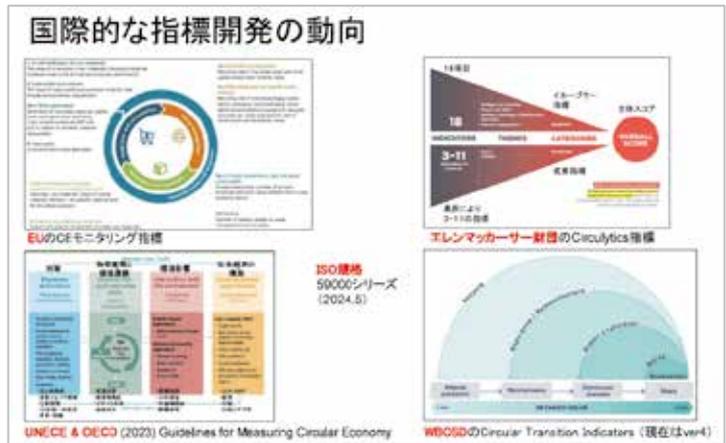


図2

国際的にグローバルな指標がないということで、WRI（世界資源研究所）、それから BEF（ベズス地球基金）など国際的な機関が連携して Systems Change Lab を作り、その中で世の中を変えていかななくてはならない、重要な仕組みを変えていかななくてはならないというところで指標データのプラットフォームを作っています（図3）。この14のシステムのうち一つがサーキュラーエコノミーで、私はメインの co-lead の一人として関わってきたので、その中から少し紹介をします。



図3

Systems Change Lab でサーキュラーエコノミーを実現するためには、基本的には六つの大きな変換、シフトをしないといけないと言われています（図4）。一番上に書いてある二つは、生産と消費を変えていこうということです。それから右側に書いてあるのは3Rというリデュース、リユースのところで、製品を長く使用する、それからリサイクルのところはその右下にあるように、使用後に回収される資源の量と価値を増やすということです。ここで注意すべきは、量だけではなく、価値を増やすということです。



図4

今日お話いただいた取組も、これまでの、例えば90年代の頃のリサイクルと違って、より価値を増すようなリユースも含めて、そういったことが取り組まれているかと思います。それとセットに一番左に書いてあるのは、リサイクルされた、もしくは再使用された、ないしは再生可能な素材や部品を使用するというです。それから最後は、日本にいうとやっぱり言い忘れてしまうところですが、資源採取における環境的・社会的悪影響を最小化するというです。

幾つかのデータを御紹介します。例えば、先ほどのリサイクルの値ですが、左の上流側を見ると、国際的には資源を使っている中の6%ぐらいしか、再生されたもの、リサイクルされたものが使われていない。今示されている EU のデータで 11.4%というのが今の状況で、日本も同じような値です。一方で廃棄段階の方はもう少し取組が進んでいて、世界的に見ると 35%ぐらいで、EU のターゲットで言うと 2030 年まで 60%にしようとしています。日本でも一般廃棄物のデータで言うと 20%前後というのが最近の値です。この後に議論をしたいと思いますが、サーキュラーエコノミーに本当になった場合は、自治体以外で回る部分が結構多く、

その分も入れると日本はこの 34.8%を超えるような状態にはあります。ただそれがきちんと把握されていないという点が一つ課題です。

それから資源採取の問題（図5）は、日本だとあまり気が付かない。例えば、世界的に見ると資源採取の所での深刻な障害がどんどん改善されている一方で、人権侵害、児童労働はデータでは横ばい、なかなか改善していません。

それから資源生産性（図6）は生産側で変えなくてはいけないのですが、世界レベルで見ると、実はこの20年ぐらいでたったの6%しか増加していない。GDPは79%も増大している。日本はこれと比べると、その左側の方に794という値がありますが、大体4倍ぐらいの値は出ています。この20年も日本の取組の場合、資源の生産性は40%ぐらい改善しているので、日本でやっていること、ないしは埼玉県下でやっていることをもう少し発信して世界に示せることがあると思います。

しかし、一方で資源利用の公平性について見てみると、やはり世界では格差があります。日本はこの緑の所に属しています。人口では少ない方の26%の方々が世界の物質資源消費の55%を使っている状況です。正確に言うと、物質フットプリントを含めて55%を使っている。一方で人口の半分の50%の方々は全体の19%しか使っていないので、我々がやらないで誰がやるのかというところがあります。このことから、サーキュラーエコノミーは世界的な観点から見て求められているという状況です。私から以上です。

○**崎田** ありがとうございます。サーキュラーエコノミーに世界が真剣に取り組み始めていて、そのデータをどのように集積するかとか、そういう研究に世界の研究者とともに関わっておられることがよく分かりました。また、今後日本の社会にどんどん発信していただければと思いますが、先ほどお話が出た中でサーキュラーエコノミーは自治体だけではなくて、民間の方の動きが増えてくるのをどう把握するかが課題というお話がありました。ちょうどいろんな話し合いの中で、例えば産業廃棄物の電子マニフェストなども把握する項目を増やして排出事業者からもどういう状況なのか、リサイクルされている状況を見える化するという検討も進んでいるので、もちろんそれがモノづくりをする事業者につながっていかねばいけないのですが、取りあえず状況を明確にしようという動きはある。ただそれだけではなくもっと新しい指標を作るといって御研究をされていると思いますので、今後また情報をいただければありがたいと思います。

それでは、じっくりとお話をしていきたいと思います。皆さんもいろいろ伺いたいことがあると思いますが、私はまず皆さんがこういうサーキュラーエコノミーにしっかり取り組んで、資源をきちんと回して自然資源の使用を少なくしながら心豊かな暮らしを作っていくところに関わっていると思うので、サーキュラーエコノミー、どんな暮らしや社会を理想像と考えて取り組んでいるのか、まずその将来像を教えてください。コメントいただいた順序で、DNPの西村さんからお伺いしたいのですが、最後のパワーポイントに動静脈をつなぎ、官民をつなぐというお話がありました。大事だと思いますが、具体的にはそれがどうなっていく社会を夢見ておられるのか、教えてください。

○**西村** 動脈と静脈というのは今までは別々に回っていましたが、今どんどん連携が取れてきていると感じています。また官と民も、これまで活動していましたが、資源循環という新しいテーマを受けて連携の動きが活性化していると思っています。私たちは、そういったつながりの中でいろいろと行動が変



図5

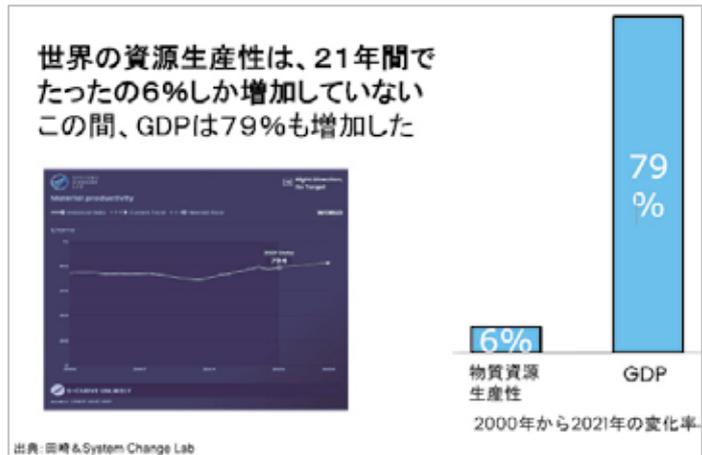


図6



わっていくところを、自分たちの取組を通じてサポートしていきたい、貢献していきたいという気持ちが強くなっています。このように考えるに至った経緯ですが、先ほど当社の御紹介でプラスチック資源循環に取り組んでいる話をしました。これは当社にとって新たなチャレンジでしたが、リサイクルの中身をよく見てみると、実はこれまでモノづくりの事業で何十年も行ってきた多くの協力会社の皆さまのお力を借りて、さまざまなものを作っていくというプロセスとリサイクルも非常に似ているということに気付きました。こういった複数の企業間で品質や日程やコストなどを管理しながら目指すものを作ってきた経験と、動脈のモノづくりで求められる企画やマーケティングといった要素を含んだ経験が、資源循環スキームの効果的、効率的な運用や再生材を使った製品の新たな価値の創出にお役に立てると考えています。

○**崎田** どうもありがとうございます。そうすると例えば埼玉県のケースでは、お隣の木下さんとの出会いなどでいろいろつながっているかと思いますが、こういうことが広がっていけば本当にすばらしいと思います。それでは木下さん、目指す姿、将来像を語っていただければと思います。

○**木下** 静脈と動脈の両方が情報共有しながら最適な解、どのようにしたらうまく発展させていくことができるのかというところを求めていながら仕組みを作っていくことが重要です。先ほどのPETボトルのキャップの話もそうですが、ボトルのキャップを集めてワクチンを送るという話が出ていましたが、当初はどうしても状況が分からないので、やみくもと言ったら失礼かもしれませんが、とにかく集めるということになります。キャップは御存じのとおり、意外と量が貯まりません。どのように集約するか、それを集めたときにもどのぐらい夾雑物、キャップ以外のごみが捨てられるのか、リサイクルできないものがどれくらい混ざっているのかがよく分からないままスタートしてしまって、そもそも軽くて運送効率がものすごく悪いPETボトルのキャップなので、そんな状態では余計コストがかかり、効率も良くないという状況があって、先ほどお話ししたように状況把握を含めて三郷市と一緒にキャップリサイクルに取り組むことにしました。



その中で何が起こるのか、どのぐらい夾雑物が出てくるかをしっかりデータ収集して、状況を把握した上で、最適な形を作っていく。その際、他業種など様々な組織・団体と提携していく事が実現への筋道であると考えます。これは最後には製品として商品化するので、ただ集めて持っていけばいいというわけではなく、どの程度の品質の高さ、グレードにすればよいのかを含めて見ていかないといけないので、そうした中で連携をスムーズにして、情報共有しながらやっていくところがまず第一歩と捉えています。

○**崎田** そういうことをいろんな主体と話し合えるような場をみんなで作っていく、そういうことを目指しておられるという理解でよろしいですか。

○**木下** そうです。

○**崎田** それではECOMMITの坂野さん、先ほどの発表の中で、捨てない社会を考えていくというのは、キーワードとしてはゼロ・ウェイストと同じことを言っているのだと思いますが、そこはすごく大事だと思います。それを自分たちの取組の中でどのぐらいの頑張りでどういう社会につなげていけるか、どんなふう将来展望を考えておられるのか、教えていただけますか。

○**坂野** 今分かりやすく、捨てない社会を叶えるというのをビジョンで出していますが、もう1段階上の話をすると、地球1個分の資源で暮らせるというところが、当たり前ですが、我々が目指すべきところだと思っています。今いろいろな指標が出ていますが、日本人レベルで世界中の皆さんが暮らすと地球3個弱ぐらいの資源が要るのではないかというデータが出ています。今、天然資源はもちろん持続可能ではありません。そうならないためには、天然資源の投下量を減らし、減らす分、我々が今社会の中ですでに持っている資源をいかに循環させるか、そのセットだと思います。結果的に廃棄が減るということだと思いますので、その仕組みをどう作っていくかが非常に大きな目指すべき方向だと思っています。そのために我々は何をしているかということ、先ほど説明しましたとおり、その資源循環の仕組みをどう作るかというところのインフラを一手に担いたいということで、回収から再流通までを事業にしていますし、そこを可視化するというのもやっています。今はどちらかということその回収の入口側に立っている会社に近いかもかもしれませんが、いかにここからモノづくり側にフィードバックするか、まさに動静脈連携という言葉にもなるかもしれません。結



構難しいですが、これがとても大事です。例えば我々もリユースを事業として再販売していますが、このリユース業界は皆さんが使い終わったものを集めて、まだ使えるということで中古市場に流すわけですが、この中古市場と、元々バージン材でモノを作ってきた業界は違います。しかし、これから少しずつ中古市場もモノづくり側やブランドが担っていくという動きが今出てきていると思っています。これは一つのモノづくり側の転換点です。新品だけを売るわけではないという動きです。そこにブランドなどが自分たちで売れるものを戻していくというのが、例えば一つの我々の今後の事業のあり方かもしれません。もちろんリサイクル材として、素材として、原料として戻していくということもあるので、この辺りをどうすれば加速できるのかは、とても大きなテーマと思っています。



○崎田 ありがとうございます。今伺っていて、地球1個分の資源で暮らせるようにという中で、静脈と動脈をつなぐもの作り側にフィードバックするということに、モノとして、再生資源としてモノづくり側にフィードバックするのと、もう1回メーカー、ブランド側にフィードバックしてそのままリユースするとか、いろいろなタイプのことが複合的にぐるぐる回る社会になっていって、静脈だから、動脈だからということを超えるという感じがしました。

田崎さん、そういうことをイメージする、どうしたらそこに行くのかと考えるのが御専門だと思いますが、どのような形になっていったらいいのか、大事なポイントをお話しいただけるとありがたいのですが。

○田崎 ライフスタイル側、消費側の話と生産側の話、両方あると思いますが、ライフスタイルのことで言えば、まさしく地球1個分の暮らし、英語ではOne Planet Livingと言いますが、そこに行き着くと思いますが、個々の生活者がモノを選ぶときにそれが分かるようにしないといけない。全体では地球3個分近い生活をしている。また、そうと分かったうえで、どこから取り組めばいいのかという答えを出していく必要があります。それから、海外で起こっているようなグローバルなもう何十年も取り戻せないような環境破壊の情報をきちんと伝えることが大切と思っています。生活を変えるには選択肢がないといけない。それを提供するのが生産者側の取組だと思います。そのためには生活者と企業の方々のコミュニケーションが必要で、まさしく埼玉県のプラットフォームは、そういった所にも活用できる場だと思っています。そのときに一つ、マインドとして重視したいことは、多くの発明は何度も失敗があった上で成り立っているので、チャレンジだと思っていただいて、切り替えてまた次のチャレンジをする、そういったマインドセットを持ってサーキュラーエコノミーを作ることを目指していくことが大切ではないかと思います。



○崎田 チャレンジ精神を持って取り組んでいくという大事なお話、ありがとうございます。考えてみると、皆さんが目指しておられるのは、静脈と動脈がきちんとつながってしっかり資源が回ることを大事にする事業者さんであり、あるいは市民のライフスタイルの転換も考えてリユースによってモノを回していくことで、自然にモノづくりや、販売やブランドも変わってくるということですね。動脈と静脈の連携であったり、ライフスタイルの転換であったり、いろいろな視点がこの分野にあると思います。企業の話だけではなく、市民の私たちの暮らしも全部関わってくるような、そういう全体で考えていくところが大事と思って伺いました。そこに田崎さんから大事なキーワードがありました、何が正解か決まっていないのだからチャレンジ精神でどんどんやろうよと肩を押していただきましたが、それで皆さんに次に伺いたいのは、実際に取り組むと、今までの慣習上できないこととか、コスト的に無理なこととか、山のようにいろいろなことがあると思います。ですから、夢を持っているが、現実に取り組むところが課題だ、だから大事なところはここなんだ、という辺りを率直にお話いただくのがこういう場では一番重要と思っています。そこで、坂野さんをお願いしたいのですが、理想を持ってやっておられると思いますが、どのように今、社会に提案をしたいかをお話しいただければと思います。

○坂野 多分皆さんいろいろあると思いますが、例えば分かりやすいのは、静脈産業の前提にさまざまな法規制があることです。我々としては市民の皆さんの動線上に回収拠点を増やして、まだ使えるものを集めて

いきたいのですが、そういう回収拠点を一つ作るというときに、これは廃棄物を集めているのか、あるいは有価物でいいのか、洋服であれば専ら物でいいのかというような話からスタートします。これは自治体それぞれで解釈が違います。元々は「廃掃法」に基づいてそれぞれの地域の産業を守るために行われていて、非常に重要なことだと思いますが、仮にサーキュラーエコノミーという観点で事業を拡大していこうと考えると大きなハードルになります。この辺りはまだまだ自治体単位の自治権の範囲なので統一的に何か見解が出ているわけではありません。堅い話になりましたが、結構クリティカルです。

もう1つは、これ非常に難しいのですが、企業側が何かをし始めると生活者の意識がついてこないと言い、生活者は企業がそういうきちんと選べるものを売らないのが悪いというというような指の差し合いのようなことは常に起こります。ただ先ほど最後にお見せした意識変容は、我々もユーザーの皆さんにとっても一つ希望だと思っていて、通常、環境問題の話は、皆さんの意識が変わってその後行動が変わるとよく言われますが、逆のほうがいいのではないかと個人的には思っています。行動変容があって、その結果少しずつ気になり始めて意識が変わるというもある。そのまさに行動変容をどう作るかというところは、我々がビジネスでそういう仕組みを作ることもそうですし、行政がその仕組み作りという観点からサポートすることも非常に重要だと思っています。

例えば、先ほどのアンケート結果を少しだけ解説すると、大体40代から60代の女性を中心に洋服を持ってきていただいていたのがアンケート結果でした。その皆さんに、環境省のサステナブルファッションの調査と同じように、何枚の洋服を捨てていますかとか、何枚タンスに眠らせていますかとかいろいろ聞いています。その中で洋服を買うときどうしていますか、どうやって手に入れてありますか聞くと、皆さん新品しか買わないと答えます。それはサイズが合わないとか中古品には少し抵抗があるということですが、一方でボックスに持ってくるのは環境にいいこともしたいという意識があるからで、意識が変わりましたか、価値観が変わりましたかと最後に聞くと、無駄なものを買わないようになったとか、買う前に少し考えるようになったという回答をたくさんいただきました。これはまさに大きな変化だと思います。普通は新しいいいものを、トレンドも含めて買おうという意識があるような皆さんが、こういうことやり始めていろいろ考えるきっかけがあると、行動変容の結果として意識に響いてくることが見えた一つの事例と思っています。まさにこういう仕掛けを我々がどれだけ作っていけるかというのはとても大事な観点だと思っています。

○**崎田** 行動変容として、自然に変わっていくような仕掛けをどれだけ作っていけるかということですが、先ほどの発表でのあのきれいなブルーのボックスが一つの大きな仕掛けと思いますが、今それ以外にも考えておられるという理解でよいでしょうか。それともあれを広げようとされているのでしょうか。

○**坂野** あれもまさに一つで、生活動線上に選択肢が増えることが重要だと思いますし、先ほど御紹介をした、ごみとして捨てるのではなくてリユース品であるという意識を持つきっかけを作るというのも一つだと思います。上勝町で行っていたこともある種近いと思っていて、先ほど43分別の話をしました。これもある種ルールとして、町に住んでいる人は、事業者であれ、みんな細かく分別をすることになっていて、大変と言えばそれまでですが、ただそれをやり始めると、皆さん、なるほどこのプラスチックとこのプラスチックでは違うのか、同じびんでも色ごと分けると買ってもらえる値段が違うのかとか、紙も11種類ぐらいに分けているが、もので値段が違うのかということが分かり始めると、なるほどとまず頭で納得するわけです。とはいえ、面倒くさいとかいろんな感情がついてくるのですが、分別していてなるほどという納得感とプラスして少しいいことをしているとか、それがきちんと町に還元されていることが見えるといいと思います。単に環境意識を何とか上げようとしてもなかなか通じないのですが、他の関心のあることにひも付けると、意外と浸透して行動もついてくると思います。そのような取組をしていきたいと思っています。

○**崎田** ありがとうございます。サーキュラーエコノミーの中で消費者の役割とか市民の役割は普段あまり表に出てきませんが、そこはつなぐ役割として大変大事だと思いました。リユース品として持ってきてもらうようにするというのは意識変容にはとても重要だと感じます。木下さんと西村さんにお伺いします。埼玉県のサーキュラーエコノミー推進センターなどで連携しておられますが、サーキュラーエコノミーと言っても、現実にはまだまだ課題が多いと思いますので、まず木下さんから、課題をどのように克服しようとしているかについてお話しいただけますか。

○**木下** 課題としては、私どもの仕事は不要になったものを回収して、そこからリサイクル、再利用するために最初に手を付ける部分を私どもが担っています。その立場で考えると、一番重要になるのが企業や一般消費者への啓発活動です。リサイクルだよ、ごみではないよ、という。先ほど、東武鉄道社とキリンビバレッジ社とごみ箱を撤去してPETボトルのリサイクルを行ったという話をしましたが、これはごみ箱ではありません、リサイクルボックスですと目立つように掲示しても、やはりごみが投入されてしまいます。異物が

少しでも入ってしまうと、例えば飲み残しが一本でも入っていると、運んでいる最中にこぼれてきれいなボトルもすべて汚れてしまう。そうすると、高付加価値の製品にするためのマテリアルとしては、洗浄・乾燥など、どうしても手間とコストもかかります。そのため、そこをどのようにクリアするかが課題と感じています。

もう一つが、先ほどから出ていますが、集められてきたリサイクル資源をどんどん商品化して循環させていくことも非常に重要になってきていますので、商品化率をどう上げていくかです。先ほどの話にもあったとおり、新品が欲しいとか、(食品用容器について) いろいろと抵抗感もあると思うので、そういったところをしっかりと押さえて取り組むなど、作る側も上手く考えていけば、何か面白いことができると思っています。

少し脱線しますが、私が持っているこのカバンは、実は車の廃タイヤ、チューブを使っています。それからこちらはヨットとかで使われる帆布です。その廃タイヤを使って商品を作っている会社とこの帆布の会社が共同で作っている合作とも聞いていますが、非常にデザインも良くて丈夫です。先ほどそれを控え室で話したら自慢ですかと言われました、全くそのとおりで、ストーリー消費でございますと、これは先ほど細田先生に教えていただいた用語ですが、これをネタに使いたくて席からカバンごと持ってきてしまいました。価格もそれなりにしますが、すてきだし、自分の好きなアウトドア系、海釣りなど、そのようなことを考えると、「いいでしょう」と思わず見せたくくなります。こうしたことが消費者の購買意欲につながっていくので、どのように商品を魅力的なものに変えていくか、付加価値を付けていくか、こうしたことも消費者心理も考え、製造する側も一緒に考えたら意外と面白いものができるのではないかと思います。このカバンもこの後どうするのかと課題はまだまだ残りますが、そこは技術的などあるもので、まずは延命化する、長く使っていくことが資源の消費に少しでもブレーキをかける結果になると思っています。



○崎田 ありがとうございます。本当にすてきなカバンです。今のようにストーリーを生むような新しいモノづくりなどはいろんな企業の皆さんの出会いから生まれてくることが多いのですが、そういう出会いを生むためのお仕事をする場合の課題を共有できたら、納得される方も大勢おられると思います。西村さんに伺いたいのですが、そのような課題についてどのように考えておられるでしょうか。



○西村 私たち大日本印刷はいろいろな事業に取り組んでいますが、ほとんどが加工という工程になります。素材などを仕入れて、それに印刷などの付加価値をつけて次のプロセスに渡すと、次のプロセスは比較的ブランドオーナーと呼ばれるような企業が多いので、素材メーカーとブランドオーナーの中間に立って両方の意見や思考をつかみやすい立ち位置に感じています。リサイクル、資源循環を進めるに当たっては、アウトプットを広げて使ってもらうことが大事だと思います。そこに対して私たちが、例えば、そのブラン

ドオーナーの企業に働きかけていくこともありますし、逆にそれを素材メーカーにフィードバックして、より高く売れるような素材を作っていくことができると思っています。

そういう気付きを得た一つのきっかけが埼玉県でプラットフォームで行った実証実験で、プラットフォームに参画している企業7社がプラスチックのリサイクル、資源循環を行って、それにトレーサビリティをつけて情報を見える化したものでした。実証実験は、ケーヨーデイツーの駐車場を借りて回収をし、木下フレンド・JF 原料で中間処理を行い、エコマックスで再生ペレット化、ロータリーで再生品のボールペンを作りました。そして JEMS のシステムでトレーサビリティを捕捉し、当社が全体の企画、マネジメントと見える化を担当しました。11月から2月の約3カ月間が実験期間でしたが、その4カ月前ぐらいから7社で毎週オンラインによるミーティングを行いました。まだコロナ禍でしたので…。サプライチェーン全員が一つの場で一つの目的に向かって進んでいくことで新鮮な気付きがありました。

例えば、先ほどお話に出たかと思いますが、再生品を作る段階では、いろいろな付加価値がつけられて高く売れる製品を作ることができるのでなるべく白い再生プラがいいなと思っています。回収のところで全部混ぜてしまうと黒っぽい色になってしまっていて、そうすると着色して黒いペレットになり、黒色の製品しか作

れなくなります。いつもの流れだと1個前のサプライチェーンの方としか話ができないのですが、そのときは7社で話しているの、それでは今度集め方を変えてみようというアイデアが出たりして、そういったところは資源循環を進めていく上で、ベタな所ですが、大事だと気付いたことです。

○**崎田** ありがとうございます。プラットフォームがあつていろいろな業界の人がつながるということが大事ということでしたが、どうやってつながるのかと思っていましたら、今のお話で明確に出てきたのは、一つのモノづくりで七つの企業が集まって話をしているということです。いつもは話さない、自分たちの二つぐらい前の段階の企業等ともコミュニケーションができ、回収するときから分別を徹底すれば、実は多様なプラスチック製品ができることが分かり、分別の工夫を話し合ったということでした。すばらしいですね。そういうネットワークを作ることはすごい事と思いながら伺っていました。

○**西村** そうですね。埼玉県のパラフォームに入って、資源循環を進めるときに、ハードルになるのが仲間作り、スキームを組む仲間を集めるところと法令遵守というところかと思いますが、そういったところを御支援いただいたことで大変な最初の一步を乗り越えられました。そこからは7社で話をしながら進めていきました。回収はケーヨーデイツーの駐車場で3日間行いましたが、事前に告知をしておいて所沢市民の皆さまから製品プラスチックを持ってきていただきました。リサイクルしやすいプラスチックを限定して集めたのですが、回収の場にJF原料の方がおられて、このプラスチックは水に浮かぶ、とか火であぶるとこうなる、など、プラスチックについて説明していただき、学習の場になりました。これを小中学生などに伝えたらとても有意義な情報になると木下フレンドの皆さまともお話ししました。

○**崎田** 循環型地域づくりや地域循環共生圏ということが環境省の政策検討でよく出てきますが、具体的にどういうものかについてあまりピンとこない部分もあるかもしれませんが、今のお話を伺うと、本当に一つの素材を軸に全てのステークホルダーが集まってより良くすることができてくる、それこそが地域の輪作りだと思います。

○**西村** 見える化のホームページを作ったときに、リサイクルのプロセスを分かりやすく説明しました。自分たちはずっとリサイクルを見ていたので、例えばペレットという言葉も、プラスチックの粒のことなのですが、その言葉を自然に使ってしまっていて、これは普通の生活者の方が見ても分からないのではないかという話もありました。プロセスの中で各社の簡単な紹介と、どんな作業をしているかを写真2〜3枚で紹介しました。自分の気付きに、中間処理によってそこから先が決まってしまうということがあり、そういうことを地域の方も知ることによって、自分たちが出したものがこういったプロセスを通じてまた製品となって戻ってくることを感じていただけたらと思います。今後いろいろな取組でチャレンジしていきたいと思っています。

○**崎田** ありがとうございます。田崎さん、色々な場面で地域の中に情報が伝わっていくと、そこには課題もたくさんありますが、みんながつながることで課題を解決していき、課題が課題ではなくて、次へのチャレンジの糸口につながるという感じもします。私たちはそういう課題にどのようにチャレンジしていけばよいか、一言いただけますか。

○**田崎** まず、つながるというところで、ある一つのものとかの流れをつなぐという話はもう西村さんが話されましたが、それを少し超えていくことが今必要になってきていると思っています。どういうことかという、例えば、これまで廃棄物の処理、家庭から出るごみは自治体が処理をする、きちんと集める、その中で資源化をするということですが、



サーキュラーエコノミーを考えると、自治体が集める前にリサイクルする、リユースするモノがどんどん増えます。そうすると、そういった取組と、人口減少の中でごみ処理施設の稼働率が低下して余ってることが同時に起こる。どうしても処理施設にモノを持ってきたくなり、競い合ってしまうことが起こってしまう。このようなことが起こらないようにしっかりと事前に話し合っ、計画的に、あと10年ぐらいはこれで行こうという大きな方向性が必要になります。だから、焼却施設、資源化施設はこれぐらいのキャパシティにダウンスケールしようということをしっかりと考えていかなければなりません。今年の3月に環境省から広域化施設集約の通知が出て、これは3回目の通知ですが、私も千葉県とか幾つかの県から相談を受けているところです。新しい資源化を進めつつ、サーキュラーエコノミーを進めつつ、従来の廃棄物処理を守るという、そのコミュニケーションは本当に大切になっていて、今それをうっかり間違えると10年、20年禍根を残すようなことが起こると思っています。

○崎田 その10年、20年禍根を残すというのはどういうことですか。

○田崎 基本的には1回建てた施設は、焼却施設だと25年使うのが普通なので、その間は分別しようというモチベーションが働かない地域が出てくるということです。

○崎田 今のお話は、少子高齢化とか人口減少などの課題が一つの地域で出てきていると、そういう中で、資源を顔の見える関係でしっかり使っていこう、サーキュラーエコノミーしていこうというのはとてもいいことですが、廃棄物処理体制の整備とバランスを取らなければいけないという意味でしょうか。

○田崎 はい。

○崎田 ありがとうございます。非常に大事な所に立ち至ってきましたが、本当に資源をしっかりと使っていく場合、これからの適正処理という廃棄物行政、最終的な清掃工場などの施設整備との調整が必要になってくるので、民間企業の動きなど様々なことを考えながら全体的に長期的に検討をしていく必要がある。それはどこがコーディネートするののかという話ですね。国でしょうか、県でしょうか、市町村でしょうか。

○田崎 今は都道府県が大事だと思っています。実際に広域化施設集約の話は、都道府県がリードして傘下の市町村と議論しますが、循環、資源化のところは大野知事のお話にもありましたように、市町村だけで閉じない部分が出てくるので、どうしても県のリード、調整が必要になると思います。したがって、民間業者と都道府県とのやり取りは非常に大切だと思っています。

○崎田 ありがとうございます。県が広域に様子を見ながら、それぞれの地域で取り組んでいることが長い目線で見たらどうなるか、市町村の動きをコーディネートできるといいという理解でよろしいでしょうか。今日は壇上には行政関係の方がおられないので、ここで県の方がおられるとお話を伺うのですが、まず壇上の皆さんで、行政のそういうコーディネートに関して何か期待など、御発言がある方いますか。坂野さん。

○坂野 皆さんも、すでに話された部分もありますが、今、田崎先生が話されたとおり、広域で取り組まないと、特に埼玉はまだ基礎自治体も大きいと思いますが、地方に行けば行くほど、人口減少に伴い、すでに広域になっている自治体もたくさんあり、これからはそうせざるを得ないと思います。単独では、建て替えの時期が来ているがなかなか合意を取っていくのは難しいとか、それは焼却炉に限らず、資源循環を進めていくのであれば、民間も含めて広域でこそ、事業性を担保しうるに必要な量の資源を集めるといったことも可能になるとか、やはり広域の議論は必須だと思っています。この辺りは都道府県ないしは隣県もまたぐというところも含めて、コーディネートが非常に重要だと思っています。それが先ほど申し上げた法規制ばかり、サーキュラーエコノミーの事業がより広く展開していくときには、やはり県単位とかである程度方針を示していただくとだいぶバックアップとしては大きいと常々感じています。埼玉県さんに我々も大変お世話になっていますが、これがいい事例として広がるといいと思います。さらに、次の先進的なことも埼玉から進めていただきたいと勝手ながら思っております。

○崎田 ありがとうございます。今伺いながら、サーキュラーエコノミーのネットワーク作りも広域でという視点が非常に重要になりますが、そうすると適正処理も市町村だけに委ねるのではなくて、コーディネーターとして広域自治体が考えることで施設整備のサイズとか内容も見えてくる。そういうようなことが今日は最後に見えてきたという感じです。坂野さんもう一言ありそうですが。

○坂野 すみません。これから広域で作るといいうところもちろん大事ですし、既存の施設にいかに関りが乗っていくかというコーディネートもあると思います。なかなかその辺りも基礎自治体同士での調整ももちろんありますが、それだけだと進まないこともあるので、そこに民間のプレイヤーがうまく連携するという話もあると思います。いろんなパターンを考えたいと思います。

○崎田 ありがとうございます。先ほどから最前列で環境省の循環室長の近藤さんが全部聞いておられます。県のコーディネート力が重要ということで、今日は最初から埼玉県が頑張っていますというお話を大野知事からも伺いましたが、そういう動きを環境省がどのように応援してくださるか、突然なので一言で結構ですが、お願いします。

○近藤 すみません。こっそり隠れていたわけではないのですが、環境省で循環型社会推進室長をしております近藤と申します。私は埼玉県出身で今日故郷に錦を飾れたかなと感じており感謝しております。御指名ありがとうございます。今いろいろお話いただきましたが、国としても、地域でいろんな方々をつないでいく点については、都道府県、市町村に期待をしているところですが、基本的に自治体の方々が関わることでその取組に安



心感が出てくる。また継続性が出てくるというところがあると思います。そして、地域のいろんな方々がこの取組に参加することが非常に重要で、そういう意味では来年度事業で我々も地域で中核的に資源循環をつないでいくような人材育成をしていきたいと思っています。現在、気候変動対策で脱炭素化の地域作りが各地域でだいぶ形になってきたと思っておりますが、これを次は資源循環の分野で広げていきます。資源循環は気候変動対策にも大きく貢献する可能性があり、地域には地方環境事務所がありますので、連携して、ブロック単位で支援していくような仕組みを作りたいと思っています。ただ、ベースとなるのは市町村であり、その地域の市町村のことをよく知っているのは各都道府県なので、埼玉県をはじめ、都道府県の方々とも協力をしながら、各地域の特徴的な未利用資源をうまく使っていけるような仕組みを国としても支援していきます。また、国のルールもこれに沿った形で変えていかなければいけません、今のルールがあるのは理由がありますので、その背景を理解しつつ、まずは、その地域の方々の取組、意識や行動を変え、ルールをそれに合わせていきたいと思っています。決して変えるつもりがないわけではなく、変えるための準備をしっかりとサポートしてから最終的に形を変えていきたいと考えています。

○**崎田** ありがとうございます。そろそろまとめに入りたいと思いますがよろしいでしょうか。もうひとかた、細田会長、今日のパネルは会長の基調講演での、新しい共創の時代、共に創る時代という言葉からスタートしました。それでモノからコトへみんながストーリーを作っていくような、そういうつながりを作るという意味で、今日はそれを今一生懸命実践されている方々から、事業者としての実践だけでなく、事業者としてリユースを広めているが地域社会の意識変容が重要というお話も共有できました。また、田崎さんの御指摘もあり、自治体が広域でしっかりとコーディネートしていく大切さも見えてきました。最初にきっかけとしてお話いただきましたので、細田会長、今日の最後になりますが、何か一言いただければありがたいと思います。

○**細田** 四人の方のトークを聞かせていただいて再認識したことが三つあります。一つは、基本的に人々がつながらないと、あるいはつなぎの輪を広げないと、サーキュラーエコノミーを作るのは難しいということです。一人でいくら頑張ってもそこには限界があります。大日本印刷さんがどうしてうまくいったかという、埼玉県を通してつながりができたからです。坂野さんは自分の会社で共創しながらプラットフォームを作っていくという大変な仕事をされて、つなぎの場が広がっていくと大きな力になったということです。それから二番目は、そのつなぎの中の重要なものは情報であるということ。何がどう起こって、どうなるのかということでは、私たち知らないこといっぱいあります。知ることは大切です。三点目ですが、行動変容、意識変容が必要だということです。かつて古紙のリサイクルが始まったときに、昔私たちが使っていたコピー用紙は白色度 100%だった。真っ白でなければ嫌だという人が多かったが、今は古紙混入率が大体 70%で白色度 70%です。我々はその許容度があれば進むわけです。



ところが一方、面白いのは、プラスチック容器を使っている某大手洗剤メーカーさんに、洗剤のプラスチック容器を回収しているスキームがあるので、その洗剤の容器を使えばよいではないですかと言ったら、洗剤の容器は大体 5年間劣化しないことを前提にしているというのです。洗剤を 5年間も使わないというのはいり得ない。すぐ使ってしまいますね。ところが日本人はそういうところは、非常に細かい。5年以上にしないということで消費者からクレームがつくとすると、生産者は怖くてできない。その辺は、このプラスチックは再生品を使っていますから、なるべく 1年以内で使ってくださいと情報を伝えてもらえばよいのではないかと思う。

それから、プラスチックトレイで白色トレイはマテリアルリサイクルが可能ですが、スーパーで私もよく買う刺身の入っているプリントされているトレイはリサイクルしにくい。それで、ある会合で、それをやめればいいのかと言ったら、先生変なこと言わないでください、そんなことをした瞬間に消費者は買わなくなります、と一言です。それでリサイクルも止まるわけです。それは私たちが知らないことで、知っても難しいかもしれないけれど、まず情報共有してつながって、啓発をして少し行動を変えようということで、いろんなことが変わっていくということを皆さんすでに実践されているということに気が付きました。

それから、リユースもそうですが、例えば、家電製品とかで、怪我したらどうするの、責任は誰なのと言われた瞬間に止まってしまいます。これは重要な話ですが、その辺は環境省があるので、リユース品の安全性の

ガイドラインを作らないと坂野さんも苦勞する可能性があるかもしれません。その辺は知恵と知識と情報の共有をして進めると、もっともっと広がる可能性があるということが分かって、私はとてもうれしく思っています。どうもありがとうございました。

○**崎田** ありがとうございます。まずはつながるということ、そして二番目に情報というお話でした。その情報の話も、例えば事業者の中で情報をつなぐ話もあると思いますが、消費者に対してその製品情報をしっかりと伝えていくことも重要だと思います。今、サーキュラーエコノミーの実現に向けて変わる時代、あるいは変わろうとする時代を私たちが一緒にどうやって作るのかということが問われています。そのときに先ほど田崎さんが話された、みんなでチャレンジしてみんなで怖がらずに一步進んでみる、それが大事と感じます。ぜひ皆さんなりに取り組んでいただきたいと思います。今日、埼玉県がコーディネーターとして、つなぎ役として意識高く取り組んでいるということから、話がスタートしました。そのときにコーディネーター役が県であったり周辺自治体であったり、いろいろな企業の中でも西村さんのようにそれを業務としてされている方もいます。さまざまな取り組み方があり、実際に県が取り組むときも、大野知事のお話の最初の方にありましたが、実はコーディネート役をするときに、環境部署と産業部署と一緒に取り組めるように人事の交流から始めて、事業者のネットワーク作りができるようにスタートしたというお話があり、大事なポイントはいろいろあると感じました。ぜひ皆さんとともに、実はここが大事というキーになる場所を共有しながら、それぞれの分野でしっかりと新しい社会と一緒に作っていかれたらと思っています。ぜひこれからも一緒に盛り上げていくために情報発信していかなければいけないという感じがしますし、それを知った上で、最後に残る廃棄物量の予測や適正処理体制の整備はどうするのかというところまで自治体の方々はしっかりと情報が共有できるようにしていくなど、事業者、消費者・市民、自治体など全体の信頼関係作り、連携関係作りが大事ではないか、私は今日そんなことを感じました。それぞれの皆さんもいろんな立場で感じられたことがあると思います。ぜひ明日の一步につなげていただければありがたいと思います。

皆さん、壇上の皆さんに大きな拍手をいただければと思います。どうもありがとうございました。



(5) 閉会挨拶

梶原成元氏（3R・資源循環推進フォーラム副会長）

本日は、長時間にわたりお付き合いいただきありがとうございます。県内だけではなく、関東、そして全国から参加いただき、御礼の言葉もありません。そして本日、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰と3R促進ポスターコンクールの最優秀賞を受賞された皆様、おめでとうございます。毎年この大会を開催しておりますが、受賞者の皆様の活動を知り、毎回新しい気づきになっております。

今回は第18回3R推進全国大会 in 埼玉ということですが、実は大野知事がこの分野にご熱心で、埼玉県の取組や、埼玉県下の企業の方々の取組について、本日もいろいろとご説明をいただきました。また、この後にも交流会というかたちで学んだり意見交換を行ったりする機会をいただいております。埼玉県の皆様方のご協力で、初めて交流会の場ができました。関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。そしてこのプラザノースの会場スタッフの皆様方にも御礼を申し上げます。

3R推進全国大会は今年で18回目になります。3Rだけではなく、資源循環、あるいはサーキュラーエコノミーという言葉に代表される3つの言葉のなかで、今後もいろいろな形のことをやりたいと思っています。今日のテーマは上下流の連携やバリューチェーン全体の関係者の連携という内容でした。上流といわれる方々に対して、もっと下流の言葉を届けるという連携もあるのかなと思っています。聞いておりました。

本日ご参加いただいている皆様方、そして3R、サーキュラーエコノミーに関係する全ての皆様方の益々の発展を祈念しまして、御礼の言葉とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



4. 関連イベント

(1) イグナイトステージ (参加者交流のための特設ステージ) 10月24日(木) 17:15~18:30

第18回3R推進全国大会会場のプラザノース2階多目的ホールに設けられた3R推進展示コーナーに連動し、今大会に参加いただいた皆様の交流の一層の促進を目指し、同会場で「イグナイトステージ」を開催いたしました。

全国大会第2部終了後、同ステージにて、企業、団体の取組を発表いただき、3R推進展示コーナーを訪れた大会参加者に熱意ある発表をご覧いただくとともに、参加者相互の交流、ビジネスマッチングの一助とすることができました。

イグナイトステージ プログラム

(司会) 関根久仁子氏 (環境カウンセラー)

1	17:15~17:25	ステージ開始、御挨拶 サーキュラーエコノミー推進センター埼玉 公益財団法人埼玉県産業振興公社新産業振興部部長 柳沢禎人氏
2	17:25~17:35	東京サーキュラーエコノミー推進センターの概要・主な取組の紹介 公益財団法人東京都環境公社環境共生部 東京サーキュラーエコノミー推進センター普及推進チーム 野末裕子氏
3	17:35~17:45	再生素材を活用したデザインソリューション 株式会社DNPエスピーイノベーション SP新規事業開発本部事業開発部部長 村上浩氏
4	17:45~17:55	排水油脂&油泥から生み出すブラウングリースのアップサイクル 株式会社ティービーエム執行役員事業企画部長 東誠悟氏
5	17:55~18:05	アダプト・プログラム普及推進について 公益社団法人食品容器環境美化協会事務局長 佐藤克彦氏
6	18:05~18:15	生ごみ処理機による持続可能な社会構築 天城屋株式会社代表取締役 石井靖彦氏



イグナイトステージの様子

(2) 3R推進展示コーナー 10月24日(木) 12:00~18:30

●循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー (プラザノース 多目的ルーム)

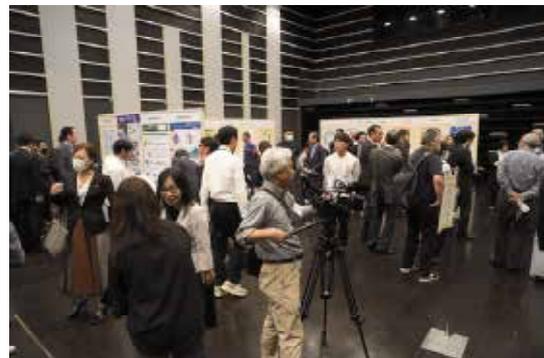
多目的ルームで行った循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナーには39団体が出展しました。開会前には、環境大臣政務官国定勇人氏、埼玉県知事大野元裕氏、埼玉県議会副議長松澤正氏、環境省関東地方環境事務所所長神谷洋一氏らが展示コーナーを訪れ、ブース担当者の説明を熱心に聞いていました。第2部終了後にはイグナイトステージの会場としても使用され、展示コーナーとともに、企業の取組紹介の場、交流の場として、多くの来場者を迎えることができ、大盛況の中、参加者の交流を深めることができました。

【循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー出展者】（順不同）

○環境省 ○埼玉県 ○3R・資源循環推進フォーラム/公益財団法人廃棄物・3R研究財団 ○リデュース・リユース・リサイクル推進協議会 ○NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット ○3R推進団体連絡会 ○ガラスびん3R促進協議会 ○PETボトルリサイクル推進協議会 ○紙製容器包装リサイクル推進協議会 ○プラスチック容器包装リサイクル推進協議会 ○スチール缶リサイクル協会 ○アルミ缶リサイクル協会 ○飲料用紙容器リサイクル協議会 ○段ボールリサイクル協議会 ○公益財団法人埼玉県産業振興公社 ○公益財団法人東京都環境公社 ○ウム・ヴェルト株式会社 ○株式会社木下フレンド ○三郷市 ○大日本印刷株式会社 ○株式会社E COMM I T ○一般社団法人全国容器循環協議会 ○公益社団法人食品容器環境美化協会 ○株式会社パイロットコーポレーション ○アミアズ株式会社/一般社団法人withal ○クリエイトラボ ○天城屋株式会社 ○明治安田生命保険相互会社埼玉本部 ○株式会社ティービーエム ○ケイワート・サイエンス株式会社 ○オリックス資源循環株式会社 ○新和環境株式会社 ○日榮新化株式会社 ○株式会社ショーモン ○東武商事株式会社 ○株式会社吉川油脂 ○久保井塗装株式会社 ○新井資材株式会社



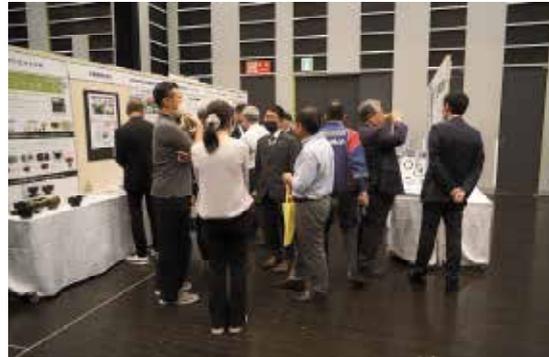
展示コーナーを視察する国定政務官、大野知事ら



会場の様子



主催者をはじめ、自治体、関連団体等多数出展され、大勢の参加者が交流を深めました



●令和6年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞作品展示コーナー（プラザノース ホール前）

最優秀賞に輝いた小中学生の作品4点の原画を大会会場のホール前に展示しました。環境大臣政務官 国定氏ほか主催者、来賓者、大会参加者など多くの方に熱心にご覧いただきました。



ポスターコンクールの展示の様子



受賞作品を鑑賞する国定政務官、大野知事ら

(3) 施設見学会 10月25日(金) 9:00~12:35

本大会の関連イベントとして、大会翌日の10月25日(金)午前中に施設見学会が行われました。9時に熊谷駅を出発し、バス2台で、2グループ(Aコース、Bコース)に分かれて埼玉県寄居町所在の、公共関与による全国初めての総合的「資源循環型モデル施設」である「彩の国資源循環工場」内にある民間リサイクル施設を視察しました。参加者は合わせて45名でした。

A-1 オリックス資源循環株式会社 埼玉県大里郡寄居町西ノ入 3050-23(寄居バイオガスプラント)

⇒ 廃棄物系バイオマスによる国内最大規模の乾式メタン発酵バイオガス発電施設を見学しました。

A-2 ツネイシカムテックス株式会社 埼玉県大里郡寄居町大字三ヶ山 250-1(埼玉工場)

⇒ 焼却灰の焼成処理による無害化と人工砂へのリサイクルを行う施設を見学しました。

B-1 株式会社エコ計画 埼玉県大里郡寄居町三ヶ山 262 (寄居エコスペース)

⇒ 24品目に及ぶ廃棄物を受け入れ、再利用率95%を目指す総合リサイクル施設を見学しました。

B-2 株式会社ウム・ヴェルト・ジャパン 埼玉県大里郡寄居町大字三ヶ山 330-1 (寄居工場)

⇒ 廃蛍光管や県内初の廃太陽光パネル等のリサイクル施設を見学しました。



オリックス資源循環(株)



ツネイシカムテックス(株)



(株)エコ計画



(株)ウム・ヴェルト・ジャパン

5. 資料

(1) 第18回3R推進全国大会開催案内（参加申込書）

「埼玉から未来へ！
セキュラーエコノミーで育む地域の力！」

10月は3R推進月間です。

埼玉県環境整備センター
(青森町)

令和6年
10/24(木)
13:00開演
(受付開始 12:15)

第18回
3R推進全国大会

会場 **さいたま市プラザノース ホール**
埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852番地1

入場無料 定員400名
(事前申込制)

ライブ配信あり！

第1部 13:00 ▶ 14:00 大会式典

第2部 14:00 ▶ 17:00 記念シンポジウム

大会プログラム

特別講演
特別報告
パネルディスカッション

主催 第18回3R推進全国大会実行委員会

お問い合わせ先 実行委員会事務局

表面

第18回3R推進全国大会参加申込書

令和6年10月24日(木) 13:00開演(受付開始12:15)

ホームページ: <https://3r-forum.jp> 申込締切 10月15日(火)

大会会場

さいたま市プラザノース

埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852番地

一電車でお越しの場合

埼玉新都市交通伊奈線・ニューシャトル
緑茂宮駅 から徒歩約8分
和子都宮橋(東北本線)
「土呂駅」西口から徒歩約15分

参加申込欄(FAXフォーム) FAX: 03-5638-7164

申し込みの欄に○のうえ、名前、住所、〒番、自宅用又は携帯電話、TEL、Emailをご記入ください。

全国大会(10/24)へ参加

名前
フリガナ
自宅住所
又は
事業所住所
TEL(市)
E-mail

実施見学会 10月25日(金) 9:00~12:35 定員50名 事前申込制・先着順

お問い合わせ先: 第18回3R推進全国大会実行委員会事務局

裏面

(2) 第18回3R推進全国大会ポスター

「埼玉から未来へ！
サーキュラーエコノミーで育む地域の力」

10月は3R推進月間です。

令和6年
10/24(木) **第18回**
13:00 開演
(受付開始 12:15)

3R推進全国大会

埼玉県環境整備センター
(寄居町)

会場 さいたま市プラザノース ホール
埼玉県さいたま市北区宮原町1丁目852番地1
会場参加・ライブ配信視聴ご希望の方は、ホームページ
(<https://3r-forum.jp>) からお申し込みください。

入場無料 定員400名
(事前申込制)

ライブ配信あり！

循環型社会形成推進功労者表彰
3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

第I部 13:00 ▶ 14:00 大会式典

第II部 14:00 ▶ 17:00 記念シンポジウム
「サーキュラーエコノミーによる地域活性化と質の高い暮らしの実現に向けて」 ～目指すべき循環型社会の将来像～

大会プログラム

基調講演	<p>演題 「サーキュラーエコノミーの達成に向けた各主体の役割」 講演者 3R・資源循環推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授 梶田 衛士氏</p>
特別講演	<p>演題 「(仮)埼玉県が目指すサーキュラーエコノミー」～持続的な発展に向けた環境と経済の両立～ 講演者 埼玉県知事 大野 元裕氏</p>
事例報告	<p>演題 「浦和レッズSDGs サーキュラーエコノミーへの取組」 講演者 浦和レッドダイヤモンド株式会社 コーポレート本部スタジアム運営担当 早川 拓海氏</p>
パネルディスカッション	<p>演題 「地域におけるサーキュラーエコノミーの推進と実践」 ～持続可能な未来への道筋～</p> <p>コーディネーター 3R・資源循環推進フォーラム副会長、ジャーナリスト、環境カウンセラー、全国おいしい食べかり運動ネットワーク協議会会長 崎田 裕子氏</p> <p>パネリスト：大日本印刷株式会社 情報イノベーション事業部 環境ビジネス推進部 部長 西村 知子氏 株式会社木下フレンド 代表取締役社長 木下 公次氏 株式会社ECOMMIT 取締役CSO 坂野 昂氏 国立研究開発法人国立環境研究所 資源循環領域資源循環社会システム研究室 室長 田崎 智宏氏</p>

関連イベント

3R推進展示コーナー・交流会 10/24 (木) 12:00～18:30
さいたま市プラザノース2階 多目的ルーム

- 令和6年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞作品展示コーナー (※この作品はホール前に展示します)
- 循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー

環境省、環境省関東地方環境事務所、埼玉県、埼玉県内の自治体・NPO・企業団体、3R推進団体連絡会(容器包装リサイクル法関連8団体)、リデュース・リユース・リサイクル推進協議会、(NPO)持続可能な社会をつくる元気ネット、3R・資源循環推進フォーラム 他

- イグナイトステージ(参加者交流のための特設ステージ) 17:00～18:30

施設見学会 10/25 (金) 9:00～12:35
埼玉県環境整備センター(寄居町)内の施設

事前申込制 先着順 埼玉県直営の広域埋立最終処分場「埼玉県環境整備センター」内の民間企業の施設を見学します。
※全国大会参加申込者に限ります。

主催 第18回3R推進全国大会実行委員会
(環境省、環境省関東地方環境事務所、埼玉県、3R・資源循環推進フォーラム)

お問い合わせ先 実行委員会事務局 (公財) 廃棄物・3R研究財団内
TEL: 03-6908-7311

- 52 -

(4) 参加者アンケート

全国大会の参加者へ、大会終了後にメールにてアンケートのご協力をお願いし、Web ページから回答をいただきました。

①Web ページ アンケート画面

第18回 3 R 推進全国大会アンケート

HOME > 第18回 3 R 推進全国大会アンケート



「埼玉から未来へ！
サーキュラーエコノミーで育む地域の力」

埼玉県環境学習センター
(寄居町)

令和6年
10/24 (木)
13:00 開演
(受付開始 12:15)

第18回 3 R 推進全国大会

第18回 3 R 推進全国大会にご参加をいただきありがとうございました。
今後に活かすため、アンケートにご協力をお願いいたします。

第18回 3 R 推進全国大会アンケート

1 大会全体について

① 大変満足 ② 満足 ③ 普通 ④ 不満 ⑤ 大変不満

2 特によかったプログラムは何ですか (複数回答可)

① 表彰式

② 基調講演 (3 R・資源循環推進フォーラム会長 堀江 隆士氏)

③ 特別講演 (埼玉県知事 大野元裕氏)

④ 事例報告 (浦和レッドダイヤモンズ株式会社 早川拓海氏)

⑤ パネルディスカッション

⑥ 3 R 促進ポスターコンクール最優秀賞作品の展示

⑦ 循環型社会形成に貢献する先進的な取組の展示

⑧ 交流会・特設ステージ (イグナイトステージ)

3 上記2で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

4 よいと思わなかったプログラムは何ですか (複数回答可)

① 表彰式

② 基調講演 (3 R・資源循環推進フォーラム会長 堀江 隆士氏)

③ 特別講演 (埼玉県知事 大野元裕氏)

④ 事例報告 (浦和レッドダイヤモンズ株式会社 早川拓海氏)

⑤ パネルディスカッション

⑥ 3 R 促進ポスターコンクール最優秀賞作品の展示

⑦ 循環型社会形成に貢献する先進的な取組の展示

⑧ 交流会・特設ステージ (イグナイトステージ)

5 上記4で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

6 大会に参加して、3R・サーキュラーエコノミーに対する意識に変化がありましたか。

- ① 意識に変化があり、行動につなげようと思った。
 ② 意識に変化はなかった。

7 上記6で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかをご記入ください。また、②と回答された方は、3R・サーキュラーエコノミーにつなげるためにはどのように改善したらよいかをご記入ください。

8 今回の大会は会場及びオンラインを活用したハイブリッド形式による開催となりましたが、これについてどうお考えですか。

- ① 会場開催のみにしたほうがよい
 ② オンライン開催のみにしたほうがよい
 ③ ハイブリッド形式による開催がよい

9 上記8で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

10 今回の大会では、環境負荷軽減を考慮し、大会プログラムやステージプログラムはWEBでの配信とし、会場での配布は行いませんでしたが、そのことについてどうお考えですか。

- ① 大変満足 ② 満足 ③ 普通 ④ 不満 ⑤ 大変不満

11 3R推進全国大会について何でお知りになりましたか。（複数回答可）

- ① 案内状が送られてきた
 ② ホームページ・メールマガジンを見て（具体的に）
 ③ 新聞・雑誌（具体的に）
 ④ 県等からの情報提供
 ⑤ その他（具体的に）

12 大会運営について

- ① 大変満足 ② 満足 ③ 普通 ④ 不満 ⑤ 大変不満

13（施設見学参加者のみ）参加された見学コースはどのコースですか

- ① Aコース ② Bコース

14（施設見学参加者のみ）施設見学はいかがでしたか

- ① 大変満足 ② 満足 ③ 普通 ④ 不満 ⑤ 大変不満

15 上記14で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

16 あなたについてお尋ねします。

- ① 都道府県職員
- ② 市町村職員・一部事務組合職員
- ③ 国家公務員
- ④ NPO・市民団体
- ⑤ 廃棄物・リサイクル事業者等
- ⑥ ⑤以外の企業・団体
- ⑦ 大学、研究者、コンサルタント等
- ⑧ 報道関係者
- ⑨ その他（具体的に）

17 ご意見・ご要望等があれば自由にお書きください。

確認 >

お問い合わせ

第18回3R推進全国大会実行委員会事務局（（公財）廃棄物・3R研究財団内）

〒130-0026 東京都墨田区両国3-25-5 JEI両国ビル8階

TEL 03-6908-7311/FAX 03-5638-7164

Email: jimukyoku@3r-forum.jp

②アンケート依頼文

「第18回3R推進全国大会」アンケートご協力をお願い



3R・資源循環推進フォーラム事務局 <jimukyoku@3r-forum.jp>
宛先: jimukyoku@3r-forum.jp

（3R推進全国大会へ参加登録いただきました皆様にお送りしております）

この度は、「第18回3R推進全国大会」にご参加をいただきありがとうございました。
今後に活かすため、アンケートを作成しました。
お忙しいところ恐縮ではございますが、アンケートにご協力をお願いいたします。
25日開催の施設見学会にご参加の皆様は、施設見学後にご回答をお願いします。
どうぞよろしくお願いいたします。

【第18回3R推進全国大会アンケートフォーム】

<https://www.jwrf.or.jp/3Rsymposium2024-anq.html>

※アンケート回答締切日：11月1日（金）

第18回3R推進全国大会実行委員会事務局（（公財）廃棄物・3R研究財団内）

〒130-0026 東京都墨田区両国3-25-5 JEI両国ビル8階

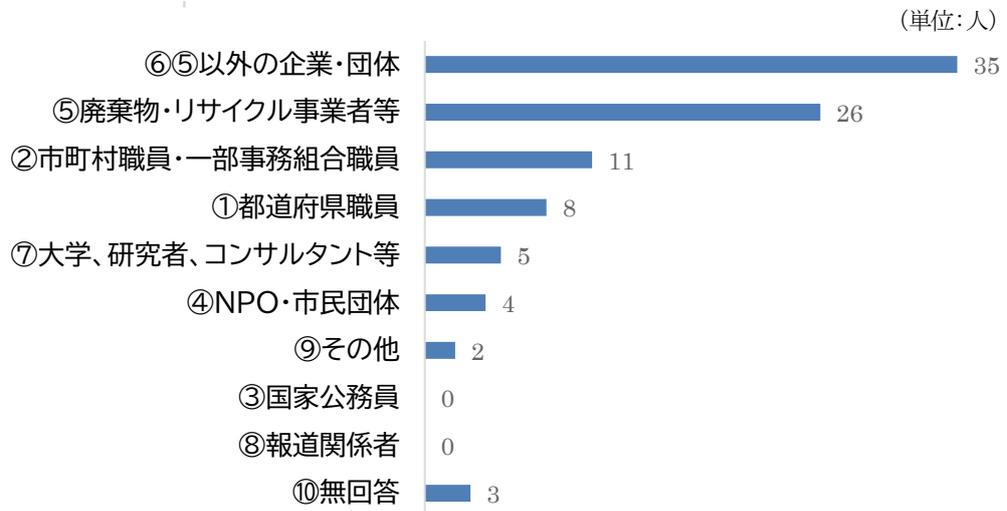
TEL：03-6908-7311 FAX：03-5638-7164

③ アンケート集計結果

回答数は94件でした。

【参加者の属性】

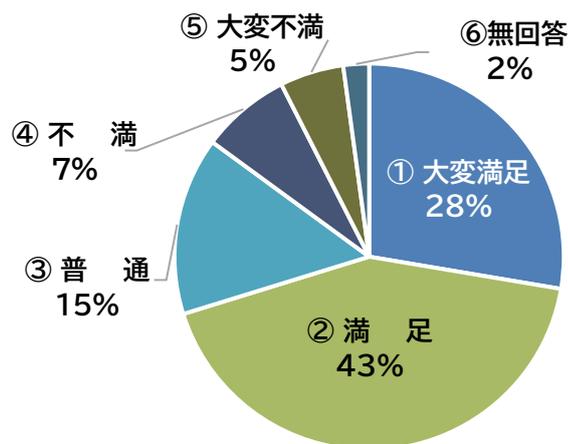
16. あなたについてお尋ねします。



【プログラムの内容について】

1. 大会全体について

- ① 大変満足
- ② 満足
- ③ 普通
- ④ 不満
- ⑤ 大変不満
- ⑥ 無回答



2. 特によかったプログラムは何ですか (複数回答可)



3. 上記2で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

<①と回答された方>

- ・表彰式にて成功事例の共有や、ポスターコンクールでの少年少女が3Rに関心をもって取り組んだイメージが伝わりました。
- ・全国大会という全国各地の人が集まる場で表彰されることで、3Rについて興味をもつきっかけになると思われる。
- ・小学生を巻き込んでの表彰式が良かった。子供目線での低減は参考になった。
- ・表彰式は、事業者及び受賞者にとって晴れの舞台であり、是非続けていただきたいため。
- ・子供たちの意識の高さに驚きと、自分たちも負けてられないなと思いつきさせてくれるモノでした。
- ・未来を担う子供たちへのポジティブな時間であったため。

<②と回答された方>

- ・細田先生のお話は分かりやすく、参考になった。紙おむつリサイクル事業は今後も進めて行こうと自信が持てた。埼玉県では是非、進めたい。埼玉県会員を集めて進めたいと考えました。
- ・国の経済発展とゴミ量は比例しない。今ハピネスは、ものから心の豊かさに移行している傾向が強いことなど勉強になりました。
- ・細田先生のご説明は明快でわかりやすく、リーダーシップのある講演であったため。
- ・サーキュラーエコノミーについて、必要なこと、しなければならないこと、を確認させていただきました。今後役に立たせませう。
- ・競争から共創ということで、皆で知恵を出し合って協力して取り組む必要があることがよくわかったため。
- ・国及び地方自治体の環境政策、目指す方向性が明確に伝わってきたため。
- ・細田先生のご講演から、「付加価値をつけ、ストーリーを如何に伝えていくか」について実感しました。
- ・3R推進全国大会は参加したことが無かったが、細田会長の講演を始め普段とは違う内容を御聞き出来てよかった。
- ・細田先生は難しい問題をわかりやすくおもしろくお話ししてくださったので、その後の話を理解するのにも役立ってありがたかったです。
- ・細田先生の話は資源循環の取り組みの全体感がわかってよかったです。
- ・細田先生のGDPと排出量の関連グラフはとても興味深い考察でした。
- ・モノからコトへの社会変容を、若者のニーズの例、動脈と静脈など、これまで断片的に得た知識を、包括的にわかりやすくかつユニークに解説していただいた。ずっと集中して聞ける内容だった。
- ・行政側の視点からどのような事業を行うべきかばかり考えていたが、消費者側の視点を持ちどのようにサーキュラーエコノミーを実現すれば良いのか考える機会になったため。
- ・興味深く聴講できました。どのように、具体的な活動につなげていくかが課題だと感じました。
- ・細田氏の講演を聴くことで、これからの時代に資源循環の大切さを改めて感じる事ができた。
- ・細田先生は理想と現実をえぐる感じで良かった。

<③と回答された方>

- ・何とか埼玉県で紙おむつリサイクル事業を皆さんと進めたい。強く希望を致します。
- ・特別公演では知事の環境への想いが埼玉を牽引している事がよくわかり、感銘しました。
- ・大野知事の3Rに対する認識や取組は他都道府県を先に行く取組であり、他都道府県に波及する事で国内でのスピードアップが図れると感じました。
- ・産業労働部と環境部を連携させ、サーキュラーエコノミーを発展させる尽力が素晴らしいと思いました。緊急対応のアドリブも素晴らしかったです。
- ・CEに関する世界的な状況、埼玉県の先進的な取り組みを知り、今後の施策に活かせる最新の情報を得ることができたため。
- ・大野知事の県庁の縦割り組織の意識改革について、企業としても勉強になりました。
- ・知事はいつもお話が上手で今回も楽しく聴講させていただきましたが、今日は企業としての参加だったので北与野のサーキュラーエコノミー推進センターについて教えてもらえてたのはありがたいです。近々訪れたいと思います。
- ・大野知事の埼玉愛がとても表れていた。
- ・スクリーントラブル下での知事のお話は日頃からの勉強の賜物であり、他県の知事と違うと学ばせていただきました。
- ・途中でトラブルがあったものの内容が多くの示唆に富み、今後の施策に生かすことができそうなため。また、埼玉県知事の見識の広さと話術に感銘を受けた。

- ・さすが話慣れている感あり。子どもの居場所の時もそうだったが、副知事等代理に任せず、自分が話したい、という意気にしびれ、よく聞きたいという動機となった。サーキュラエコノミー社会の実現のために人事権発動を発動し組織を変える行動、つなぎ役としての実績など、県の意気込み、実績がよくわかり、先進的な県なんだと自県民でありながら初めて気づく点が多かった。
- ・具体的な事例を交えていた
- ・埼玉県知事から直接、サーキュラーエコノミーについて聞いたことが良かったです。
- ・大野知事はとてともに3R・サーキュラーエコノミーに関心があり詳しく、内容（渋沢栄一翁）も面白かった。
- ・特に大野知事の埼玉県の取組みは、県としての本気度が分かる内容でした。知事の熱量も凄かったです。
- ・サーキュラーエコノミーに係る埼玉県の現状と取組について、大野知事から直接、伺いすることができ、とても勉強になりました。
- ・特に大野知事のお話は話の内容というよりも、トラブルの中、アドリブで場をつなぐ機転とお人柄にファンになる人が多く出たと思います。
- ・知事自らサーキュラーエコノミーの取組みをプレゼンされ、その思いの強さや本気度を感じた。ぜひ他の自治体をけん引して行ってほしい。

<④と回答された方>

- ・地元のスポーツチームのCEに関する取組みを知ることができ、今後の施策の参考になると思われたため。
- ・浦和レッズの取組みはスポーツ界では先駆けと思いました。サポーターを通じて循環社会の意識が高まるのではと思いました。
- ・3RからCEに向けた考えかた、事例紹介は大変参考になります。

<⑤と回答された方>

- ・ECOMMTの坂野さんは先進的で興味深かった。
- ・様々な観点から、地域におけるサーキュラーエコノミー実践に対する示唆が得られました。
- ・リサイクル活動推進に伴うコスト・労力負担等のトレードオフ問題の軽減・解決に向けた前向きなヒントを出す姿勢が感じられました。事前の打ち合わせ等による効果もあるかとも思いましたが、テーマの一貫性があり、理解しやすい構成であったと思います。
- ・いろいろな立場、実績あるかたがたの生の声を聞いた。聞きながら、上の方（国や、県、意識の高い企業）の取組は解ってきたが、末端（中小企業、コンシューマなど）がまだまだで、どう行動変容を促せばよいのか？考え込んでしまった。
- ・各企業の取組みや課題としていることがわかり非常に参考になった。
- ・サーキュラーエコノミーに関する実情や、違う視点からの重要点・問題点を聞くことができ、知識や意識を高めることができた。

<⑥と回答された方>

- ・ポスターは、どの作品も素晴らしいものでした。
- ・コンクールの発表の場としてよかった。
- ・ポスターコンクールでは、子供たちが3Rについて考えるきっかけとなりいい取組みだと思った。

<⑦と回答された方>

- ・各社の取組みが分かりやすく掲示されていた。

<⑧と回答された方>

- ・短い時間でも発表の機会をいただける方針が素敵でした。
- ・異業種の方の意見が聴けたこと。

4. よいと思わなかったプログラムは何ですか（複数回答可）

（単位：人）



5. 上記4で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

<①と回答された方>

- ・ポスターコンクールの表彰式は、学ぶものがなく興味がなかったため。部を分けて希望者は参加する形式にしたほうが良い。
- ・コンクールはコンクールだけでの表彰式がいいと思います。表彰式にきた保護者の方にちょっと失礼な態度が見られたので…

<③と回答された方>

- ・スライドにトラブルがあったのは残念でした。

<④と回答された方>

- ・やや冗長に感じた。
- ・ためになる内容が乏しかった。

<⑤と回答された方>

- ・少し冗長に感じた。テーマ1,2点に絞って意見をぶつけ合うような場面もあってもよかったのでは。
- ・少し長く感じたので、グラレコをつかってモニターにうつすなどがあるとうれしい。
- ・一過性の内容（理想・イベント）であり、持続的に経済合理性を鑑みた内容ではない。唯一ペットボトルキャップは今後も現実的且つ持続的で大事であると感じた
- ・パネルディスカッションは、パネラーの活動についてパワーポイントを投影しつつ紹介していたが、その時間が長すぎたと思う。もっとコンパクトにするべきだと思った。また、コーディネーターがパネラーの発言の趣旨を繰り返して確認していたが、それはしなくて良いと思った。もっとパネラー同士の率直な意見交換に時間を使っていた良かった。
- ・問いに対する的確な答えが分かりにくいいため、質問内容が決まっている方が良いと思います。
- ・伝わってくるものがあまり無かったため。
- ・最後一言ずつはそれぞれの登壇者からお話を聞きたかった。

<⑦と回答された方>

- ・会場が狭く、展示コーナーでの各社様の説明が聞き取りにくかった。また自由に身動きが取れなかった。
- ・向かいのブースとの距離が狭く、また奥まった位置にあったので、人が入りきらず諦めてしまった方がいらして、機会損失になっていないかと懸念しています。
- ・もう少し展示する企業数が多いと思っていました。
- ・展示会場への導線が悪く、一般の方の来場がなかった。ポスターコンクール作品の展示も1階の式典会場入り口前に展示していたので、入賞者の方も2階の展示会場に来た方は一組だけだった。展示会場への誘導に、係の方

が立っていたが、持っている案内パネルも小さく目立たない上に、積極的にお声がけを行っていなかった。のぼり旗などを2階の展示場すぐそばの入り口前やエスカレーター前に置くように提案したが、会場のきまりでおけないとの返事だった。このため、有意義な展示がなされており、専門家の方々が控えていたにもかかわらず、一般の方への啓発はできず、展示の意義が感じられなかった。会場のきまりは、事前にわかっていたはずなので、もっと一般の方にも来ていただける工夫が必要だったと思う。非常に残念に感じた。

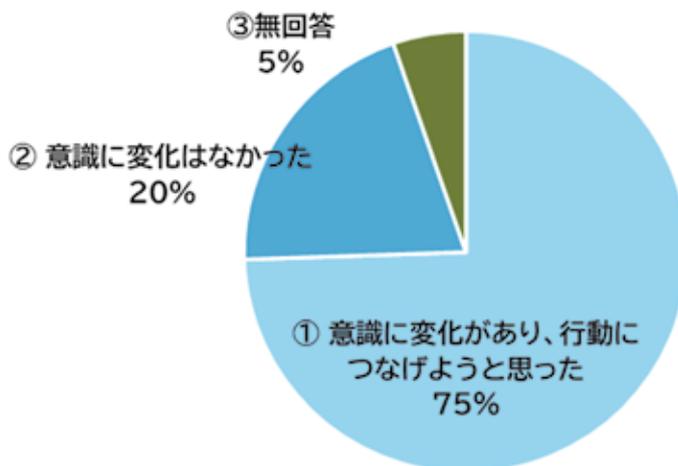
- ・展示会場を政務官の方が視察した際の時間配分が不適切だった。最初の方で時間をかけすぎてしまい、後半の初めて展示に参加した企業などの展示をまったく見ていただけなかった。ご担当の方は、あらかじめ1か所30秒以内など政務官の方にもブースの解説者にたいしても告知して、時間管理を徹底するべきだったと思う。

<⑧と回答された方>

- ・誰が参加しているのか情報がなく、ネットワーキングがしづらかった。
- ・司会者が雑すぎる。
- ・意欲的で素晴らしい内容のご発表でしたが、聴講者が少なくもったいないと感じました。
- ・交流会は、参加してからマッチングの場と認識した。全体に、式典からパネルディスカッションまで非常に長い時間話を聞いて、そのあとに交流会であれば、せめて温かいコーヒーや軽食程度はあっても良かったのではないかな。
- ・交流会・特設ステージの時間が、やや遅いと感じました。時間的な部分以外は問題なしです。
- ・参加者と登壇者の相互交流の機会、参加者同士の交流機会の創出を、最後だけではなくところどころに入れた方がベターかと思います。
- ・取組主体間の意見交換の場がもう少し大きな規模であるとよいのではないかな。

6. 大会に参加して、3R・サーキュラーエコノミーに対する意識に変化がありましたか。

- ①意識に変化があり、行動につなげようと思った。
- ②意識に変化はなかった。
- ③無回答



7. 上記6で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかをご記入ください。また、②と回答された方は、3R・サーキュラーエコノミーにつなげるためにはどのように改善したらよいかをご記入ください。

<①と回答された方>

- ・リサイクル事業は、現場が優先。埼玉県企業が手を組んで、進める事が基本です。当協会も現場優先で進んでいます。
- ・リサイクル事業は利益が無いを利益があるに変える事が、肝です。利益が出る事業を協会は進めています。
- ・諸外国に技術移転する意味において、細田様のご教示のあった日本の施作や事例をこれまで以上にご紹介出来たらと思う。
- ・行動のなかで意識変容をもたらせる可能性があるとのことから、環境的な価値のみでなく、その他の価値をうまく見せながら、行動につなげていく可能性があることを再認識した。
- ・中間処理工場を経営していますが、各方面の方々の理解と協力をもらい引き続き進めて参りたいと思います。
- ・サーキュラーエコノミーは心の豊かさを実現していくという物質的問題以外に注力すべきだとの思いになりました。

- ・産官学の連携深化が重要だと感じました。
- ・色んな人と繋がりを増やして協力してサーキュラーエコノミーに対応しなければと思いました。
- ・自社がもつリサイクルに関する強みを再認識する機会を設け、自社および個人で貢献可能な分野で他社間・個人間でのつながりを生かそうと考えた次第です。
- ・CEの重要性（動脈産業と静脈産業のコラボ）を改めて認識した。
- ・先進的な埼玉県に根差した取り組みもより推進していきたい
- ・意識の高さだけでなく、経済的な視点を導入しないと、持続可能な取組にはならないと感じ
- ・パネルディスカッションの際にも議題にあがっていた通り、3Rおよびサーキュラーエコノミーを推進していくためには国や自治体、リサイクル等の企業が連携していく必要があると感じている。
- ・プラ新法や再生プラ使用量目標設定義務化等のおかげで、3R意識が一般的にも高まってきていると思うので今後の動きや最新情報等を講演などで是非御聞きしていきたいと思う。
- ・情報をさらに収集して仕事に活かす。
- ・まず、なんとなく社内でのペットボトルのふた回収に協力しているがそれらが集まった後のことを調べてみようと思いました。今朝箱をみてみたらワクチンになるようです。小さな気づきで日常の小さいソフトローが意味のあるものになるのを実感しました。
- ・生活していく中でもっと自分に出来ることを見つかった。
- ・家庭や事業所から出るごみ・廃棄物の分別を工夫したいと思います。
- ・講演で詳しい説明がありクリアになった。
- ・社内での啓発の参考になればと思った。
- ・連携、サプライチェーン全体を見た取り組みというのが大事だということを改めて認識しました。
- ・サーキュラーエコノミーは、あまり聞きなれない言葉でしたが実感がわいてきました。
- ・今後は、異業種の方と交流を深めてより良いサービスや活動に繋げていきたい
- ・ECOMMIT 坂野様の「行動が変わってから、気づいたら意識も変わっていたという方法も良いのでは。そういった仕掛けを作っていきたい。」というお話に共感し、自分も、環境意識の高さにかかわらず行動を変えられる社会づくりを目指したいと思った。
- ・廃棄物行政の担当者として、経済活動の視点を持つサーキュラーエコノミーの考え方を取り入れた施策が必要であることを痛感した。
- ・私は、子ども食堂や学習支援を運営している。それはゴールではなく、地域の居場所づくりのパーツだと考えています。目指す居場所を地域課題解決のための仲間を増やしコモンズ化したいと考えており、そこでサーキュラーエコノミーを啓発し、仲間と活動を始めたいと思う契機となった。これからサーキュラーエコノミーを意識していきたい。
- ・さらに活動（実際の取り組みと、取り組みの説明内容）を強化していきたいと思いました。
- ・仲間となる会社や組織を作ることが資源循環にとっては重要となる。
- ・自社のみで考えていたことが、それだけでは厳しいということが理解できてよかったです。また、どの企業様も同じ考え方をもっていて、共通点を見れたことが大変良かったと思います。
- ・原料調達から製品化、販売、使用、廃棄(不用)までの流れの再確認ができた。不用になってから再利用、再商品化への動静脈産業連携に注目し、個人、所属企業でより行動的になり3R実現に向けて行動をすべきと思いました。
- ・企業活動においては経済合理性を伴うサーキュラーエコノミーを、日常の生活においては誰(人間？動植物？地球？)にとっての良いことなのかを考えながら生活していきたいです。
- ・同業他社（木下フレンドさん）のパネルディスカッションを拝見・拝聴したり、県知事の楽しい話などを聞け、弊社としてはまだまだ遅れている会社ではありますが、改めて、同じプラットフォーム上にいると感じ、特に『連携』を大切に、チーム埼玉として弊社の出来るところを少しずつ見つけて実行に活かしていきたいと思いました。
- ・地域内での循環を考えようと思いました。
- ・法律や条例等の整備といった一方向からの促進だけではならず、消費者側の行動変容を促すことの重要性が理解できたため。
- ・サーキュラーエコノミーに寄与するための活動に参画すべく、種々情報収集をしたいと感じました。
- ・埼玉県の取り組みを知らなかったので確認し連携できればと思いました。
- ・“共創”のカタチ・枠組み創りの大切さは何となく理解はしていたものの、従来以上にその点を意識した活動を進めていこうと思いました。
- ・3Rの推進に対し漠然としたものしかなかったが目標を意識して行動しようと思う。
- ・極力捨てるものを減らす為、使える物は捨てないで使用する努力。
- ・サーキュラーエコノミーは県などの地方公共団体が進めていくものであると考えていたが、今回の大会を経て、民間企業やその他協会など様々な人達と一緒に進めていくべきものであると感じた。
- ・より強く3R・CEを意識するようになりました。また、繋がるのが重要なことも各公演を聞くたびに思い、

理解が深まりました。

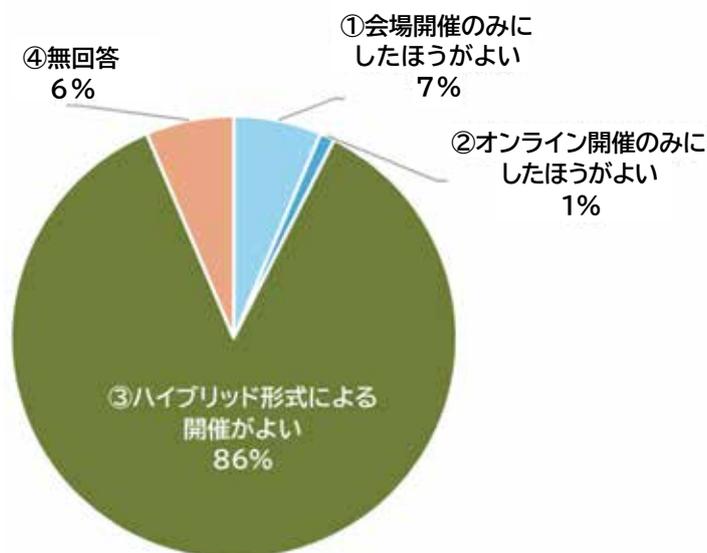
- ・展示ブースで新しい情報を得たので、多くの方と共有し、今後の啓発活動に生かそうと思っている。
- ・「サーキュラーエコノミー」という単語のみの理解でしたが、取組事例の研究等を通して業務につながるようにしたいと思います。
- ・今回お聞きした話のなかで、やはりサーキュラーエコノミーを進めていくためには、全体で連携して動いていく必要があると感じた。自治体職員として、どのように動いていくべきかを、今後考えていきたい。
- ・自分一人の意識した行動は小さなものでも、全体としては意味のあることに繋がる、周りへの影響にもなることから、無駄だとは思わずに、小さな行動変容も続けていこうと思った。
- ・サーキュラーエコノミーの考え方を自治体の計画に盛り込み、推進していこうと思う。

<②と回答された方>

- ・サーキュラーエコノミーや3Rは、CSR的に自発的な姿勢だけでは難しい。コストがかかる、素材の品質が下がる中で、それをクリアできる施策が必要。
- ・同じ思い、考えで行動されている仲間が多くおられることで頼もしく思った。いい意味で意識に変化はなかった。
- ・オンライン参加していたが音声の不鮮明で聞き取りにくかったので答えようがない。
- ・自身が所属する会社における業界では、安定した売り上げを確保できる仕組みづくりをイマイチイメージすることが出来ない。※3R・CEはとても大切で必要不可欠であることは理解している
- ・もともと意識があって参加しました。サーキュラーエコノミーを行動につなげるにはしくみ、あるいは制度、あるいは製品の製造段階から見直す必要があるので、特に国、地方自治体、企業の役割、行動が求められると思いました。2050年を目標にいまの廃棄物行政を循環行政に抜本的に変えていく決断と実行が求められると思いました。
- ・意識の変化より、サーキュラーエコノミーを進めるためには、様々な主体が関わりあって成り立つため、連携の難しさを感じた。

8. 今回の大会は会場及びオンラインを活用したハイブリッド形式による開催としましたが、これについてどうお考えですか。

- ①会場開催のみにしたほうがよい
- ②オンライン開催のみにしたほうがよい
- ③ハイブリッド形式による開催がよい
- ④無回答



9. 上記8で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

<①と回答された方>

- ・オンラインが機能していないから。
- ・直接顔を見たい。交流会でお話をしたいため。
- ・交流が非常に重要であると考えため
- ・臨場感がある。

<②と回答された方>

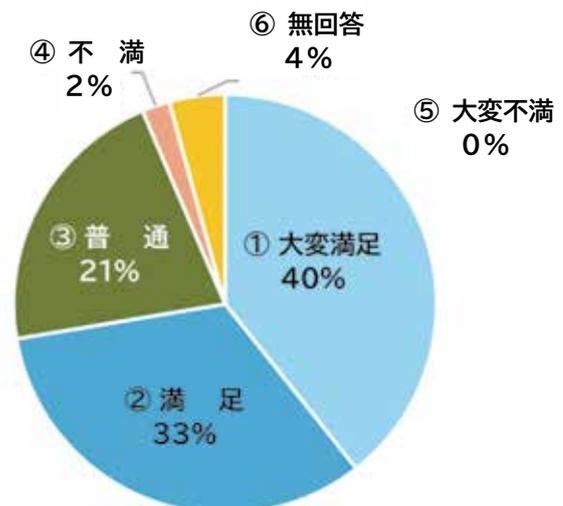
- ・参加者とのコミュニケーションがなければオンラインで十分と思う。

<③と回答された方>

- ・人手不足がどんどん進む中で一人当たりの仕事量は増加。時間をとって参加できる人はどんどん少なくなるため Web での出席は必要。
- ・たくさんの方が参加する事を優先です。手法は多い方が好ましいと思います。
- ・音質や画像等インフラさえ整えば、素晴らしいイベントであったと思う。
- ・臨場感が味わえる会場方式が良いと思いますが、遠隔地や移動時間を割けない方にとって講演を拝聴できることは意義あると思いました。
- ・素晴らしい内容だったので、より多くの方の目にとまるようハイブリッド開催でよいと思います。
- ・移動による CO2 削減に寄与できる？公共交通機関は売上げが減る？ガソリン・電気の使用量を抑えられる？ガソリン・電気会社の売上げが減る？車を運転しないことで事故が減る？車の販売台数が減る？既存の雇用は減る？一か所に集まることで個々の電力消費を抑えられる？大人数が移動すると公共交通機関の売上が増える？
- ・全国大会という性格上、来場希望者の全員が収容可能な会場は無いことと、バリアフリー・D&I の観点から職場・家庭・医療機関等から離れにくい方々に対してはリモートが有効かと思われます。
- ・会場でオンサイトで参加もいいし、遠方の者には気軽に参加できるため。

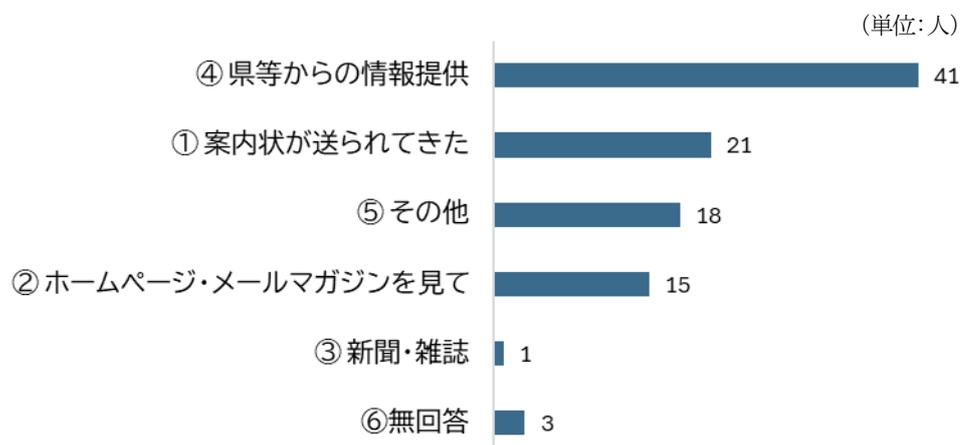
10. 今回の大会では、環境負荷軽減を考慮し、大会プログラムやステージプログラムはWEBでの配信とし、会場での配布は行いませんでしたが、そのことについてどうお考えですか。

- ① 大変満足
- ② 満足
- ③ 普通
- ④ 不満
- ⑤ 大変不満
- ⑥ 無回答



11 3R推進全国大会について何でお知りになりましたか。(複数回答可)

- ① 案内状が送られてきた
- ② ホームページ・メールマガジンを見て
- ③ 新聞・雑誌
- ④ 県等からの情報提供
- ⑤ その他
- ⑥ 無回答



<②「ホームページ・メールマガジンを見て」と回答された方>

- ・ 3 R推進全国大会のHP
- ・ 3 R・廃棄物 NEWS
- ・ 自治体あてのメルマガ
- ・ 環境省メールマガジン

<③「新聞・雑誌」と回答された方>

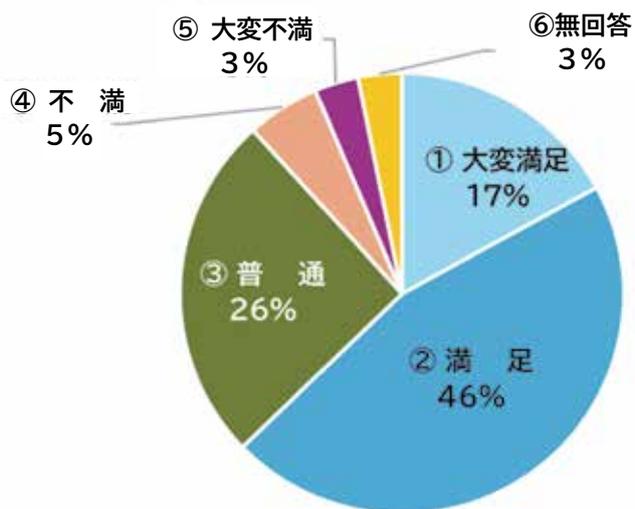
- ・ 埼玉新聞

<⑤「その他」と回答された方>

- ・ 埼玉県
- ・ 埼玉県サーキュラーエコノミー推進分科会からのメール
- ・ 廃棄物・3R研究財団からのメール
- ・ Google 検索
- ・ 関根さんからの紹介
- ・ 浅利先生からの紹介
- ・ 業界団体からの紹介
- ・ PET ボトルリサイクル協会からの紹介
- ・ 上司からの紹介
- ・ 同僚からの紹介
- ・ 知人からの紹介
- ・ 所属先での紹介

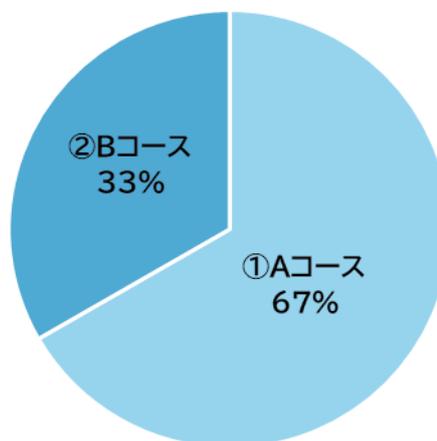
12. 大会運営について

- ① 大変満足
- ② 満足
- ③ 普通
- ④ 不満
- ⑤ 大変不満
- ⑥ 無回答



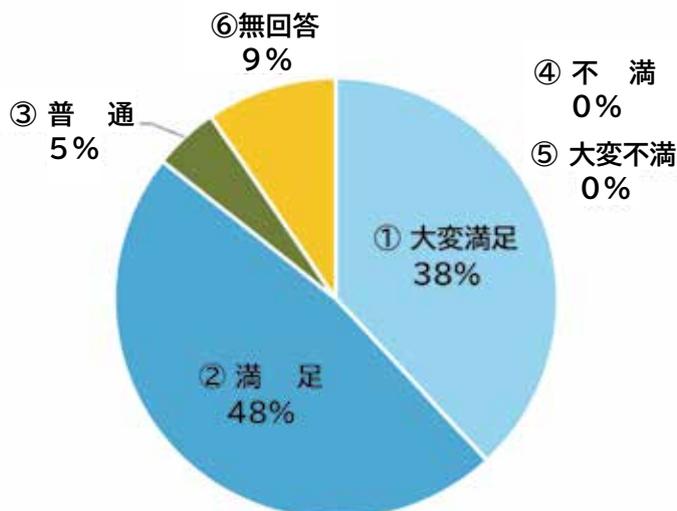
13 (施設見学参加者のみ) 参加された見学コースはどのコースですか

- ① Aコース
(オリックス資源循環(株)・ツネイシカムテックス(株))
- ② Bコース
(株)エコ計画・(株)ウム・ヴェルト・ジャパン)



14 (施設見学参加者のみ) 施設見学はいかがでしたか

- ① 大変満足
- ② 満足
- ③ 普通
- ④ 不満
- ⑤ 大変不満
- ⑥ 無回答



15 上記14で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

<①と回答された方>

- ・見学会は普段見たくても中々うかがうことができないので、大変に勉強になりました。また、質問が活発に飛び交い、その質問を聞くことで視野を広げることができました。
- ・現場の方の具体的な話と、実際に現地にて、見て、聞けて、感じる事が出来た点が特に良かったです。
- ・太陽光パネルのリサイクルに取り組む数少ない企業の見学ができたため
- ・事業者様が丁寧に対応して下さりありがたかったです。エコ計画様のベッドのリサイクルは専用機械が必要、ウム・ヴェルト・ジャパン様では太陽光パネルのリサイクル工程を初めて見た、ということがとても参考になりました。
- ・特にバイオマス発電について関心があり、丁寧な説明と質疑応答への対応、そして施設見学を経て、理解が深まりました。ありがとうございました。また、焼却灰の再利用についても、企業の創意工夫により多くの取り組みが行われていることに感心しました。採算ベースにのるよう公共も普及啓発を行うべきだと感じます。

<②と回答された方>

- ・オリックス資源循環に紙おむつリサイクルをお願いしております。見学は嬉しいチャンスです。
- ・初めて行くところだったので。
- ・実際見たことのない有機ごみのバイオマス発電などを見ることができたので。ただ、関係者の方の質問が長く、熱量が高い証拠とはいえ、時間が守られなかったのが少し残念でした。
- ・処理施設などの工程フローをわかりやすく知ることができたため。
- ・実際に営業運転している施設見学はとてもためになりました。
- ・個人的な思いとすれば、見栄えのする表面の部分だけでなく、もっと生々しいゴミ処理の現状を参加の方々に実感してもらえらる内容であれば、更に有意義であったと思いました。
- ・見学してみたいがその機会に恵まれなかったのが、貴重な機会となりました。
- ・環境整備センターや資源循環工場そのものについて、知る時間がほしかった（バス内ではなく）
- ・施設の視察時間や質問時間ももう少し欲しい
- ・これから重要になってくるであろう太陽光パネルの再資源化施設を見学することができたから。
- ・住んでいる自治体にはない施設を見学でき、実際に企業の方へ質問をすることもできたため非常に有意義であった。

<③と回答された方>

- ・私はAを希望しバスに乗りましたが、Bのバスでした。私の確認不足ではありますが、名簿確認で返事をしたので問題ないと思っていました。間違っていたら声を掛けていただければと残念です。Bの企業様とは取引先になるので1度視察しております。ウム・ヴェルト様が当時より非常に成長され太陽光パネル処理までされていることは間違った中でも勉強になった一つです。

17 ご意見・ご要望等があれば自由にお書きください。

- ・大会としては、資源循環・循環社会推進全国大会が合っているように感じました。
- ・会議資料のめくりは、講演者と事前確認されるのが良いかと思いました。
- ・パンフレット等の紙媒体配布は無しは良いと思います。会場内にQRコードを利用したパンフレットや当日の詳細時間のわかるスケジュールが取得できると嬉しいです。
- ・会場に来た方には、印刷したプログラム（1枚）を配布した方が良かった。（講演資料は不要）当日のタイムスケジュールと講演やパネルディスカッションの参加の方のお名前、出展企業や団体名くらいは印刷したものでいただけたら良い。
- ・オンラインの音声がおかしい際に事務局の対応は早く理由がわかり良かったのですが、その時間をわざわざ空けていたのでとても残念に思います。
- ・ライブ配信を見るために機材を揃えたが、時間の無駄だった。
- ・オンラインでの配信が、回線の都合で音声聞き取りにくく、残念でした。その場で改善できるような体制を準備しておいたほうが良いと思います。
- ・すでにHP上でもコメントされていますが、音声状態が最悪でした。回線状態によるとのことで、不可抗力だとは思いますが、講演の内容がどんなに良くても、あの状態で視聴を続けるのはさすがに苦行です。あの音声状態を視聴しただけで、切ってしまった視聴者もいると思います。最も残念に感じたのはその部分でした。内容そのものは良かったと思うので余計に感じました。アーカイブは報告書にまとめるなど、一部の方以外はなかなか視聴しないと思います。（リアタイで視聴できない人もいらっしゃるのでは必要とは思いますが。）
- ・参加者と対話（質問）できるのもよいかと思いました。少し一方通行になり過ぎていると感じました。
- ・事例報告は、内容も興味深く有意義ではあったものの、第2部が通しで3時間だったことから、今回のスケジュールでは休憩時間に充ててもよい。
- ・お一人30分ぐらいで終わってしまった。もっと話を聞きたかった。
- ・鎌倉サーキュラーアワード事務局を行いました。内容はほぼ一緒ですが構成が②→③→④→⑤→①→記念撮影→⑧ という形で表彰式の順番が違い、全員での記念撮影を行いました。まず記念撮影は、毎回行ったほうが良いのでは？と感じました。撮影をする間に少しの会話が生まれて、そのまま懇親会へという流れができるとと思います。今回は、最後に各所のコメントで終わり、その後別会場へとなったため、早々に帰る人や講演会場で名刺交換を少しだけする人が残りました。会場の温度感が分散化して終わったことが少し残念です。また表彰は市民部門をサーキュラーアワード鎌倉では最後にしました。今回のような専門家の話で終わるのではなく、市民部門を最後にしたことで、関係者も最後までいますし、どうしても堅い話になりがちな会議が非常に前向きな形で終わりました。ぜひ検討してください
- ・民間企業相手にしている場合は国・自治体が旗振り役になりコーディネートすることでよりCEと協創が活性化させていくものと感じたが、自治体が発注者側である場合には3R・CEを意識した発注となっているのだろうか？と強く疑問に思う。指導・監督する立場の官公庁はコーディネートするだけでなく、発注者として3R・CEを強く推進していくために、今足りないもの・今できていない事・これからやった方がよい事を検討してほしい。資料を紙媒体で配布しないことは大変良いことだが、できれば会場でのネット環境を確保していただければさらに良かったと思う。
- ・一過性の取組ではなく、動静脈連携による現実的且つ持続可能な取組を経済合理性と可能性を基に、今後も取り組んで頂きたい。一点、今後はリユースとリサイクルは分けて考えるべきだと思います（別物）
- ・今後も大会を重ねて開催する事により、持続可能な社会の構築に繋げていただきたい。
- ・本大会を開催頂き誠にありがとうございました。非常に有意義な2日間となりました。埼玉県内事業者の1者として自分たちなりに頑張っていく所存でございます。引き続き宜しくお願い致します。
- ・弊社はリサイクラーです。今後もサーキュラーエコノミー循環型社会のお手伝い進めてまいります。
- ・具体的な事例が多く、非常に満足度の高い大会でした。運営側の皆さん、ご苦労さまでした
- ・展示会場に来られる方がとても少なかったため、展示会場の場所がどこにあるのかを積極的にアピールした方がよいと思った。
- ・県知事とお話をしたかったです。
- ・施設の見学についてできればもう少し参加人数枠を増やしていただければ嬉しいです。非常に貴重な経験ができる場となるかと思っておりますので、ぜひご検討ください。
- ・私の落ち度ではありますが、コース違いに参加している者へは一言コース変更をしたかの確認をお願いしたいと思います
- ・埼玉県で紙おむつリサイクル事業を進めたい。ご協力をお願い致します。一般社団法人NIPPON紙おむつリサイクル推進協会です。



2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品

【小学生高学年の部】 愛知県春日井市立 高津南小学校1年生	【小学生中学年の部】 熊本県八代市立 本島崎小学校4年生
【小学生低学年の部】 愛知県春日井市立 高津南小学校1年生	【小学生の部】 愛知県春日井市立 大久保小学校5年生



2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式。2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞の受賞者による記念撮影の様子。



シンポジウム中の会場内様子



講演する岡田隆之(左) 廃物循環推進フォーラム出席

報告式では、2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。発表式には、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

大分県主催のシンポジウム

大分県では、2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式と同様に、シンポジウムを開催し、関係者らによる講演やシンポジウムが行われた。

講演では、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。



埼玉から未来へ！ サーキュラーエコノミーで地域活性化

■第10回3F推進全国大会は埼玉



岡田隆之(左) 廃物循環推進フォーラム出席



大分県環境部長 岡田隆之



岡田隆之(左) 廃物循環推進フォーラム出席

「埼玉から未来へ！サーキュラーエコノミーで地域活性化」をテーマとしたシンポジウムが、2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式と同様に、シンポジウムを開催し、関係者らによる講演やシンポジウムが行われた。

講演では、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。



岡田隆之(左) 廃物循環推進フォーラム出席

「埼玉から未来へ！サーキュラーエコノミーで地域活性化」をテーマとしたシンポジウムが、2024年度3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式と同様に、シンポジウムを開催し、関係者らによる講演やシンポジウムが行われた。

講演では、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。

また、シンポジウムでは、大分県環境部長の岡田隆之氏が、3F推進式スターコンクール最優秀賞作品発表式の様子が紹介された。岡田氏は、各賞を受賞した小学生らと、関係者ら約40人が参加し、関係者らによる賞状授与や表彰状授与が行われた。



パネルディスカッションの様子

※カラー版は、3R・資源循環推進フォーラムのホームページからダウンロード可能です。
<https://3r-forum.jp/activity/meeting/index.html>

第18回3R推進全国大会

開催報告書

令和7年2月

第18回3R推進全国大会実行委員会
実行委員会事務局：公益財団法人廃棄物・3R研究財団
東京都墨田区両国3-25-5 JEI 両国ビル8F
TEL:03-6908-7311 FAX:03-5638-7164

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [Aランク] のみを用いて作製しています。

この製品は、古紙パルプ配合率70%の再生紙を使用しています。このマークは、3R・資源循環推進フォーラムが定めた表示方法に則って自主的に表示しています。



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用